等經資令相觸者得彼配分之員數早速可令送遣博多也者依仰執達如件　建治元年十二月八日　武藏守　相模守　武田五郎次郎殿（蒙古襲來絵詞）

起し、一舉して日本を亡ぼさんとし、弘安四年征東行中書省を高麗に設け、征東元帥忻都、右丞洪茶丘をして、蒙古・漢・高麗の軍四萬人を率ゐ、九百艘の戰艦に乘じ、高麗より發せしむ、高麗の僉議中贊・金方慶之を導く。また右丞范文虎は江南の軍十萬餘人を起し、戰艦三千五百艘に乘じて江南より發し、全軍十四萬、海を掩うて來り、五月二十一日壹岐*對馬沖に合す。二島は第一著に蹂躙せられ、例によりて男子は屠られて、婦女は虜にせられぬ。住民皆山野に逃竄し、赤兒の聲によりて發見せられんことを恐れ、手づから其子を戮するものあるに至りぬ。敗報は矢の如く上國に達せぬ。風說は風說を生みて、國民歸嚮する所を失せぬ。或は云ふ、元兵已に長門より上つて、京師を衝くと。或は怪物北より南の天に亙ると。或は云ふ、神馬天空に戰ふと。或は云ふ、日本滅亡の神示ありと。舉國震驚、人事全く停止せられ、九州・中國の米穀京師に上らず。蒙古未だ上らずして京師の民、先づ餓死せんとす。是に於てか、朝議先づ後深草・龜山の二上皇をして、難を鎌倉に避けしめんとす。龜山上皇最も國難を憂ひ、自ら宣命を草し、自ら之を淸書し、死を以て國難に代らんことを伊勢の大廟に禱り、後宮の之を止むるを聽かず。已にして六月五日、元兵、博多の沖に現はれ、玄界・志賀・能古の三島によりて、博多を壓す。是より先き、北條實政、九州の軍事を督し、箱崎・博多の間に、二丈五尺の石築地を築き、前は亂杙を以て敵軍を遮り、後は馬に韓つて上るに便し、高きにより、俯して元軍を射んとす。これ文永の役によりて得たる戰術なりき。日本の軍士謂へらく、以て敵をして我が動靜を知らざらしむべしと。然れども案外にも、元軍は更に其船舳に近世の艦橋の如きものを作りて、高きによりて我軍を瞰視するの便を有したれば、我が動靜は秋毫も皆視察せられき。殊に彼我の强弱、武器の精鋭は、已に文永の役に於て知られたるに、加へて兵食繼がずして、軍士鎧の重きに堪へず、多く弓を引くの氣力なしと雖も、唯だ神明の加護を賴みて、萬一を僥倖するのみ。已にして我軍進んで志賀島の敵を打つ。草野次郎夜襲に先頭し、河野通宗之に次ぎ、大友貞親また之に次ぎ、各〻元兵を破るとを雖も、其石弩の强鋭なる、其隊伍の整正せる、其戰艦の堅牢廣大なる、到底我軍の敵にあらずして、これに近づくもの、船は破れざるなく、人は死せざるなし。然れども我軍の勇武なる勝利の望なき戰をなすもの八日、元軍遂に上陸するを得ずして、六月十三日、鷹島に退く。此の如くして一進一退、相持するもの十八日、六月三十一日の夜半より、颶風驟かに起りて、波濤洶湧、元軍大半顚覆す。我軍之に乘じて殘賊を掩擊し、七月七日に至りて戰を已む。此役元軍死するもの十萬人。高麗軍死するもの七千人。餘衆三萬三千人、僅かに生命を全うして高麗に逃る。

鎌倉の內亂、皇室の爭奪、皇位有期の閑職となる

是れ實に古今未だ曾てあらざる所の大勝なりき。然れども甚だ高價なる勝利なりき。何となれば鎌倉の衰滅、天下の大亂、實に是より始まりたればなり。弘安七

*壱野は伊豫の人、十年の中に蒙古來らずば異國へ渡りて合戰すべしと起誓し、誓紙を燒き灰となして飲む。

弘安の大敗より十四年永仁二年(元の至元三十一年)忽必烈死し子鐵木兒立つ。之を成宗とす。大臣策を立て日本侵略の志を捨つ。

年四月時宗、鞠窮焦慮の結果として、三十四歳にして卒するや、子貞時十四歳を以て繼で執權たり。陸奥守北條業時、加判す。時に北條時國、六波羅の南方を鎮し、聲望時貞より高し。時貞即ち目するに自ら執權たらんとするを以てし、事に託して鎌倉に招き、常陸に流竄し、後また之を殺す。此時に方りて鎌倉の老臣宿將、略ぼ盡きて、政所の大權悉く北條氏の手に歸す。貞時の外祖秋田城介泰盛、已に和田氏を滅ぼし、今や陸奥守に任じ、威名隆々、鎌倉の諸將皆其門に出入し頗る專横の跡あり。貞時の家宰平頼綱、泰盛と權を爭うて之を倒さんとし、泰盛を劾奏するに、頼朝の血統を受けたるを名として、源姓を稱するを以て叛逆を謀るの兆となして、之を誘殺す。已にして頼綱また專横放恣にして誅せらる。此の如く鎌倉の豪族、權家、交も相殺戮せらるゝ時、皇室もまた二派に分れて帝位を爭ひ天下の大亂此に萌す。初め後嵯峨上皇の未だ世にあるや、龜山天皇を殊寵し、後深草天皇を强ひて位を讓らしめ、且つ皇位をして、長く龜山の流に歸せしめんとし、後深草に與ふるに、長講堂領・法金剛院領・熱田社領、及び別納、播磨國衙、及び其別納を以てして、皇位を繼承せざる報酬とす。是れ事實に於て皇位を兩分せるものなり。故に後深草・龜山同母兄弟の間、互に嫉視し、後嵯峨上皇崩じ、尋で龜山天皇の太子、後宇多天皇の立つや、龜山・後宇多、相共に後深草を冷遇す。後深草、憤懣痛恨、禁ずる能はず。情を北條時宗に告ぐ。時宗乃ち後深草上皇の子、熙仁親王をして後宇多の太子たらしめ、弘安十年、貞時、後宇多天皇をして位を熙仁親王に讓らしむ。之を伏見天皇とす。龜山上皇之を悅ばず。北條氏以て意となさず、更に正應二年將軍惟康親王亂を謀ると稱し、倒さに網代輿に載せて之を京師に歸し、後深草上皇の第六子久明親王を立てゝ鎌倉の將軍とす。時人以て將軍京師に流竄せらるとなす。龜山上皇之を以て龜山の一統に對する侮辱となし憤懣已まず。時を俟つて報復せんと欲す。正應三年三月、賊あり、夜禁門に入り、宮女を脅かして帝の寢殿を窺ふ。宮女之を欺きて空室に入らしめ、帝をして女裝して之を避けしむ。已にして衞士、合圍して賊を攻む、賊乃ち紫宸殿に上りて自殺す。其帶ぶる所の劍に姓名を刻みて、太政大臣爲頼と云ふ。爲頼は甲斐源氏の末流にして、淺原八郎と稱し、剛猛武幹あり。徒を聚めて盜を爲すものにして、其佩刀を見るに前の參議藤原實盛傳家の名刀鎌尾と名づくるものなり。時人、以て龜山上皇、太政大臣を以て爲頼を募り、伏見天皇を弑せしめんとせるものとす。伏見天皇之を以て貞時に告げ、且つ云ふ、龜山上皇常に承久の事を憤つて已まず、其後をして帝統を承けしむるは鎌倉の利にあらずと。龜山上皇之を恐れ貞時に誓書を下して事なきを得たり。已にして貞時、伏見天皇をして其子胤仁親王を立て太子たらしめしが、永仁六年に至り、天皇遂に位を太子に讓る、之を後伏見天皇とす。時に年十一なり。龜山の一統、之を見て益す憤懣す。後宇多上皇使を發して貞時に告げて曰く、後嵯峨上皇の崩ずるや、龜山天皇の後をして、長く皇

位を繼がしむべしと定む。卿今や之を改めて後深草天皇の後をして位を重ねしむるは何ぞやと。北條氏の眼中、皇室なしと雖も、歴史的の積威は猶ほ蔑視すべからず。貞時、乃ち兩家を交絞せしめんとし、後深草・龜山の兩天皇の二統をして、毎十年に更る〳〵皇位を繼がしむるの約を立て、先づ後宇多上皇の第一皇子邦治親王をして、立て〻後伏見天皇の太子たらしむ。時は永仁六年八月なり。太子は天皇より長ずること三歳なり、斯くて在位四年にして正安三年、位を皇太子に讓る、之を後二條とす。また伏見上皇の第三皇子富仁親王を立て〻後二條天皇の太子たらしむ。世に後深草上皇の系統を持明院殿と稱し、龜山上皇の系統を大覺寺殿と云ふ。此の如くして一時五人の上皇あるに至り、皇位は、持明院派、大覺寺派の二派の間に受授するものとなりぬ。是より以往、幾十年、南北朝の終に至るまで、二派の爭權は天下紛亂の基となる。

皇族人物を出し、南北の武力平均し、北條氏民心を失ふ、僧侶再び武力を生ず

めに此くまで掣肘せられ、此くまで窮乏なる生活を營まざるべからざるに至りし結果として、皇族の才幹は非常に發達せぬ。皇族は藤原氏の文弱的專制の時に際しては、貴族的の宴晏驕奢の空氣に圍繞せられて、其心識微弱となりぬ。今や北條氏の武斷的專制に迫られ、窮乏に苦しむの結果は、其の智慧を磨き、其心識を敏ならしめ、其識弄機巧の才は、殆んど陰謀を以て生命とする公卿にも劣らざる然りと雖も飢腸奇策を出す、武家のた

應長元年十月北條宗宣執權となる、此月北條貞時死す。正和元年六月北條熙時執權となる、此月北條宗宣死す。正和四年八月名越基時執權となる、十月北條熙時死す。正和五年七月北條高時執權となる。

に至りぬ。中にも龜山天皇の如きは、女事に於て時人の批評を受けたりと雖も、膂力の强き、氣象の闊達なる、古今多く見るべからざる君主なりき。而して伏見天皇の第三子富仁親王、後二條天皇の後を承けて立つ。之を花園天皇とす。花園の後は大覺寺派なる後宇多の第二子後醍醐出て、朝廷にては益〻英明有爲の君を出すに力つて、鎌倉に於ては是より先、貞時、花園天皇の應長元年を以て死し、後其子高時執權となる。驕奢淫逸を縱にして、朝野南北强弱の勢將に一變せんとす。貞時實相の風あり。時頼の遺風を慕ひ、民の疾苦を以て心となし、親しく民政の局に當りて、守護・地頭の奸曲を發く。然れども貞時の獨力を以て支へんには、天下の大勢は、餘りに甚しく傾きぬ。鎌倉幕府が天下の實權を掌握したるより已に一百三十年。此間古來未だ曾てあらざる治平にして、民生の保安、物貨の生産、前古に比なく、且つ久しく京師の政治、諸國の武士を苦しむるを見て、其負擔を輕くせんがため、頼朝の時三年在京大番の古制を改め三年に一度鎌倉に勤務するの制となす。かくして諸國の豪族餘裕を生じて、意滿ち氣驕り、下民に向つては奸曲を弄して民田を侵し、法令以外の徴發を命じて、上、鎌倉に向つてはまた訴訟を起し、命を奉ぜざるもの益〻多くなるに至りぬ。此の如く諸國の武士が泰平によりて自由を味ふに方りて、蒙古の警は忽ち彼等をして公役奔命に勞れしめたり。文應元年忽必烈立つて貢を四方に徴するの風説を聞きて、始めて戒心し、文永五年高麗の使潘阜の書を得て、

初めて四方に號令して軍備を充實せしめしより七年にして、文永十一年の役あり。是よりまた七年にして、弘安四年の役あり。蒙古のために一國を擧つて軍役に供するもの前後十四年。兵は南北に往還して、奔命に勞れ、民は東西に轉送して、公役に勞る。之に加ふるに宮中の迷信、民間の無識あり。神佛に禱つて外寇を夷げんとして、神社・佛寺の寄進を競ひ、幸に外寇を退くるや、是れ神佛の冥助に出づとなし、十年征戰の武士、未だ恩賞なきに、空言閑坐の神官・僧侶、先づ金銀・土地の賜を得しかば、外、蒙古に勞れたる國民は、內、神佛に奉ぜんが爲に勞れたり。若それ其の政治上に及ぼすの結果に至つては更に大なり。勇武、天下を慴服せしめたる東人は、其の短所たる水戰に於て、南人と角したるがために、西南武士をして、東人を恐るゝに足らずとするの念を生じて、中國・近畿武士をして、源平以來再びまた首を出すの機會を得せしめたり。北條氏の强硬政略の下に屈服したる僧侶・神官をして、其の政治的勢力を回復して、容易に屈すべからず、驕慢、兵を養ひ、また藤氏を凌ぎたる時の如くならんとするに至らしめたり。乾元元年、朝廷、禪宗のため嘉元寺を建てんとするや、叡山の僧徒、暴訴して之れを遮る。已にして德治三年御宇多上皇、御室仁和寺の僧正禪助を寵信して、故の益信僧正に本覺大師の號を諡るや、自餘の僧徒、囂然として起つて之を爭ひしかば、朝廷之に恐れて、旨を北條氏に諭し、また諡號を止めんとするや、北條氏以て寺院に屈すべからずとなしゝかば、また諡號を廢せざらんとす。僧侶聽かず、西塔院主忠源・楞嚴院長吏等の爲、三萬疋の財を積んで鎌倉に遊說せしむ。鎌倉聽かず。已にして山僧神輿を奉じて京に出でんとするや、鎌倉の使信濃前司時連、院宣によりて神輿を防ぐ。是より各派の僧侶多く起つて事を生ぜんとし、多武峰の僧、鞍馬の僧、また叡山の僧に力を合せ、將に一大爭亂を生ぜんとす。是に於か北條氏寺院と交綏して平和を保たんと欲し、長井左近大夫入道道漸、秋田城介時顯をして上洛せしめ、私に仁和寺に說きて大師を辭せしむ。叡山の僧已に北條氏を以て屈したりとなすや、其氣更に昂り、仁和寺を以て叡山の末寺たらしめずんば聽かずとなし、是より紛議百出、山僧却つて、六波羅府を襲はんするに至り、武門の權、漸く傾き始まりぬ。略言すれば蒙古襲來のため、日本勢力の偏重を改め、南北稍相等しからしめんとせるなり。加ふるに、國難は夫役を增加し、民政を紛亂せしめ、鎌倉の法律、地方に其力を失せしかば、北條氏が唯一の後楯として皇室をも凌ぎたる民心は蕩然として去り、新勢力は舊勢力を覆さんとし、社會の紀綱は紛然として崩れ始めぬ。英雄ありと雖も、其後を善くする能はざるなり。故に貞時微行して、武士の奸曲を發くと雖も、唯だ是れ局部の治療のみ。大弊宿病已に救ふべからず。況んや高時少にして驕奢、淫靡の俗に染み、家宰長崎高資に政柄を委ね、私曲、貪亂を恣にせしむるをや。高時の時に至りて

第二十章　後醍醐の親政（神武紀元千九百七十二年より千九百九十六年に至る）

北條高時の失政、驕奢

北條氏の其權勢を作るや、常に民政の上に立つ。而して民政の要は寡欲公平にあり。寡欲公平は自ら奉ずる事質素武朴なるにあるを知り、官は從四位下を最上として之より進まず。土は相模・武藏を限として、多きを貪らず。京師脂粉の氣に遠かり、務めて北人固有の豪健なる精神を保存せんと欲したり。故に京師の公卿・皇族の代る〳〵來つて、鎌倉の將軍となるや、和歌・宴遊・安逸の習俗を將ち來れりと雖も、此等の習俗は『將軍家』と云ふ狹隘なる區域内に幽閉せらるゝが如くにして、一般の北人を浸染する能はず。鎌倉は依然として疎宕朴素の風を保ちたりき。然るに高時の前後に至つては、全鎌倉を擧つて悉く將軍家が京都より持ち來れる安逸宴樂の風に浸染し、日夜、白拍子・琵琶法師・猿樂・田樂の戲に放心して、政務を省みず。又社會の進歩は自然に生活を進め、支那樣の食物を生ぜしめて、起居王公の風に模せしめ、天下の執權たる時賴の母を以て、親しく障子の破れたるを繕うて以て勤儉の敎を垂れたる松下禪尼の子孫、今は三十七人の妾を蓄へ、毎人二三の領所を與へ、新座・本座の田樂、二十餘流にして、其俳優二千餘人あるに至る。中につきて高時最も鬪犬を好みしかば、部下多く奇犬を養うて其意を迎へ靡然として風を爲し、武士多く美食を盡くして鬪犬を養ひ、是より毎月十二回鬪犬の會を開きて二三百疋を一場に會して勇怯を鬪しむ。之が爲鬪犬の鎌倉に集るもの四五千。一疋の價二三十貫より百貫に至り、高時の鬪犬道を行くや路人笠を脫して跪くに至る。此等の驕奢獨り高時に至りて發したるに非ずと雖も、高時に至りて最も其流弊を極めしなり。驕奢より寡欲失せ、寡欲失せて賄賂來り、賄賂來りて誅求となり、偏頗となり、北條氏が天下に立つ所以の力は根本より失せぬ。

水饅頭、豆腐、

後醍醐出づ、中宮廉子政治に與かる

鎌倉が此の如く天下の信用を失するの時、西、京都にありては、近世稀有の才能ある君主を見るに至れり。文保二年、花園天皇二十二歳にして、三十一歳の太子尊治親王に位を讓る。之を後醍醐天皇とす。後宇多の第二子にして、母は談天門院と云ふ、參議藤原忠繼の女なり。後醍醐大覺寺派を以て後花園の太子たる十年にして、且つ年齒、花園より長ずること九歳、後宇多上皇等其一日も速に皇位につかんことを望む。北條氏則ち花園に促して位を去らしめて後醍醐を立てしなり。後醍醐少にして才氣あり。龜山上皇の殊寵を受け、長く儲位にありしがため、中外の事情に通じ、且つ其讀書學問は人に秀づること一等にして、その位に即くころは、昂然自ら任じて古の賢君の治を以て期し、精勵治を求め、大津葛葉の外、皆新關を廢して民に便す。また久旱して穀價騰貴するや、御膳を減じ、沽酒の法を定め、都下の豪戸富民に諭して、貧民を饒はさしむ。京都の小民

相慶して以て明主となし、聲望直ちに五畿に傳はり、人心漸く皇室に向ふ。之より先き太政大臣西園寺實兼の女を納れて中宮とし、後京極院と號す。安野中將藤原公廉の女廉子後京極院の侍女たり。帝一日、之れを見て直ちに殊寵を與へ、遂に准后の位に上らしむ。皇子恒良・成良・義良は其腹に出づ。これより廉子の寵遇後宮を傾け、御前の評定、難訴の沙汰も皆廉子の喙を容れざるなきに至り、稍や民望を得んとせる朝政、また漸やく亂れしかば、外間、廉子を以て鳥羽上皇の美福門院に比し、亂階或は之より生ぜんことを恐る。然れども天皇之を察せず。其出恒良を立てゝ皇太子たらしめんとす。北條氏聽かずして曰く、是れ大覺寺派をして長く皇統を專らにせしむるものなりと。遂に後二條の皇子邦良を太子とせしかば、大覺寺の諸流皆切齒して、持明院派と北條氏とを憤る。中にも三位の內侍廉子、其子を立つるを得ざるを怨みて恨骨髓に徹し、北條氏なかつせば、天下思のまゝなるべしと謂ふ。天皇此より北條氏を亡ぼして君主親政の昔に返さんと欲するの志あり。時に河內守垂氷の廣信京師に宿直して此形勢を目擊し、思へらく北條氏、天下の信を失すと雖も、民猶ほ北條氏に待つあり。北條氏ならずして國人に和樂を與ふべき政を爲す者なかるべし。後醍醐、賢君の名ありと雖も、其爲す所甚だ輕し。若し朝廷の爲すがまゝに一任せんか、世は再び保元・平治の昔に返らんこと、照々として明かなりと。乃ち大宮大納言惟通により、上書して帝を諫め、心を女色に斷つて、意を民政に留

廣信は藤原藤房の友人にして常に之と共に學を論ずるを以て氏尊なりしが、後醍醐の初め朱子の註釋書集を我國に至るや、藤房深く味はひ、所信を尊び、藤房を勸めて學ばしむ。然れども藤房の學、遂に儒佛を混じ、廣信の學、遂に聽く能はず。後醍醐は再び帝位に即くの思ふに

所在の武士、北條氏の命を奉ぜず

めんことを勸め、飄然として去つて故鄕に入り、妻子と共に山野に耕し、また世事を省ず。

然れども世は西行の跡を追ふ廣信の如きものゝみならずして、時會に投じ、功名を爲さんと欲する廣元の如きもの多かりき。先づ皇族にしては大覺寺流は如何にもして北條氏を亡ぼし、持明院派を衰へしめ、以て皇統を長く一流に專らにせんと欲するあり。公卿にしては西園寺の一家のみが鎌倉に結びて、太政大臣・關白を專有し、女御・皇后を出すこと、後嵯峨以來已に五代なるを憤りて、如何にも北條氏を亡さものにして、西園寺家の權勢を奪うて其榮華を分たんとするものあり。之を寺院としては、北條氏衰へたりと雖も、猶ほ武權を握つて、朝廷の彼楯となるがため、嗷訴、力訴も其功薄きを憤り、哀れ神輿一たび動かば朝政ために止まりし藤原氏の世に返さんと欲して、北條氏の亡滅を希ふ延曆寺・東大寺あり。而して諸國の武士また泰平日久しきが爲、其實力漸く發達し、其所領、官職、其實力に伴はざるが爲、世變に乘じて其大志を遂げんとするものあり。源平二氏の大亂以來、久しく首を屈したる武士が、漸やく其傷痍を回復して、世變を待つあり、況んや鎌倉譜代の諸士もまた高時の驕奢、長崎高資の偏頗に望を絕つて、世變を望むある、天下大亂の兆、歷々として存したりき。而して先づ此の大勢に乘じて陳勝・吳廣たりしものは、安藤又太郎季長なりき。安藤一家は北條義時の世より、奧州津輕を領せる者なり。此時一族の中五郎なる者、又太郎季長と從

日、藤房、世を捨て廣信の爲すもの所に惑じたるか。廣信以て氏尊なりしが、後醍醐の初め朱子の註釋書集を我國に至るや、藤房深く味はひ、所信を尊び、藤房を勸めて學ばしむ。然れども藤房の學、遂に儒佛を混じ、廣信の學、遂に聽く能はず。後醍醐は再び帝位に即くの思ふに

後醍醐の親政　所在の武士、北條氏の命を奉ぜず　三九一

父昆弟を以て其所領の地域を爭うて鎌倉に訴ふ。長崎高資、二人より共に賄賂を受けて久しく訴を決せず。二人怒つて鄉里に歸り、一族郎黨を募りて兵を擧げ、戰によりて訴を決せんとす。高貧人を遣りて之を和解せしむれども聽かず、五郎遂に敗死す。又太郎、已に勝つと雖も、却つて鎌倉の譴を得んことを恐れ、寧ろ鎌倉の兵と戰つて死せんと欲し、族黨を募り、兵糧を集め、浮浪を募り、近傍を略せしかば、鎌倉則ち將を發して之を攻むると雖も、勝つ能はず、却つて士兵のために劫掠せらる。然れども高貧以て意と爲さず、眇たる北卑の士兵、顧みるに足らずと爲す。此に於てか世變を待ち設け、機會もあらば乘ぜんとせる者は、私かに鎌倉の武權已に恐るゝに足らずとなしゝかば、攝津の住人渕邊右衞門尉なるもの、また兵を起して近鄰を攻略し、六波羅の命を奉ぜず。北條氏乃ち河内の人、楠多門兵衞正成に命じて討つて之を夷げしむ。已にして紀伊の安田莊司も、また兵を擧げて叛す。また正成をして夷げしめ、其所領を正成に與ふ。已にしてまた大和の越智八郎もまた叛す。六波羅兵を出して之を攻めて勝たず。また正成をして擊つて之を夷げしむ。斯の如くして、刻々北條氏の不信、武權の衰弱は天下耳目に印せられ、西南武士は漸く頭を擧げ、他年、宮廷黨の勇將たる楠氏は、先づ鎌倉黨として首を擧げ來れり。

朝廷、武士と結びて鎌倉を覆さんとす

斯の如く天下已に動搖するや、公卿長く默する能はず。正中元年、權中納言日野の資朝・右少辨藤原の俊基・中納言四條の隆資・大納言尹の師賢・平の成輔等、謀主となりて、僧侶、及び武士と結託す。時に美濃の住人、土岐伯耆の十郎頼兼・多治見の四郎次郎國長の二人あり。自ら清和源氏の後胤と稱し、武勇の名あり。資朝、事によりて之と親近し、宮中に無禮講なるものを設け、四人の謀主、土岐以下の武士及び公卿には洞院左衞門督實世、僧侶には伊達の三位房游雅・聖護院の法眼玄基、武士には足助次郎重成等を會して、衣冠を脱し、位次を亂し、二十餘人をして酒を行らしめ、淫蕩、猥雜を極め、交情相熟するを俟つて陰謀を告ぐ。猶ほ世人の之を怪しまんことを恐れ、文名ある玄慧法師をして韓退之の文を講ぜしむ。已にして頼兼の族黨、頼員、妻と別を惜しみて其の陰謀を告ぐ。妻之を其父に告ぐ。父は六波羅府の將、齋藤四郎左衞門尉利行なり。六波羅の北方、常磐範貞先づ揚言して曰く、攝津葛葉の民、代官と爭うて亂を爲すものを征せんがため、四十八所の篝火及び在京の武士を募ると。宮廷の黨與、事已に洩れたるを知らず、六波羅の催促によりて葛葉に赴かんとす。六波羅の府人、急に擊つて土岐・多治見の族黨を亡ぼし、俊基・資朝の二人を執へて鎌倉に送る。時に正中二年九月なり。俊基鎌倉にありて頻りに事に與からざるを辯じ、無禮講を知らず、文禮講を知るのみと云ふ。鎌倉相議して資朝を佐渡に流し、俊基を釋して京に返らしむ。後醍醐、乃ち詔文を高時に下して曰く、叡慮不レ僞處、任二天照覽一と。高時また深く穿鑿せず。

後醍醐、寺院に賴つて北條氏を謀る

越えて嘉暦元年三月に至り、太子邦良親王薨ず。邦良は高時が曾て三位の内侍廉子の子、恒良を排して立てたるものにして、其の薨去は持明院派の悲みにして、大覺寺派の喜悅なりき。故に後醍醐之を機として護良親王を立てゝ太子とせんとす。護良は大納言三位源師親の女によりて生める所にして、剃髪して妙法院主たり。尊雲法親王と稱す。資質俊輕勇武あり。氣象峻嚴、最も朝廷の公子に缺く所の膽氣を有し諸ろ事を好む公卿の希望を一身に負ふ。後醍醐、恒良に機さて之を愛す。乃ち北條氏に詔して曰く、護良を立てゝ太子と爲し後嵯峨帝の遺詔の如くせんと。高時聽かず、兩統交立の約を主張し、後伏見の皇子量仁親王を立てゝ皇太子とす。後醍醐之によりて益〻憤懣し、中宮の安產を祈るを名として、忠圓・文觀・圓觀の三僧をして、北條氏を呪詛せしめ、元德二年二月奈良に行幸して東大寺に入り、衆徒を煽揚して其心を攪り、また還つて叡山に行幸して山門の大衆に結び以て北條氏を擊つに備ふ。護良また讀經禮佛を廢して、專ら武技を磨きしかば、藤原氏以來却掠鬪爭に習へる山僧は今は忽ち公然たる一大軍隊と化せぬ。已にして天皇の企謀稍や洩る。六波羅則ち三僧を執へて鎌倉に於て拷問す。文觀最も剛愎にして服せざりしが、遂に水火の責に堪へずして自白し、忠圓、怯惰、直ちに自白し、尊雲法親王、俊基の謀主たり、天皇、兩大寺院を誘ふを言ふ。則ち文觀を硫黄ヶ島に、忠圓を越後に流竄し、圓觀を結城上野入道に預けて奥州に下し、また俊基を執へて之を大磯に斬り、前年佐渡に流竄せし資朝を殺さしむ。

皇族兩派相陷搆す、後醍醐蒙塵を恐れて脫奔す

之より先き太子邦良の薨ずるや、大覺寺流は私かに相賀したりき。今や大覺寺派の失敗はまた持明院派のために私かに祝せられたり。持明院派思へらく後醍醐、必らず廢せらるべく、帝位は必らず持明院派に落ち來らんと。案外にも後醍醐は其位を去らず、帝位は落ち來らざるなり。此に於てか甚く望を失して早く廢黜あれかしと思ひ、遂に使を鎌倉に下して後醍醐の陰謀、隱れなし、之を糺さずんば天下の大亂たるべしと云ふ。鎌倉乃ち二階堂貞藤等をして、三千の兵を率ゐて京師に入り、後醍醐を遠島に移し、護良親王を硫黄ヶ島に流さんとす。護良諜して之を知り、帝を勸めて笠置山に行幸せしむ。帝之を聞き、從臣の慫慂により、遂に女裝して出づ。相隨ふ者尹の大納言師賢・萬里小路中納言藤房・其弟季房・源中納言具行・按察使大納言公敏・六條少將忠顯・大膳大夫重康・樂人豐原兼秋・隨身秦久武等のみ。先づ南奈良に至りしに、衆徒の心計るべからず、乃ち一味の衆徒のみを率ゐて、笠置に至り、別に師賢をして天皇と稱して、四條中納言隆賢・二條中將爲朝・中院左中將貞平を從へて、叡山に至らしむ。山僧大に喜び近國の武士と力を幷せ、六千人を以て守備を整へ、將に六波羅を襲はんとす。六波羅、山僧淨林房豪譽の内通によりて之を知り、急に五千餘人を發して之を攻む。山僧能く防ぎて容易に破るべからず。已にして天皇と稱せるもの實は師賢なること露

るゝや衆心離散して、山僧遂に敗走し、護良・師賢もまた笠置に走る。

正成の現出、後醍醐隱岐に遷さる

此時に方つてや西南の武士、鎌倉の武權恐るゝに足らざるを發見せしかば、所在、力を養ひ、機に乘じて起たんとす。中につきて元亨正中の年、高時の命により、近畿の亂を夷げし楠正成、最も勇名あり。後醍醐乃ち使を發して之を招く。正成召に應じて至り、身を以て王事に勤めんことを誓ひ、還つて赤坂の城を修めて、六波羅の兵を待つ。已にして叡山を攻めし北軍、勝に乘じて直ちに笠置を攻めて之を拔くや、帝走つて赤坂の城に至らんとして道に執へらる。此に於てか高時、二階堂貞藤・安逹高景をして、皇太子量仁親王を立てゝ帝位に即かしむ。之を光嚴帝とす。また後醍醐を隱岐に遷さんとし、三千人をして之を護送せしむ。備前の人、兒島高德其族黨と共に道に帝を奪はんとして船坂に俟つ。車駕船坂に出でずして山陰道に出づ。高德急に之を追うて及ばず、族黨悉く散ず。高德乃ち單身之を追うて一夜美作の院の庄の行在に忍びて櫻樹を＊削り、字を書して曰く、天莫空勾踐、時非無范蠡と。明旦警固の武士之を見て怪み、其意を解する能はず。天皇獨り之を見て心私かに喜ぶ。已にして天皇隱岐に至り、國分寺を以て行宮とす。朝臣の從ふもの唯だ一條の頭大夫行房・六條少將忠顯・三位內侍廉子のみ。

北軍戰志なく、所在の豪族、北條氏に背く、新田義貞、赤松圓心出づ

之より先き、北軍已に笠置を落すや、直ちに赤坂に正成を攻む。正成衆寡敵せず、自殺せりと號して兵を拔きて退く。備後の人、櫻山茲俊もまた兵を擧げて一の宮に城き國中を徇へしが、笠置落つるに及び、黨與離亂、茲俊自殺す。北軍思へらく、天下是より無事なるべしと。然れども禍患は、京畿の中より起りぬ。護良親王は吉野に據り、土豪竹原八郎の女を納れて其族黨に賴り、また紀伊の人野長瀨兄弟の兵を幷せ、吉野の僧兵三千餘人を以て、吉野河岸に城を築き、令旨を諸國に發して勤王を勸む。正成もまた急に起つて湯淺六郎定佛を攻めて、之を降す。湯淺は六波羅府の命を奉じ、正成に代つて地頭たりしものなり。正成其兵を併せて近傍を略定し、勢漸く强大にして、今は容易に征服すべくもあらず。之と共に護良の從士、赤松律師則祐、其父圓心に勸めて兵を擧げしむ。圓心は播磨の人、自ら源氏の子孫と稱し久しく功名に意あり。護良の令旨を受け、黨與を募りて一千餘人を得、播磨佐用の庄、苔繩山に城を作り、杉坂山に二關を設けて山陽・山陰の交通を塞ぐ。是より南方の聲息、六波羅に通ぜず。六波羅府、急に使を發して形勢容易ならざるを鎌倉に告げ、坂東の諸族を促して西上せしむ。北條の一族、外樣の大小名、京師に上るもの、＊一百三十二家、兵數十餘萬。然れども其心一ならず、寧ろ天下の形勢を觀望せんとするもの少なからざりき。故に九月二十日鎌倉を出でゝ十月八日先陣已に京師に到るに、後陣は猶ほ足柄を越えざるものあり。以て其の戰志なかりしを見るべきなり。已にして河野九郎、四國の勢を率ゐて尼ケ崎より上洛

＊兒島高德に關しては近時重野安繹氏考證あり、兒島を以て、烏有先生とす、然れども余は之を取らず。備前の人、石坂堅壯氏、最も能く考證あり、其眞實の存在を論ず。余は石坂氏の説を信ず。其説によれば高德は修驗者の家に出づ、備前兒島郡林村に五流と稱する修驗者五家あり、尊瀧院、傳法院、太法院、報恩院、建德院是也。此五家代々の國主も其待遇を特異にす。尊瀧院は承久の役、北條義時のために遷されし後鳥羽帝の子頼仁親王の後也。高德尊瀧院に生ると、此外また下修驗者なるものあり宮初親王に附隨せし公卿の後なりしと云ふ。

＊北條の一族には、阿曾、名越、大佛、武藏、伊具、陸奥の諸家、外樣には千葉、宇都宮、

小山、武田、小笠原、三浦、土岐、葦名、佐々木、千田、結城、小田、長沼、長崎、長江、河越、狩野、波谷、伊東、安藤、工藤、宇佐美、佐野、二階堂、安保、南部、山城。

し、厚東入道・大内の介、安藝・長門・周防の兵を率ゐて海路兵庫に上り、甲斐・信濃の源氏は、中仙道を經て、江馬越前守・淡河右京亮は、北陸の兵を率ゐて上洛し、九州を除くの外、北條氏の命を以て動かし得べき總べての兵は、京師に集りぬ。然れども、數十萬の大軍、徒らに集りたるのみにして、彼等を統一して動かすべき首領を有せざりき。北條氏の一族仲時・時益、六波羅を鎮すと雖も、泰時が承久の戰を指揮したるが如き威望あるにあらず。諸將各〻相高ぶつて統一を缺く。故に其幾十萬の衆も猶ほ幾萬の兵の如し。彼等は元弘二年二月先づ赤坂・千窟早に正成を攻めたり。而して連戰連敗、徒らに正成の功名を成さしめぬ。已にして吉野を陷れしと雖も、却つて護良の指揮を奉ずる土寇の爲に、其糧道を妨げられて、衆心、紛々、歸一を失し、戰志なく、觀望を事とする諸將をして、愈〻自ら危ましめたりき。而して諸將の中、最も早く心を飜して勤王黨に向へる者は、新田義貞なりき。形勢此の如くなるが故に數十萬の衆ありと雖も、正成をして千窟早を守らしむること五十餘日、遂に之を拔く能はず。此時に方つて、後醍醐を守護する佐〻木清高の族人義綱、帝を奉じて事を擧げんとし、正成・圓心の事を以て私かに帝に奏して、還幸を勸む。帝一夜女裝して內侍三位と號し、源忠顯を從へて逃れ、千波港より舟に乘じ、風に送られて二月伯耆名和港に著く。忠顯自ら州の豪族、名和長年を說きて之に賴る。長年悅んで之を諾し、一族百五十人、帝を船上山に擁して近國の武士を募る。佐〻木清高之を攻めて勝たず。形勢漸く張り、佐〻木義綱・鹽冶高貞・兒島高德等を初めとして、豪族相率ゐて來る。六波羅の諸將之を聞きて震驚す。已にして、赤松圓心は六波羅の兵を攝津の麻耶山に破り、士居・得能の二氏は、伊豫に起りて、長門の探題北條時直を追ひ、菊池氏は肥後に起りて、九州の探題北條英時と戰ひ・所在の豪傑相起つて北條氏の守護・地頭と戰ふ。

足利高氏、六波羅を陷る

時に足利高氏、北軍の中にあり、其先、源義家に出づ。義家の子義國、罪を得て下野に流さる。義國二子あり、義重・義康と云ふ。義重は上野の新田に居りて、新田氏の祖たり。義康は下野の足利に居り、足利氏の祖たり。故を以て高氏、また鎌倉中の名族として推尊せらる。今や、北條氏、天下の權を失するを見て、變に乘じて家を起さんと欲し、族黨細川和氏・上杉重能また之を慫慂す。故に其高時の催促によりて鎌倉を出づるや、已に異志あり、妻子を伴うて發せんとす。長崎高資之を疑ひ、高時に勸めて、其妻子を質として且つ誓書を徵せしむ。高氏之を拒まず、高時心則ち釋け、且つ之を勵まさんが爲、源家傳來の白旗を以て贈とす。高氏私かに其吉兆を悅び、弟直義・吉良・上杉・仁木・細川・今川・荒川・以下の族黨三十二人、*高家の一類四十三人と共に、三千人を率ゐて西上し、直ちに使を伯耆に走せて、後醍醐を助けんことを內奏す。帝固と其威名を聞くを以て、大に喜び、朝敵退治の倫旨を下す。已にして源忠顯・赤松圓心等京師を攻む。名越高家、高氏の陰謀を知

*足利氏の一族、高師直の家最も大なり。

らず、聞心等を邀へ孤軍奮闘矢に中つて死す。高氏之を聞き、直ちに丹波路を指して進み、篠村に至りて勤王の意を明かにして、近國の武士を募り、二萬五千餘人を得て、五月七日、忠顕・聞心と相應じて六波羅を攻めて之を破る。仲時・時益、光嚴帝・後伏見・花園の三皇を奉じて北に奔りしが、時益道に流矢に中つて死し、餘衆、近江の番場に至るころ、士兵數十人のために攻められ、死するもの四百餘人。仲時自殺して新主二上皇皆南軍の執ふる所となる。此に於てか所々の北軍皆或は奔り、或は降り、千窟早の圍も從つて解く。

義貞、鎌倉を覆す

之より先き新田義貞、北軍の衆心懈怠して鬪志なく、天下大亂の兆あるを見、人をして護良親王の令旨を請はしめて私に鄕里に歸りしが、義貞の鄕最も豪富多きを以て、高時軍費を課すること最も多し。義貞之によりて衆心を激勵し、高時の使を殺して、之を梟し、族黨山名・堀口・大館・岩松・桃井・脇屋・江田、及び越後にある支族里見・島山・田中・大井田・羽川と共に兵を擧げ、守護長崎四郎左衛門を破り、進んで武藏に入るや、高氏の子千壽（義詮）、また紀五郎左衛門に擁せられて義貞の軍に加はり、勢威漸く張る。此に於てか上野・下野・上總・常陸・武藏の豪族來り合するもの無數、鎌倉の兵と入間河に戰つて之に勝ち、進んで分陪に迫るや義貞大敗、全軍將に潰走せんとする時、相模の人三浦・大和多の族黨義貞を助けて鎌倉の軍を攻めて之を破り、長驅席卷して鎌倉に入り、三方より之を挾擊す。之より先き高氏背叛の報已に至りて、衆心沮喪す。今やまた義貞の襲擊に遇うて、將士皆絶望し、堅忍勝を望むよりも、寧ろ勇戰して潔よく死せんことを欲し、猛將勇士、多く陣沒せしかば、五月二十二日、高時遂に葛西谷に自殺し、征夷大將軍守邦親王、剃髮して義貞に降る。此の如くして賴朝以來十二將軍、十五執權、一百五十年の覇業は、一朝にして滅し、久しく夢想せられたる君主親政の時は來りぬ。

王朝武士黨の反目、人心王政を厭ふ

然れども事實は君主親政の必ずしも美事にあらざるを示しぬ。鎌倉沒落の翌日、後醍醐、船上山を發し、六月二十日京師に入り、即日刑賞を施し、治部大輔足利高氏を治部卿に陞叙し弟兵部大輔直義を左馬頭に任じ、思へらく以て歸順武士の心を收攬するに足ると。此時に方りて護良親王、志貴山の彌沙門堂にあり後醍醐の入洛を聞くも敢て之を迎へず、頻りに諸國の兵を徵して武備を嚴かにせしかば、朝廷武臣之を怪しんで擾亂、再び生ぜんことを恐る。後醍醐、右大將藤原清忠をして、速かに剃髮して山門に歸るべしと告げしむるや、親王答へて曰く、天下一統、治平に歸りしこと、陛下の德澤に出づると雖も、また臣が籌策の功による、然るに高氏、一戰の功を恃んで專横なり。今にして之を誅せずんば他日の禍計るべからず。剃髮の命決して奉ずべからず。兵備決して撤すべからず。願はくは臣を以て征夷大將軍たらしめよと。天皇其專横を惡むと雖も、已むを得ずして征

夷大將軍を許し、高氏討滅の一事は行ふべからずと詔す。護良大將軍を得て大に喜び、赤松圓心・殿の法印良忠・四條少將隆資・中院中將定平・千種中將忠顯、以下近畿の將士數千を率ゐて入洛す。護良は、最も能く當時に行はれたる貴族公卿、及び近畿武士の意見感情を代表せるものなり。彼等思へらく今回の大變、之を開きたるものは公卿なり。最も苦心せる者は公卿及び近畿の武士なり。大變の目的は武門の專權を停めて、朝廷に收め源平の爭亂以來埋沒せんとせる貴族的王朝を復興するにありと。故に大變漸やく收まるや、先づ其恩賞に與かるものは、公卿、及び之に付隨したる近畿武士ならざるべからずと爲す。朝廷公卿の間、幾個の小黨與あるに係はらず、武門を抑へて公卿を伸ばすの意見に於ては相一致せぬ。故に內侍三位廉子等が護良を惡むに係はらず此の意見は滔々として事實に顯れ來りぬ。公卿は源平の騷亂以來久しく沈淪したりしに、今や漸く時めくに至りしかば、あらんかぎりの驕奢を盡くし、あらんかぎりの權勢を張りて、再び武門を犬豕の如くに見たる藤原氏時代の光景を生ぜんとす。千種中將忠顯は放蕩無賴、博奕に耽り色を漁し、父に逐はれ、同族の彈斥する所となれる者なり。唯だ其後醍醐に從うて隱岐に上下したるの故を以て、大國三個を領して、數十の莊園を得、貧寒の公卿、一朝にして三百餘人の侍を養ひ、五十六の馬を蓄へ、日夜酒宴を事とするに至り、北條氏の調伏に與りて流罪せられし文觀僧正、今は倉廩を立て、財を積み、武士を集めて威勢を作り、刑賞多くその媒介に成りしかば、文觀の黨と稱する武士五六百人あるに至り、一個の僧正道を行くに騎士數百喝道するに至り、其他公卿・貴族多く國司・守護として、諸國に下りて武士・土豪に代りしかば、武士勢を失して顏色なく、公卿の跋扈、僧侶の飛揚は、藤氏專權時代の如くなりぬ。已にして八月、洞院の左衞門督實世をして、武士の動功を沙汰せしめんとするや、譎詐、訴訟、百端にして決し難く、數ケ月にしむるや、紛亂前日よりも甚だしく、微勳些功なきも、宮人の奏によりて數所の領地を得るあり。大功偉勳の士も宮人に結ばざるが爲に退けられて、一の恩賞を得る能はざるあり。紀綱蕩然として崩れまた收拾すべからず。しかも財用は一日もなかるべからざるが爲、諸國の地頭より、其の收入の二十分一を朝廷に徵して、賴朝の財政に倣ふ。此に於てか藤房數ば前古の歷史を引きて後醍醐を諫むるも、賢君は一朝にして人言を拒み朕より自ら古を爲さんと號して聽かず、却つて九條民部卿光經をして藤房に代らしめ、高時の所領は一切天皇の御領とし、高時の弟、泰家の所領は一切護良親王の所領とし、鎌倉の雄族大佛一家の所領を、三位准后廉子の所領とす。その他雄族の所領、多く妓女・俳優・內官及び公卿黨に屬する武士に、分配せられしかば、諸國の武士、悵然として望を失し、勤王黨に與みしたるの大早計なるを慨み、寧ろ武家政府の今一たび立たんことを希ふものあるに至りぬ。蓋し貴族的

王政は王朝時代に於てすら、凡ての國民、凡ての武士に感得せられたるにあらずして、僅かに近畿の民、在朝の公卿間に懷抱せられたる思想に過ぎず。九州の地、日本海に面する諸國、東國北方の地は、未だ皇化に浴せずして、疎獷俗を爲し、力征の前に屈すべからざるものなく、實力の外に權威なるものあるなきを信じたり。彼等が起つて勤王黨に合して北條氏を倒したるものは、其の獲物の鎌倉政府の下に得るよりも多からんことを欲して起ちしなり。故に彼等は場合によりては北條氏を倒したるが如く、新朝を倒すを憚かるものにあらず。北條氏と新朝と、尊卑の別あるなし。問ふ所は其我に與ふる獲物の大小に存す。此の如き動機によりて起りし武士は固より後宮内官政治を見て、平然たる能はざるもの自然の勢なりしなり。驕慢なる貴族之を察せず、天下萬民皆貴族的王政を希ふ者となして、自ら欺き、揚々乎として其權勢を弄す。

*此年乾坤通寶の銅錢を作り銅楮併用せしむ。

公卿と武士と、南人と北人と、後醍醐と尊氏と、足利と新田と、相對抗す

已にして正慶三年を改めて建武元年となし、安藝・阿波二州の租稅を以て之に充て、且つ諸國の國司・地頭の所領二十分の一を以て、朝廷の料として、以て皇權を張らんとし、また國用の不足を補はんが爲紙幣を發して、強ひて天下に通用せしめしかば、武士は其誅求の重きを怨み、平人は惡貨の流布に窮せぬ。已にして功を論じ賞を行ふに、足利尊氏、功第一たりとて武藏・常陸・下總の三國を與へ、弟、直義に遠江、新田義貞に上野・播磨、其子義顯に越後國、弟義助に駿河國、楠正成に攝津・河内、名和長年に因幡・伯耆を與ふ。此に於いてか、また武士の間に、二個の黨派を生ぜぬ。後醍醐帝、有爲の君にして、氣象雄邁なれども、多く自ら用ふ。護良親王が死生の道を來往して、回天の業を助くるや、後醍醐、未だ其功を賞せずして、先づ其山門に歸らんことを求めたり。今や後醍醐の眼は、直ちに高氏の上に注がれぬ。天皇船上山にありて高氏の事を聞くや、大に悅べりと雖も、また深く其の心術を危疑して、第二の北條たらんことを恐れたり。今や京師に下りて諸國武士の向背を察するに、人心自から高氏に歸せんとするを見たり。これ慧眼にして、併も細心なる後醍醐の看過する能はざる所なり。故に護良に對する用意は高氏に向けられ、其名の尊治の一字を取つて高氏に與へて尊氏となし、以て寵用の外貌を示すと雖も、内常に之に備ふるを怠らず。義貞・正成に二國を與ふる時に、尊氏に三國を與へて、之を敬重するの風を示すと雖も、義貞の一族には、更に分國を與へて、其力を等しうし、且つ武者所を設けて、諸國の武士を統轄せしめ、尊氏と好情を有せざる義貞をして、其頭人となして、以て武權を掌握して、高氏に備へしめぬ。また參議北畠顯家をして義良親王を奉じて奥羽を鎮めせしめ、成良親王をして鎌倉に下つて直義の主たらしめ、以て皇權を張つて武士を抑へんとしぬ。此に於てか、新田及び楠・名和・赤松以下近畿中國の武士、遂に兵力によりて尊氏を除かんと企つ。唯だ其兵力强大なるがため容易に發せざりき。故に高

*從來多く、後醍醐を以て尊氏に迷ひて其の患を釀へりと爲す。是れ多く太平記の俗說に從ふもの也。

氏等及び北方の武士は怏々として樂まず。此の如くして天皇は尊氏を疑ひ、公卿は武士を抑へ、西南人は北人を抑へ、一統の天下また漸やく二分せんとし、兩黨、相鬩視して發するの機會を窺ひ、形勢紛紛、大亂將に起らんとす。萬里小路藤房、最も治體に明らかに、數ば後醍醐を諫むと雖も、大勢遂に回すべからざるを見て、乃ち去つて身を雲水に托して行く所を知らず。

後醍醐、尊氏を除かんとし、尊氏、鎌倉に自立す

已にして建武元年三月、本間・澁谷の諸族、兵を坂東に起して鎌倉を攻む。時に直義鎌倉を鎮し、擊つて本間等を破る。本間等は北條氏を復興せんとせるものなり。已にして西園寺大納言公宗、其家北條氏の下に榮えて、王政の下に衰へたるを憤り、高時の弟泰家を養ひ、後醍醐を其の北山の第に誘うて、私かに之を弑せんとして事現はれ、人心恟々たり。護良等、此機に乘じて尊氏を暗擊せんとして、兵を近畿に召す。尊氏則ち兵を集めて自ら守り且つ護良兵を徵するの書を以て之を後醍醐に詰る。朝廷震驚、承久の役を重ねんことを憂ひ、以て護良の罪となして、之を執へて尊氏に與ふ。尊氏則ち細川顯氏をして護良を護して鎌倉に下らしむ。此の如くして尊氏は公卿の下には、其兵權を保つべからず。南方武士の下には生存の道なきが爲、進むによりて生くべく、退くによりて死すべきの地位に立ち、唯二個の活路を有するを見たり。一は時代の精神に從ひ天下を力征して幕府を立つるなり。一は勤王の名を保たんが爲、叡慮を上なきものとして其有する凡てを擲つて、山林に藏るゝなり。北人なる尊氏は直ちに北人的の選擇を爲しぬ。彼は少數貴族の間に行はる勤王の名をすてゝ、力征の實を取らんと決せぬ。建武二年七月、北條時行、兵を信濃に起して五萬餘人を得て鎌倉に迫る。時行は高時の次子にして、高時死に臨んで諏訪三郎盛高に託したるものなり。直義迎へ擊ちて利あらず。乃ち護良親王を害し、成良親王・足利義詮を伴うて、三河に出づ。尊氏、鎌倉の急を聽き、自立の機至れりとなし、自ら之を助けて北條時行を擊たんと請ふ。朝議許さず。尊氏曰く是れ一身の故にあらず、天下の爲なりと。乃ち八月二日告げずして京を出づ。天下朝政に飽き人心變を思ふの時、尊氏一たび足を擧ぐると聞くや、武士相賀して競うて之に加はり、之に加はらざるものは去つて本領に歸りて、大亂に應ずるの準備を爲し、之がため京師に顚塞したる大軍頓に空し。已にして尊氏の軍、時行の先鋒を遠州の橋本に破り、長驅深入、七戰七勝して、八月十九日鎌倉に入るや、時行脫奔して其族黨家人或は自殺し、或は奔竄す。京を出でしより二十餘日にして北方全く定まる。此に於てか、朝廷源具光を勅使として尊氏に云はしめて曰く、速かに內亂を夷げしは朝廷の深く稱する所なり。但し軍兵の恩賞は、朝廷自ら之を行ふが故に速かに歸洛すべしと。尊氏の眼中已に朝廷なし。何ぞ、勅使を奉ぜんや。勅使は徒らに冷笑を買ふに過ぎざりき。

大將軍は北方の皇位、義貞、尊氏を征す

然れども尊氏等の疎獷、猛野なるも、猶ほ、皇位を奪はんとする

が如き野心はなかりき。彼等があらゆる痛語を以て、歴史上に非難せられたるに係らず、彼等は大將軍府を立てゝ、自ら朝廷の爲したる事を爲さんと欲するに過ぎざりき。唯だ頼朝の時は、後鳥羽が速かに之を識認し、尊氏の時は、後醍醐之を識認せざるの一事ありしのみ。然れども若し之を以て、歴史ありて以來の大亂の首動者は、依然として歴史上の勢力に制せられ、歴史の前例に遵ふの外なかりしと思ふべからず。今日に於てこそ大將軍なるものは、一の軍士に過ぎずと雖も、當時にありては其の文字以外、人をして渇仰禮拜せしむべき一の魔力を有し、殆んど北方の天子と云ふが如き意義を有し、しかも其實力の強大に至りては、更に南方正統天子よりも、恐るべきものと信ぜられたり。尊氏等暫らく北方天子の實權を執れば、即ち足れりとせるのみ。即ち居を歴代將軍の故居若宮小路に作り、一族、郎黨、外様の武士をして軒を並べしめ、また義貞の所領、上野を奪つて、之を上杉の一族に與へ、其の他關東諸國を割きて、將士を賞せしかば、朝廷に屬せんとするものは、北に下り、海道上下の行人織るが如し。朝廷遂に意を決して、尊氏を征せんとし、義貞を大將軍として、諸軍を督して、鎌倉に下らしむ。義貞乃ち其族黨三十人の外、他家の大名、千葉貞胤・宇都宮公綱・菊池武重・大友左近將監・厚東駿河守・大内新介・鹽谷高貞・熱田の大宮司・武田甲斐守・小笠原信濃守・愛曾・遠山・高山・河越・兒玉・杉原・高田・藤田・難波の諸族、舟田入道・由良・長濱・山上・波多野・高梨の徒、及び叡山の僧、道場坊の黨與等、凡そ三百二十餘族を率ゐ、十一月八日、京師を發して、海道を下り、彈正尹の宮、忠房親王・洞院左衛門督實世・園中將基隆・三條中將爲冬等、新田の一族、大館・江田の諸將、島津上總入道・島津筑後前司、以下の諸族は山道より信濃に出て、鎮守府將軍源顯家、義良親王を奉じ、陸奥・出羽の兵を發し　三道、鎌倉を攻めんとす。義貞等、京師を出づるや、平義盛・源義親を征するの前例に倣ひ、舟田入道を二條高倉なる尊氏の邸に遣はし、三たび喊聲を擧げ、流鏑三矢を放ち、其中門の柱を切らしむ。軍容整正、劒戟、日に映じ、意氣大に昂る、朝廷思へらく以て鎌倉を覆すに足ると。

此頃、刀工正宗出づ。

義貞の位地、尊氏の人物

然れども人心已に、王政に飽きて變を思ふ。大勢は必ずしも朝廷に利あらざりき。諸道の豪傑、王朝が貴族に厚くして武士に薄く、朝令暮改の態あるを憤るのみならず、義貞の號令を奉じて征戰に出でしもの、早く大勢を觀望して、心を二にするものありき。況んや義貞、尊氏と等しく源氏の流を汲むと雖も聲望遙かに尊氏に及ばず。尊氏の家は、其祖先督て北條氏に抗せんがために兵を擧げて敗死し、北條氏在世の時已に鎌倉の政府に畏敬せられ、北條氏と婚を通じ、聲望坂東に隆々たり。故に元弘三年義貞兵を擧げて北條氏を攻むるや、尊氏の子、義詮、四歳の少弱を以て、紀の五郎左衛門に擁せられ、五百の兵を以て之れに加はるや、八州の豪傑風を望んで義貞を助け、已に

義貞高時を亡ぼすや若宮の拜殿にて刀を洗ひ、首實驗の後神殿を破つて深く家の重寶を出すに、白旗あり、新田の旗中黑なるが故に用なしと爲す。足利の族黨、之を得んとして爭ふ。

して義貞鎌倉を覆すや、義貞の功最も大なるに係らず、人心靡然として義詮に歸し、他日鎌倉の主として頼朝の故業を回復せんものは此君なるべしと思はしめ、義貞に黨する者と、義詮に黨するものと、交も相爭ふに至りしかば、足利の族黨、細川和氏等義貞に迫つて勝負を決せんとし、義貞誓書を以て他なきを示して事なきを得たり。義貞の資望此の如く初より尊氏に及ばず、況んや義貞は勇武敢爲に於ては、眞個坂東武士の典型なりと雖も、其識度膽略に於ては、到底尊氏の敵にあらざるなり。尊氏は後世勤王論の勃興したる時代の經典より論ずれば容すべからざるの大罪ありと雖も、其人物に至つては日本の歴史ありて以來識量最も博く、膽略最も大なるものなりき。頼朝は八州の源氏を中心として天下の藩屏となさんとするに彼は東西南北の別なく、凡ての豪傑を容れて拒まざるなり。頼朝は其子弟宗室を殺盡せずんば心を安んぜざるに、彼は一切の參畫を弟義直に委して顧みざるなり。頼朝は法家的の森嚴を以て自ら威望を持し、部下之を畏敬して用を爲せしに、彼は森嚴を用ひず、平易寛宏を以て部下に接し、部下に土地を與ふること土芥の如くなりしかば、部下之を愛敬して用を爲せり。頼朝は愼重周密、必成を期せずんば事を起さず、彼は時に形勢を觀望するも、概して小説的の冒險家なり。彼は頼朝と同じく、武將にあらずして政治家なりき。然れども戰功は必ず賞せられ、微動細功すら忘れられざるが故に、部下之が爲に死するを厭はざりき。頼朝の事業は、特に狹隘に失すと雖も、結尾ありき。彼は頼朝よりも大膽、冒險、博大なりと雖も、其弊や結尾なく、秩序なきにあり。頼朝は恐るべき長官なりしも、彼は愛すべく親しむべき首領なりき。頼朝は味方に峻嚴なるが如く、敵にも苛急なりき。彼は其部下に大量なりしが如く、其敵にも寛大なりき。彼をして若し平時にあらしめば、また成功ある一大政治家たるを失はず。彼をして身を屈して朝廷に仕へ、簿書の間に進ましむるも、また遂に朝權を一身に集めずんば止まざるべし。然れども功名は彼が唯一の神にして此神を喜ばしむるは彼が唯一の歡樂たり。彼はあらゆる危難、あらゆる汚辱、あらゆる痛苦を以て、此歡樂を買ふを辭せず。彼は羅馬史中のシーザルなり。シーザルが常に口にせる『若し正義と道理にして破るべくんば權力の爲に破るべし』との格言は、また尊氏心中の覺悟なりき。要するに彼の心情は、宏博にして寛裕、殆んど偉大高尚に近きものありき。今や此の好男子は、今古の歴史に於て、攻擊非難のあらんかぎりを盡くされたる罪惡の事業を行はんとす。何が故に然るか。彼の罪惡を説明するものは、唯一あるのみ、即ち時代の精神是れなり。

*エウリピデスの言

北人の政治思想、時代の精神となる

王朝藤原氏時代より平氏に至る間、平安の朝廷は眞に王化を總日本に及ぼしたるものにあらずして、近畿・中國に孤立したるに過ぎず。自餘の諸國は貴族的王政を以て其思想とはせず。殊に北人は其勇武と豪健とを信じ、武力の外に尊奉すべきものなしとし、武斷的民主政

の思想を有したり。頼朝も此思想を代表して起れり。北條氏も此の思想を後楯として進退し、以て一百三十餘年の運命を保てり。今や北條氏倒るゝと雖も、是功名を希ふの武士と、朝廷・公卿との無意識的聯合運動の爲に覆されたるのみ。北方の精神は猶ほ武斷的民主政に外ならざりしなり。故に後醍醐が始めたる公卿政治は從來に比して一層信賴すべからざるものとなるや、北方特有の武斷的民主政治の思想は一層の勢を得、天下の人心却つて武家の政治を希ふに至りぬ。斯る時代の精神ありながら、天下悉く武家の有とならず、猶ほ多少王朝黨を存するものは、是れ必ずしも王政を以て政治思想としたるにはあらずして、武家黨に對する個人的族黨的の恩怨嫉爭のためなるのみ。天下の多數は固より何人たるを問はず、天下の權を取るものは、即ち天下の主人なりと云ふ裸體にして野蠻なる禽獸主義を信じたり。此故に尊氏はシーザルの材を以て、直ちにクロムウエルの事業を行ふ。クロムウエルの時王朝黨と平民黨の相分れたるが如く、當時の天下は王朝黨と武家黨との二者に分れ、王朝黨は、多く文學あり、修養あり、禮節あり、國史を知るものにして、固より天下の少數たり。武家黨は無學にして俗野、國史を知らず、知るもまた之に從ふを潔とせず。大膽、敢爲、野馬の羈束すべからざるが如きものにして、此の主義を最も裸體に、最も猛悪に示したるものは高師直なり。彼諸士に諭して曰く、『汝等の所領にして足らざるか、天子の料を奪ふべし。生ける天子は世の費民の妨なり。必ず天子を要せんか、木像にて事足れり』と。殆ど人類を禽獸たらしめんとす。

尊氏京都を取り敗れて九州に走る

高師直等をして、義貞等を三河の矢矧川に防がしむ。義貞能く戰つて之を破りて、遠江・駿河に轉戰して、連りに進んで足利直義の大軍と手越河原に戰ひ、また之を破る。直義乃ち退きて箱根山を守り、義貞伊豆の府中に陣して、後軍の至るを待つ。已にして尊氏直義の敗を聞き、自らも大軍を率ゐて竹の下に出て、先づ新田・脇屋の族黨を敗つて、二條中將爲冬を殺し、進んで、伊豆の國府に迫り、高きに臨んで義貞の營を下瞰するや、義貞の軍戰はずして走る。尊氏・直義勢を合して長驅深進して京都に迫る。是に於てか諸國の豪傑、世變を窺ふもの、皆起つて、尊氏に應ず。備前の佐々木信胤・田井信高は福山城に據り、兒島高德之を攻めて敗れ、細川律師定禪は讃岐の鷲田に起り、高松の守護舟木賴重を破り、備前に渡りて京に入らんとし、丹波の人、久下彌三郎時重は守護を破つて四方を侵略し、越中の守護普門藏人利清、國司院少將定清を石動山に破つて尊氏に應じ、赤松圓心は播磨に起り、加賀には富樫介、越前には足利高經の家人、伊豫には河野對馬入道、長門には厚東の一族、安藝には熊谷、周防には大内介の族等皆起つて尊氏に應ず。已にして尊氏、兵を三道に分け、直義・師泰をして勢多より、畠山上總介をして淀より、吉見三河守をして芋洗より、細川定禪をして山崎より、久下時重

*義貞敗れて退くや、天龍川に架し、天龍川を渡るや兵士橋を全く斷つて敵を防がんとす。義貞其武名を恐れ、傷けらるゝことを以て斷たんとし、當時の武人面目を重ずるの狀を見るべし。

をして峯堂より、日を刻して京都を攻めしめ、尊氏自ら宇治に向ふ。京軍また義貞をして尊氏に當らしめ、以下諸將各〻部署して敵を防く。已にして藤原師基、先づ峯堂の守を失して諸軍繼いで敗北す。義貞・正成・長年等、天皇を奉じて叡山に退く。尊氏代つて京都に入り、細川定禪をして園城寺により て叡山に迫らしむ。時に北畠顯家、東北の兵を擧げ、鎌倉を經て尊氏の後を追ひ、往く〳〵新田氏以下足利氏を憤る者を集め、數萬を得て京に入る。義貞等大に悅び、兵を合して定禪を攻めて之を破り、頻りに奇兵を放つて巷戰を試む。京軍地理に熟し、北軍地理に暗く、大兵を以て數ば敗れしかば、尊氏遂に桂川に退く。已にして細川定禪、義貞を襲うて京都を奪ふや、尊氏京に入りしが、また義貞・正成の襲ふ所となり、大敗して京師を出て、攝津に走る。尊氏の京師に入るや、實に建武三年正月十一日にして、其攝津に走るや三十日なり。此役や、尊氏其の族黨上杉禪門・三浦因幡守・二階堂下總入道・曾我太郎左衞門・二階堂信濃判官行周以下、勇將猛士の多くを失し、軍士四散してまた爲すべからず。赤松圓心は曾て護良に應じて北條氏に敵したるものにして、朝廷の恩賞の其功に添はざるを憤つて尊氏に屬し、其鄕國、播磨なるが故に、西南諸州武士の心を知るものなり。乃ち尊氏に說きて九州に下り、新に回復軍を起さしめんとし、且つ敗北の罪を以て、天皇を擁せざるに歸し、現皇の大覺寺派なるに乘じ、其の敵手持明院派より天皇を立て、錦旗を立てゝ戰ふべきを言ふ。尊氏乃ち使を後伏見法皇の許に發して院宣を乞ふ。持明院派は後醍醐歸洛以後全く政治上に閑却せられしかば、大に喜びて尊氏の請を許す。尊氏乃ち諸將を會して錦旗を立てしめ、且つ、赤松圓心をして、白旗城によりて播磨を守らしめ、尾張松田の一族をして、三石城によりて備前を守らしめ、今川三郎四郎等をして、鞆・尾道によりて備中を守らしめ、桃井・小早川の一族をして、安藝を守らしめ、周防は大島兵庫守・守護大內豐前守に守らしめ、長門は厚東太郎入道に守らしめ、四國は細川の一族をして守らしめ、以て京軍の追擊に備へ、海に航して九州に下る。

正成、尊氏を防ぎて敗死す

猛雨、疾風の如くにして來りし尊氏は、急潮の退くが如くにして去りしかば、朝廷大に喜びて、平氏の西海沒落に比し、天下の事、是より安しとなし、義貞をして山陰・山陽十六國を管領せしめ、帝、其後宮の一人、勾當の內侍を與へて之を賞し、また建武の號武家に幸せりとなして延元と改め、以て枕を高くして眠らんとす。獨り正成前途を慮り、怏々として樂まず。思へらく、尊氏等九州を征服し、必ず新勝の威に乘じて上國を犯さん。此時に方つては京軍遂に之を防ぐの策なかるべし。初め笠置に勅命を承けて兵を起すや、國中響に應ずるが如く動きしに、今や族黨一類も猶ほ朝廷に黨するを難しとす。天下の人心、敗北せる尊氏に嚮うて、勝ち誇りたる朝廷に背く、天下の事以て知るべきなりと。遂に尊氏を招撫せん事を奏す。朝臣見て以て迂愚となして之を嘲る。然れど

も事實は遂に正成の先見をして適中せしめ、尊氏等九州に下るや、先づ筑前革屋の津に上り、少貳頼尚に糧る。少貳は源家正統の將軍が九州の武士を頼むを以て、前代未聞の光寵と爲し、半神的崇拜の念を以て之を迎へ、一族郎黨、身命を盡くして肥後の菊池武敏と戰つて之を破る。之より四方響應して皆尊氏に屬し、二月ならずして、九州の武士悉く其爪牙となる。此時に方つて義貞其軍を分ちて、白旗・二石の諸城を圍み、備前・備中・美作の地を徇ふ。赤松圓心等急を尊氏に報ず。尊氏則ち一族四十餘人、高家の一黨五十餘人、上杉の一類三十餘人、外様大名、少貳・大友以下百六十人を率ゐ、兵船數千艘に乘じ、四月三日、太宰府を發して上國に向ひ、五月十日、直義をして陸軍を率ゐ、少貳頼尚を先鋒として、鞆の津より上陸して中國を徇へしめ、尊氏自ら水軍を督して進み、水陸火を點じ、煙を發して呼應し、往く〳〵兵庫に會せんとし、雄風堂々、氣先づ上國を呑む。此に於てか諸國の武士先を爭うて來屬し、水陸二軍殆ど無人の地を行くが如く、五月二十五日京軍と兵庫に會して戰を開く。之より先き、朝議正成をして、義貞を助けて尊氏等を防がしめんとす。正成思へらく尊氏の軍、氣鋭にして當るべからず。如かず、暫らく其鋒を避けて叡山に幸し、其糧道を絶つて之を殲くさんにはと。公卿、兵を知らず、正成を以て怯として聽かず。正成遂に死を決して兵庫に下り、手兵七百を以て湊川に陣して陸軍に當り、大舘氏明三千人、脇屋義助五千人を以て義貞の二萬五千人と共に、和田岬にあり

て水軍に當る。戰は四方同時に起りぬ。脇屋義助の軍先づ敗れて義貞敗走す。細川定禪の兵、義貞等の逃路を塞がんとして急に生田森を指して上陸し、擊つて義貞を破り、還つて後より正成を圍む。正成寡兵を以て、直義と對抗して苦戰奮鬪、氣殆んど盡くる時、更に細川定禪の爲に、後を絶たれ、事遂に爲すべからざるを見て、一族郎黨、六十餘人と共に自殺す。此の如くして京軍は其の曾て有した る最も謀略に富み、最も純潔、誠忠、味方に用ひらるゝよりも、深く敵軍に畏敬尊重せられ、殆んど理想に近き將軍を失したりと雖も、彼の高尚なる人品は、詩に入り、歌に存し、歷史に刻まれて長く國民の胸中に生き、當年の敗北者は、歷史の上に於ては赫々たる光榮を以て百千歲の人心を制す。

尊氏、光明天皇を擁立す

正成已に死するや、尊氏・直義の軍相合して義貞を追ひ、矢下る事雨の如し。義貞刀を以て矢を截つ事十六度に及び、僅に身を以て免れ、敗兵數千と相走つて京師に還り、五月廿七日天皇を奉じて叡山に逃る。此時後伏見の一族、亦叡山に走らん事を促さる。然れども已に曾て院宣を尊氏に與へたるを以て、尊氏の速かに來らん事を希ひ、病と稱し輿を法勝寺に止て動かず。已にして尊氏三十日を以て入り、叡山の軍と一勝一敗、容易く輸贏を決せずと雖も、大勢已に定るを以て八月に至り、*瘞帝の弟豐仁親王を立て〻天子とす。是を光明天皇とす。年號は建武を用ふ。天皇時に年十六。時人相語て曰く、光明は幸多き君かな一戰の功なきに將軍より天皇の位を與へられたりと。此一語以

*正成時に歲四十三

*光嚴帝北條氏に立てられ後醍醐のために廢せらる。

て當時の政治思想を推すべき也。而て尊氏は北條氏が政廳を鎌倉に置しに反し幕府を京都に開く。

京畿の戰、後醍醐、尊氏と和し、義貞北國に逃る、

叡山に於ける義貞等は、大勢已に回復の望なきも、猶能く健闘して京を襲ふこと數ばなり。是れ其近江・越前より來る糧食に依頼し、却つて攝津・山城の地理に通じたるを幸とし、士兵・僧兵を以て尊氏等の糧道を斷ちたるが爲なり。尊氏則ち先づ莊園の寄附を以て、興福寺の僧徒を誘うて叡山に叛かしめ、更に足利高經をして大兵を率ゐて北陸道を扼せしめ、小笠原貞宗・佐々木道譽をして、近江を略せしめ、義貞等の援兵の糧道を斷つ。叡山の兵既に六月より籠城すること三ヶ月、人勞れ食絶えんとする時、援兵もまた糧道を斷たれしかば、衆心離散し、隙を窺うて退くもの日々夜々に多く、士卒に至つてはまた戰志なきに至る。尊氏もまた戰に疲れ後醍醐と和して、速に時局を收めんとして、十月書を後醍醐帝に奉つて曰く、近年の兵亂臣、陛下に對して企てたるにあらず、義貞等讒臣の徒を覆し、再び讒佞の道なからしめんとするに外ならず。陛下若し臣が微衷を察して臣の罪を容し、駕を都に回さば、供奉の諸卿、降參の諸將に至るまで、罪の輕重を問はず本官に安堵せしめんと。後醍醐帝大に喜び、左右また之を慫慂する者あり。義貞等に知らしめずして還幸の儀を修む。武士また和睦を望むもの少なからず、私に山下に出て、後醍醐帝に從はんとす。新田の族黨江田兵部少輔行義・大館左馬助氏明等、またその中にあり。義貞之を知らず、洞院の實世が報を得て初て之を知り、未だ之を信ぜず、堀口美濃守貞滿をして之を視せしむ。貞滿參内すれば龍駕將に發せんとし公卿列を正す。貞滿進んで乘輿の轅を抑へて奏して曰く、陛下還幸の事、兒女の風說に聞くと雖も、義貞之を知ずとするが故に、臣等また信ぜず。圖らざりき陛下の義貞等を捨て、尊氏と和せんとは。知らず義貞何の罪あり、尊氏何の功かある。元弘の年、義貞綸旨を蒙つて以來、義を重じ命を落すもの一族一百三十二人、之に殉ずる郎黨八千人餘なり。是れ皆陛下の爲にあらずして、誰が爲ぞ。陛下若し尊氏と和せんとせば、先づ義貞以下の一族を捕へて首を刎ねて、而して後に和すべしと。聲涙共に下る。後醍醐以下公卿皆坐に堪へず、暫く默然たり。已にして義貞三千人を率ゐて至る。武士皆慍れる容あり。靜かに後醍醐帝の語を待つ。後醍醐近く義貞を招きて慰諭して曰く、貞滿の云ふ所理なきにあらずと雖も、時務に通じたるものにあらず、暫く尊氏と和し、時を俟んとするのみ。汝を恃みて四海の鎭衞とするは、初心に異らず。宜く太子恒良を奉じて北國に下り勢を養ふべしと。將士皆憤恨の涙にむせぶ。越えて十月十日、後醍醐帝遂に山を下つて尊氏の營に幸し、義貞は太子恒良を奉じ越前を指して逃避す。還幸に從ふ者は、内大臣吉田定房・大納言萬里小路宣房・坊門宰相清忠・大館氏明・江田行義・宇都宮公綱・菊池武俊・仁科重貞・本間資氏・叡山僧道場房祐覺等七百餘人にして、義貞に從ふ者は、洞院實世・定世・三條侍從秦季父子・義助・義顯・義治・堀口貞滿・一井兵部太夫義時・額

田左馬介爲繩・里見大膳亮義益・大江田式部大輔義政・山名忠家・桃井義繁・千葉貞胤・宇都宮泰藤・河野通治等七千餘人なり。此外阿曾の宮は、山伏に裝うて吉野に藏れ、中納言四條隆資は、紀伊に下り、二條師基・中院の定平は、河内國に、北畠親房は伊勢に藏れ、結城兼光・南部時長・足立道宜・伯耆義高は、南都に至りて剃髪す。昔し平氏西海沒落の時は、猶ほ一族徒黨を有して、天皇を擁しき。今や天皇已に義貞を捨て、義貞等の一族また頭を屈して尊氏に下る。義貞等五年の忠戰によりて得たる結果は此の如し。その恨むべく、哀むべく、傷むべきもの、平氏の末路より甚しかりき。

北行京軍の困危、義貞の人物

義貞等、鹽津海津に出づるや、越前の守護、高利高經、大兵を率ゐて之を要す。乃ち轉じて木の芽峠を越ゆるや、時正に初冬、風雪頻に至る。義貞に屬するもの多く、東國・南海の人にして、雪に慣れず、加ふるに地理を失し、糧食に乏しく、將士相續いて凍死し、或は風雪に望を失して自殺するあり、河野・土岐・得能の一旅三百餘人は、土兵に圍まれ、戰はんとするに、足凍えて意の如くならず、乃ち皆刀を雪中に樹て、自らその上に伏して死し、千葉貞胤の族黨五百人は、風雪に堪へず、遂に足利高經に降る。義貞辛うじて敦賀に入り、氣比の彌三郎大夫に賴つて金崎の城に入り、義顯をして二千餘人を率ゐて越後に入らしめ、義助をして千餘人を率ゐて杣山の城に入りて瓜生の一族に寄らしむ。已にして高經、義貞が後醍醐に捨てられしものなるを報ずるや、瓜生保、後難を恐れ、事に託して義助を謝絕す。之より衆心離散して、義顯もまた越後に下るを得ず。義助と共に金崎の城に歸る。已にして高經、北陸の兵を率ゐ、仁木伊賀守賴章は丹波・美作の兵を率ゐ、今河駿河守賴貞は但馬・若狹の兵を率ゐ、荒川三河守詮賴は丹後の兵を率ゐ、細川賴春は四國の兵を率ゐ、高師泰は美濃・尾張・遠江の兵を率ゐ、小笠原貞宗は信濃の兵を率ゐ、鹽谷高貞は出雲・伯耆の兵を率ゐて海路よりし、八方金崎の城を攻め、必ず義貞を亡ぼさんとす。而して義貞の本領は、此に於てか現れぬ。彼は純乎たる武將なり。其眼光は尊氏の如く大局に注がずと雖も、戰鬪に於ては、機敏勇敢、一代之に比するものあらざるなり。彼尊氏の如く權變なしと雖も、然も其温厚誠實、能く部下をして安んじて、己を信ぜしむ。尊氏の下にありては、將士は、恩賞の必ず獲べきを知つて、死戰すと雖も、彼の下にありては將士は一片感激の念、意氣の投合によりて死戰す。彼尊氏の如く、識度大ならざるがため、多くの異族を部下に致す能はざりき。然れども其將士は、皆精練せられたる一騎當千の武夫のみなりき。彼尊氏の如く其個人的魔力によりて、將士をして敗北の中にありて、常に殷々たる希望を以て戰はしむる能はざりき。然れども將士をして困苦、窮厄の中にありても、能く相結託して離れざらしむ。彼今や後醍醐に捨てられ、渺乎たる金崎の城にあり。尊氏が天下の精兵を盡くして、之を攻むるも、諸士一人之に負くものなくして能く防ぐ。北條氏を亡ぼしたる彼は、天下の大勢に乘じたるものに

して能く彼を示す能はず。今や天下の大勢に見捨てられたる彼は、眞に坂東的武將の本領を示しぬ。

後醍醐逃れて吉野に蔵くる

義貞等が此の如く北國にありて困苦する時に方りて、尊氏と和せる後醍醐も、また決して安樂にあらざりき。後醍醐は尊氏が政を還すと云ふを以て、降伏とも思はざりしと雖も、汚辱を與へんとは思はざりき。然れども尊氏は後醍醐が全く義貞を見捨てず、其皇太子を之に附して北國に赴かしめたるを見て、猶ほ二心を存するものとなし、先づ直義をして五百騎を率ゐて之を迎へ、三種の神器を新帝に奉ぜんことを請しむ。是れ明白に讓位の禮を以て後醍醐に強ふる者なり。已にして後醍醐を花山院に奉じて、四門を閉鎖して警固を嚴にし、降參の武士は各〻之を大名に分つて管せしめ、明白に囚人を以て待ち、本間資氏、道場坊祐覺を斬り、供奉の百官、僅に死罪を免して放たれしかば、將士憤慨、義貞に屬せざりしを悔い、宇都宮公綱は剃髮して僧となり、菊池武敏は逃れて肥後に下る。此に於てか諸道の豪族曾て後醍醐の令旨を奉じたるもの、皆尊氏に降るの危險を思うて自立の志あり。已にして北畠顯信兵を伊勢に起し、密使を後醍醐に送る。刑部大輔和氣景繁私に北畠の蜂起し、義貞が金崎の城を守つて數ば敵を破るを奏す。失望せる後醍醐は猶王朝黨の少なからざるを見て、忽ち望を生じ、近臣を從へ暗夜に乘じて吉野に逃れ、吉水法印に賴つて山僧に身を託す。是れ建武三年十二月二十二日なり。之より世に吉野を南朝と號し、京都を北朝と號し、兩朝五十五年の間相鬩ぐ。

第二十一章　足利氏の治世（紳武紀元千九百九十六年より二千百廿五年に至る）

戰爭、地方的となる、金が崎城陷る

湊川の一戰は實力上に於て天下の形勢を定め、後醍醐還幸の一事は、信用上に於て天下の形勢を定めぬ。後醍醐脫走の報は諸道の南朝黨をして、また鋭氣を回復して再興の謀を爲さしめしと雖も、戰鬪は漸々中原を去つて、地方的の性質を帶び、時に一勝一敗ありと雖も天下の大勢を轉ずるに足らざりき。延元二年正月、越前の瓜生保、心を義貞に寄せ、義助の子義治を奉じ、兵を杣山に擧ぐ。加賀國守里見時成、瓜生の弟僧義鑑と共に、之を助けて義貞を金崎城に救ふ。高師泰之を敦賀に逆擊して三人を殺す。義貞則ち恆良・尊良の兩親王、義顯等を止めて、城を守らしめて、洞院の實世等と杣山に逃れ、兵を募つて金崎を救はんとす。已にして城中食盡きて馬を食ひ、馬盡きて死者の肉を食ふ。三月高經等之に乘じて攻め、城將に陷らんとす。義顯事爲すべからざるを見て尊良に云つて曰く、臣は武將の子、徒らに敵手に落ちて家名を辱しむべからず、將に自ら裁する所あらんとす。然れども殿下は皇親、敵必ず害せざるべし。願はくは生を全うして他日の計を爲せと。尊良憤然として曰く、何ぞ卿等に負き、自ら全うするに忍びんや。然れども孤、深宮に長じて自裁の法を

知らずと。義顯感泣、刀を取つて腹に擬して曰く、自裁の法此の如しと。自ら腹を屠り刀を取つて尊良の前に置く。尊良則ち其刀を取り、義顯に倣うて自殺す。以下公卿將士、自刄する者三百餘人、太子恒良、舟によりて逃れんとして獲られ、後藥を飲んで自殺す。天下思へらく、南朝已に全く傾覆せりと。

戰亂何故に收まらざるか、顯家義貞の敗死、後醍醐の崩御

然れども天下の形勢は、未だ足利氏をして賴朝の如き統一政治を行はしむるを許さざるなり。北條氏の下には天下の泰平なること一百三十年、氣運は已に亂世に向ひたれば、天下大亂に飽き、人心奔命に勞れ、平和を求むること、水の低きにつくが如くならずんば、統一の容易に來らざるは勢なり。北條氏覆滅の後より、紀綱蕩然として崩れ、天下の事、力征によりて爲すべきを示したれば、所謂武門武士の外、土豪、卿紳の間に、尙武的氣象と、伎倆とを生じたれば、其高きものは、武門に從うて征戰を習ひ、低くきものは士寇となりて劫掠を事とせり。此の新武士は、事なければ田園に耕し、事あれば干戈を取り、地理に熟し土著の勢力たるがため、出沒、自在にして征服するに容易ならず。而して近畿最も此類の武士多かりしが故に、北朝は數ば之がために其手足を制せらるゝを免れず。且つ尊氏寛裕、洪量、其部下を待つがため、部下の勢力、非常に發達し、高、山名、桃井、上杉の一黨、數國を領し、儼然たる諸侯となりしがため、中立の地に立つべき武士、北條氏の遺族等をして、已むを得ず、南朝に屬せしめたり。之に加ふるに、前後六年の變亂殆んど天下を暗黑ならしめ、四方の情僞容易に通ぜず。南北兩黨の國士犬牙錯綜して、征服に便ならず。統一は猶ほ天下の自然の勢にあらざりしなり。故に足利氏が京都に幕府を置きて法令を定め、嚴然天下に君臨せるとき、後醍醐は猶ほ吉野にあり、正成の子弟は其近傍を守り、義貞は越前に蹯据し、北畠顯家は北邊の武士を語らひ、一旦北朝に降りし大館氏明・土居・得能の三氏は、四國を徇へ、菊池武重は懷良親王を奉じて九州に起り、江田行義は丹波に起り、宇都宮公綱も亦還俗して吉野に入り、北條時行も兵を起して南朝に應ず。顯家の軍は二年八月を以て足利義詮を鎌倉に攻めて之を去らしめしかば、人或は南朝興復のことを夢みたりしに、三年三月、南都より京師に迫り、高師直・桃井直常の爲に全軍を覆されて、顯家は敗死せぬ。北方の南黨此凶變を知らず。七月越後に於ける新田の支族、大井田彈正少弼義景・中の條入道舜甫・鳥山左京亮・風間信濃守・禰津掃部助等、大兵を率ゐて、義貞を助けて京に入り、北畠氏を助けんとす。義貞、此援兵を得て、使を叡山の僧徒に發して助力を得んことを請ひ、先づ越前足羽の城に足利高經を攻め、之を夷げて後に京に上らんとす。此時に方つて越前殆んど義貞に屬し、四方響應し、山徒また義貞の來るを望む。故に世人また南朝興復の事を夢みぬ。已にして高經、平泉寺の僧兵を募るに重賞を以てして、義貞に敵す。義貞一擧して之を夷げんとして自ら僧兵を藤島城に攻め、流矢に當りて死せしかば、此夢も亦消え失せぬ。當時南北兩黨の爭は一方

に於ては皇室兩統の爭にして、一方には地方に於て恩讐、優劣相容れざる豪族の爭鬪なりと雖も、一方に於ては尊氏・義貞の爭なり。今や尊氏の政府、其權愈〻伸びて、義貞空しく陣歿す。南黨は其中軍旗を失へるものなり。是より南北の兩黨、所々に戰ふと雖も紛爭のみ。形勢日に定まり、南黨日に消沈す。後醍醐は此の如き不愉快なる光景を見つゝ、延元四年八月、右手劍を握り、滿腹の痛恨を懷きて吉野に崩ず。壽五十二。崩ずるの前四日、來方行末を思うて感慨に堪へず。歌うて曰く、『露の身を草の枕におきなから風にはよもと賴むはかなさ』と、之を先にしては天智、之を後にしては桓武と、歷史上の三大皇帝とも云ふべき君主が、北條氏を亡ぼしたる報酬として得たる所は、此の如き悲愴酸峻の運命中に其子義良親王を託して天皇とするの一事に過ぎざりき。義良親王は即ち後小松帝なり。

*小松は廉子の子也。顯家には北畠に東下るに及びて吉野の金剛山に移る。後に金峰山に定む。後醍醐は何故に敗れし乎

後醍醐は何故に敗れし乎

後醍醐は新待賢門院に迷ひ、刑賞を誤り、尊氏に誑されて其禍を養へりと爲され、其歷史上の地位は、初は賢にして後には迷へる玄宗が、楊貴妃を寵して祿山の亂を養うたるに比較せられたり。然れども天下の禍亂、後醍醐の失政にのみ基づくと云ふは即ち不可なり。後醍醐は准后を愛すと雖も、其慧眼は決して尊氏の大望と勢力とを看過せざるなり。天下護良に先つて之を除くの心あるものあらば、後醍醐は確かに其一人なりしなり。北條氏已に倒るゝや、貴族・公卿、爭うて莊園領國を取りて、以て武人の感情を激したり。後醍醐が之を止めざりしは、その失策たりしと雖も、爾も是れ多數の貴族公卿、及び其周圍に附隨する武士の爲せる所にして、後醍醐のみの過にあらず。後醍醐にして若し義貞を退けて、尊氏を擧げんか。義貞を擁したる不平武士は義貞を擁して起らんとす。義貞已に後醍醐に屬し、備さに流離艱難を嘗めたる後は、其後醍醐に對するの忠誠固より之を疑ふべからず。然れども當時の社會には、二個の相容るべからざる勢は隨所に存したり。北人と南人の衝突なり。王朝時代以來相傳の國司・莊司・郡領の遺せる勢力と、守護・地頭の遺せる勢力なり。一鄕の中相容れざる二豪族あり。一國の中相容れざる二豪族あり。至る所に尊氏・義貞をして、相爭鬪せしむべき分子を存したるなり。彼左せば、我右せん。彼東せば、我西せん。尊氏にして後醍醐の下にその大望を遂げんか。則ち天下の大亂は、また義貞によりて起されんとす。此に至つては後醍醐をして德政は堯舜の如く、智勇は唐の太宗の如くならしむるも、如何ともする能はざるなり。況んやその佛法・寺院の勢力を識認するの慧眼に至つては、爭ふべからずと雖も、寺院反覆して恃むべからず。是れ決して後醍醐の罪にあらず。要するに貴族的王政が、天外より來つて大和附近に其根を扶植したるのみにして、未だ全國を風化せざるに方りて、武斷的民主思想が、時代の精神となりしが爲のみ。

建武式目、尊氏の稅法

北條氏が之を知るが如く、足利氏もまた之を知りぬ。然れども足利氏は、北條氏が公卿を尊重して之に空名虛榮を與ふるが如くせず。自ら公卿の位を取り、戰勝の勢に乘じて爲さ

んと欲する所を爲せり、故に北人の武斷民主思想は、北條氏の下にありては猶ほ南人の貴族的王政思想と調和して、兩頭政府の形を爲せしも、足利氏に至りて、殆ど全く自から王制を立つるが如くなりき。足利氏また刑賞を明にして民心を安ぜんとするの一事に於ては決して怠るなく、難朝の古法と貞永式目を折衷して、建武式目を定め、訴訟民政に注意し、且つ後醍醐が北條氏の遺制を改めて國司守護より二十分一の國用を取れるを廢して、五十分の一に減じ以て民心を安ぜぬ。此くてまた尊氏正三位大納言を以て征夷大將軍とりり、弟直義、正四位を以て副將軍となり、族黨四十三人皆朝官を得て秩序漸やく定まる。尊氏則ち天龍寺を立て、疎石を以て開山とす。疎石は即ち夢想國師なり。直義は六十六國に各一基の塔婆、一粒の佛舍利を分ち、師直また眞如寺を建つ。政權已に鎌倉より西し、京師に遷るや、僧日静、日蓮の建てし本國寺を京都に遷す。

補正行　此の如くして天下の兵氣日に銷沈するや、京都漸く戒嚴を怠る。時に、正平二年（南朝）貞和三年（北朝）正成の子正行、其弟正時・正儀、族黨和田正朝等と、河内の金剛山に據り、四方を攻略す。北朝細川顯氏をして攻めしむるや、顯氏譽田林に破らる。山名時氏をして攻めしむるや時氏瓜生野に破らる。京師震驚、則ち高師直・師泰をして大軍を起して之を擊たしむ。正行、此行遂に勝つの理なきを以て、行在に至りて後小松帝に謂して、志を奏す。後小松帝愚論して必ず死するなからしむ。然れども正行死を決して其族黨と共に名字を如意輪堂に書し、辭世の歌を刻みて出づ。天皇四條隆資をして別に兵を率ゐて之を助けしむ。已にして兩軍、四條畷に會す。師直の兵八萬、南朝の兵八千にして、正行の指揮に從ふもの三千。正行必らず師直を殺さんとして突進し、殆んど師直を獲んとして能はず。正行衆寡敵せずして敗れ、族黨と相刺して死す。共に死するもの二十三人。師直長驅深入、吉野の金峯山に入りて皇居を燒く。隆資以下天皇を奉じて穴太に逃る。正行は南朝最後の火花なりき。正行逝きて金峯山落つるや、南朝の公卿遂に爲すべからざるを信じ、緣を求めて北朝に降るもの相繼ぎ、後村上は穴太の奥に名ばかりの皇居を立てゝ偏安を保つのみ。

足利氏時代の武士氣質、及び其變化の原因

敵國外、忠なければ國常に亡ぶ。南朝衰弱の時は北朝が漸やく內亂を生ずるの時なりき。初め平氏の權を得て藤原氏に代るや、一族を以て朝廷の高官大爵を占領し公卿をして其所を得ざらしめ、寺院を抑制せしかば、彼等內より陰謀を畫して、源氏外より起りぬ。故に源氏の平氏に代るや、朝廷の官爵は之を公卿に一任し、寺院を敬重して、其感情を傷けざらんことを勉めたり。是れ其政府、鎌倉にありしが故に爲し得たる事なり。今や然らず。中國近畿は已に發達して一の大勢力となり、賴朝時代には計算に入らざりし九州、絕大の勢力を示せしかば、鎌倉は以て北方を鎮すべく、以て天下に號令するに足らず。此に於てか足利氏は多くの不便を知りつゝ京都に政

府を定むるの己むべからざるを見たり。其結果として公卿に空名虚榮を與ふる能はず、平氏の如く、一族を以て朝廷を占領するの己むべからざるを見たり。之より先き氣骨ある公卿は、後醍醐に屬して將軍となりて所々に轉戰して、多く滅し去り、存ずる所のものは軟弱無氣力なる公卿に過ぎざれば、足利氏の爲には、最後の打擊を受けたるが如くに沈淪し、政治上に於ては全く無一物の地位に落ち、僅かに其生命を社會的に保ちしのみ。社會的とは典禮を知るのみ。和歌を知るのみ。美人を有するのみ。此中最も公卿の生存を助けたるもの、其美人の力なり。北人疎野にして、禮節を知らず。唯だ日々の生存競爭を顧みて、高尚なる修養なし。彼等は容貌の美、粉黛の術、其頂上に達したる公卿の婦人を見て之を慕望するを禁ずる能はず、多くの財物を賭して之を購ふに至る。公卿もまた有力なる武士と結ぶを以て安全として、王昭君、北胡に下るが如き心地しつゝ、此結婚を許すものありき。是れ猶ほ可なるものなり。甚だしきは、公卿の妻女・娘子を奪つて强ひて妻とする者あり。之よりも甚だしきは、公卿の女北狄を卑しみながら、一人にして數人の北狄を夫とする者あるに至り、純然たる妓女の如くなりき。之よりして同族相爭ひ、同門相排するものあるに至る。高の師直の鹽谷高貞に於ける、高の師秋の佐々木信胤に於けるが如き、女事よりして離叛となるは、當時に珍らしからぬことなりき。此の如くして戰鬪に勝ちたる武士は、女色によりて腐敗せぬ。また當時、諸國より集りし剛健質朴の武士は近畿に入りて財物を得るや、陣中の徒然を慰めんがため、博奕の風を盛ならしめたり。已に博奕の風の盛なるや、數ば博奕に賭するものを得んがために戰鬪を起すの風あり、或は砂金を賭し、或は價高き刀劍を賭し、遂には明日の戰場に要する所の甲冑刀劍を賭する者あるに至りぬ。已にして戰あるや、甲冑を失つて刀劍を有するものは、甲冑を得んが爲に奮戰するが故に、却つて勇武を加ふと雖も、刀劍を失したるものは、戰ふに術なくして鯨波の數に加はるのみ。剛健なる武士は此の如くして腐敗せられぬ。また諸國の武士の起るや、其望む所は所領の大と權力の大とにありしと雖も、敵に對しても味方に對しても、一片磨すべからざる意氣の存するものありき。然るに尊氏・義貞の間一勝一敗、數ば局面を轉じたるがため、生命を保たんがために尊氏に下るものにして、また忽ちに義貞の勝利によりて歸服せるあり。或は義貞に下れるものにして、また忽ちに尊氏の勝利によりて其下に屬するものあり。而して兩黨各〻人を致すこと多からんことを欲して、大罪大不信の徒をも、許して用ひしがため、天下の武士をして、一方に執着するの危險なるを信じ、意氣の爲に、生命を捨つるの愚なるを覺らしめぬ。是より反覆出沒は、武士の恥ぢざる所となりて、武士は腐敗せぬ。此の如く曾つて天下の秩序を保ちたる武士の意氣、主從の信用、英雄崇拜の心、去つて迹なく、美人分捕物、恐怖之に代り、泰時・時賴によりて養はれたる鎌倉武士の遺風は、蕩然として跡を天下に絶ちぬ。足利氏、千

*高師秋、菊亭の女の奪と守護となりて下るや、伊勢の佐々木に奪はれたる久しくまた之を伴はんとす。女走つて佐々木もまた此女と奪れるもの也。故に備前に歸り、兵を擧げて南朝に應ず。

辛萬苦して南朝を掃蕩して天下を取りしと雖も、其政府は此の如き脆弱にして恃むべからざる基礎の上に据ゑられしなり。故に南朝未だ全く亡びずして、北朝已に動搖を來す。而して動搖は功臣の跋扈より來る。

直義と師直の衝突

初め尊氏の北條氏に背くや、最も之を勸誘したるものは、細川和氏・上杉重義の二人にして、最も勢威あり。また高の師直は其族大にして、其卒勇。足利氏の支族三十二人に過ぎざるに、高家は其一類四十三人を有し、最も戰功あり。また尊氏の弟直義、最も機才に富み、最も權謀あり。最も冷血にして、尊氏の秘機、多く直義の參畫に出て、多くの場合に於ては、尊氏をして心ならずも其畫策に從はざる能はざらしめたり。彼等をして賴朝の下にあらしめば、忽ちにして夷滅せらるべきものなり。然れども尊氏、賴朝の少恩、慘禍を遺したるを見て、其將士を待つ寛容、以て其心を安んぜしめ、過失罪惡、多く問はざるにより、彼等は絶大の權勢を得るに至り、幕府の政事多く直義の手に歸し、其三條に居るの故を以て、時人之を三條殿と號し、尊氏と併せて兩御所と云ふ。時に幕臣土岐賴遠、途に光嚴院上皇の駕に遇うて馬より下らず。前驅之を叱止して曰く、田夫、院の御幸を知らざるかと。賴遠怒つて曰く、院か、犬か、我れ之を知らず、犬ならば之を射んと、部下をして環視して乘輿を射さしむ。直義之を聞きて賴遠を殺すや、武人戰慄して曰く、院に遭うてすら馬を下らざるを得ざるべくんば、兩御所に遭はゞ地を這はざるべからざるかと。兩將軍天子より尊きの情以て見るべきなり。直義の權勢此の如きものあり。然れども之に屈せざる者獨り師直あり。師直幕府の執事たり。執事は猶ほ執權の如し。其權勢また直義と相竝び、足利氏の一門と雖も皆其氣嫌を伺うて事を爲す。護良親王の母の今出川の邸を以て家となし、武士に禁ぜられたる壯麗の家居を構へ、親王・公卿の子女數十人を養うて妾とし、朝廷幕府皆其威權を仰ぎ、專擅放縱、往々常規の外に出づ。尊氏猶之を愛重して責めず。獨直義之を憎み事によつて之を除かんと欲す。然れども其兵力を憚つて發せず。先づ尊氏の庶腹の子直冬を養つて子とし、中國の探題として備前の鞆に居らしめ、以て外援とす。直冬は父尊氏と隙あるものなり。此時に方つて京師の武人、正に禪宗に向ひ、靡然として其徒を尊崇す。夢想國師の弟子、妙吉、才學あり。直義之に敬信し、其言ふ所多く聽かる。之より武人また競うて妙吉に媚附す。獨り師直、妙吉の學識を疑うて諧らず。妙吉之を憤り、時を待つて報復せんと欲す。畠山直宗・上杉重能また師直の專横を憎み、妙吉の憤慨を聞き、相結託して、師直を傾けんとし、妙吉をして私かに直義に說かしむ。正平四年(南)貞和五年(北)六月直義力士を伏して師直を召す。直義の黨、反覆して洩らすに陰謀を以てす。師直則ち兵を聚め自ら守り、河内にありて南朝を鎭壓する弟師泰を招く。直義人をして途に師泰を要し、執事職を以て之を募るや、師泰冷然として曰く、枝を盡くして根に及ばんとする

*冬の母は越前の局と云ふ、尊氏冬を惡みて父子の義を斷ずるも直冬面を許さず。直義數ばしば之を和解せんとするも聞かず。紀伊に南朝、初め尊氏に起るに及び、父子の名を許して、右兵衛佐とし、征伐に當らしむ。

*師直妙吉を疑ふと雖も、佛敎を信ずるに於ては他人に勝り、嚴經を印行せしが如きは、其證として見るべし。當時の印技術は、此に再興した

かと。兄弟遂に兵を合して尊氏・直義を圍む。兵士多く師直に屬し、尊氏等の勢日に微に、尊氏と進退を共にせる赤松圓心の如きも、師直に屬し、ために中國に下つて、直冬の上洛を妨ぐ。尊氏遂に師直の要求を聞き、直義の執政を已めて、子義詮の鎌倉にありて關東を管領せるを招きて、之に代へ、義詮の弟基氏を義詮に代りて關東管領たらしめ、高師冬・上杉憲顯をして、執事となりて之を助けしむ。畠山直宗・上杉重能の二人は越前に放たれ、後に師直のために殺さる。

***十二月直義師直等の疑を解かんがため、剃髮して惠源と稱す。

直冬、直義、尊氏の黨與交も相爭ふ

此の時に方つて妙吉己に逃れて直冬の許にあり、直冬乃ち走つて肥後に下る。師直、尊氏を要して、直冬征伐の敎書を諸國に發せしむ。直冬乃ち大宰少貳頼尙に頼り、其女を娶つて妻となし、其兵を得て、九州の探題一色太郎入道道献(範氏)を破つて其兵を併す。是より九州の兵多く直冬に屬し、偏偶の豪族、薩摩の島津上總の入道もまた直冬に黨し、石見の人、三角入道もまた兵を擧げて之に應ず。之れより天下、南朝を稱して宮方と云ひ、尊氏を稱して將軍方と云ひ直冬の黨を佐殿方と云ひて、天下三分の形勢成らんとす。尊氏乃ち師直を率ゐて九州に下り、直冬を攻めんとして、將に發せんとするや、師直、直義を殺さんとす。直義、逃れて南朝に下り、兵を起して男山に據り、桃井直常をして叡山に據らしめ、義詮を攻めんとす。義詮、西走し、尊氏・師直の兵に備前に遇うて、共に還つて直義と攝津の御影濱に戰ひ、尊氏大に敗る。畠山國淸、其間に周旋して兩黨を和解す。尊氏乃ち京に入る。師直勢を失して孤弱なり。上杉重能の子顯義、父の仇を復せんが爲途に襲うて、師直兄弟を殺すや、基氏・上杉憲顯の二人、また鎌倉の高師冬を攻めて、之を殺し、勢威一世を風靡せる高家の一類一朝にして亡ぶ。然れども功臣跋扈して權力下に移るの勢は、之が爲に止まず。尊氏、直義と和するの後も、義詮を除きて直義自ら執政たらんと欲す。尊氏己むを得ずして之を許すや、直義の黨、桃井直常・石堂義房等、驕慢を極む。尊氏の黨、仁木頼章・細川頼春・佐々木道譽等之を憎み、兵を引いて國に歸り、將に爲す所あらんとす。直義之を恐れて北國を經て鎌倉に入り、東國の兵を擧げて京都に迫らんとす。尊氏親ら之を擊たんとして薩埵山に至る。直義、上杉・石堂の族黨を集め大兵を以て之を圍む。尊氏殆んど敗れんとするや、宇都宮公綱、坂東の兵を擧げて尊氏を助けて、直義を破る。直義遂に尊氏に下るや、尊氏之を毒殺す。

*直義時に四十七歳

南軍北帝を執ふ、尊氏等光嚴帝を立つ

此の如く北朝黨が內に相爭ふや、南朝黨勢を得て將に京師を襲はんとす。義詮乃ち和を乞ひ、馬十疋砂金三千兩を献じて後村上帝の行幸を乞ふ。南朝僞つて和を許し、私に楠正成の弟正儀・和田正忠をして、河內の兵を以て、北畠顯能をして伊賀・伊勢の兵を以て、急に京都を襲はしめ、細川顯氏を破り、細川頼春を獲。義詮出て、近江に走る。顯能則ち光明・光嚴・崇光の三皇、及び太子直仁を執ふ。光明帝辯疏して曰く、即位は朕の志にあらず、己に即位するも一

事も朕の意に出でたることなしと。顯能、默して答へず。駕を奉じて吉野の賀名生（穴太）に幽閉す。是れ正平七年（南）觀應三年（北）二月二十一日なり。京都に於て此の如き形勢の大變ありし時、東國の形勢も亦變ず。二月十五日義貞の子義治・義興・義宗等、兵を擧げて、鎌倉を襲はんとす。久しく志を得ざりし南朝黨の子孫、また起つて之に應ず。尊氏逆へ擊たんとして出で、兩軍武藏野に戰ひ、尊氏大敗して石濱に走る。南軍列を亂して之を追ふや、仁木の一黨、横さまに之を擊つ。義興・義治、大に敗れて走り、途に石堂・三浦の諸黨が、鎌倉に叛きて新田に合せんとするに遇ふ。則ち相率ゐて鎌倉に入り、基氏を攻めて之を走らし、暫らく鎌倉の政權を握る。已にして尊氏の軍また振ひ、關東の諸武士、多く義宗に負きて、石濱に集りしかば、義宗勢屈して、越後に奔竄し、義興・義治もまた鎌倉を出でゝ、國府津山に據る。此時義詮もまた赤松等の諸族を率ゐて京師を回復す。已にして京師主なきを以て、義詮、彌仁親王を立てゝ天皇たらしめんとす。群臣以爲らく神器南朝にあり、神器なくして祚を踐むは未だ曾て聞かざる所なりと。關白二條良基曰く、尊氏劒たり、良基璽たらば神器なきも亦何の不可かあらんと。遂に之を立つ。之を後光嚴帝とす。九月尊氏、復京師に入る。此の如く天子は武家の擁立せるものなり。公卿は武家の憐憫の下に其生を聊するものなり。此より滿朝悉く武士に媚附し、公卿等云ひも習はぬ坂東聲を用ひ、着もなれぬ折烏帽子に額を顯はして、武家の擯斥指笑を免れんとするに至りぬ。

大草公弼考證して練馬白子の邊とす。

今の隅田川也。

然れども足利氏の天下は未だ全く統一せられざるに已に強臣割據の世となり、之より東戰西伐寧歲なく、尊氏數ば京を出でゝ京に入り、正平十三年（南）延文三年（北）四月五十四歲にして死す。子義詮嗣いで征夷大將軍たり。此時に方つて純乎たる南朝黨は上野・越後・信濃にある新田の一黨、肥後の菊池、河内の楠、和田あるのみ。已にして正平十五年（南）延文五年（北）義詮、畠山道誓の一族をして吉野を攻めしむるや、楠氏の族黨、和田藏人助氏、北朝に降り、南軍日に敗るゝを見るや、故護良親王の子征夷將軍興良親王、吉野十八鄕の兵を率ゐ、北軍を防ぐと稱して、急に謀叛し、吉野の行宮を攻む。南軍驚愕死力を出して防ぎ、興良敗れて南都に走る。和田下りて護良の子叛く。事實に於て南朝已に倒れたるものなり。而も猶ほ其成立を保つものは、北朝の強臣、相爭うて陷擠を事とするが爲のみ。時に北朝の佐々木道譽・細川頼之・山名時氏・仁木義長・足利高經・畠山國淸・細川淸氏・今川貞世・赤松氏範・足利直冬等の強臣、或は和し或は爭ひ、或は南朝に下り或は歸復し、天下、寧日なし。彼等の間にありて反覆離合は毫も罪とせられず。足利氏は、唯だ其歸復を俟つて、之を慰諭するの外なかりしかば、彼等は唯だ力の足らざるを憂ひ、隣國を侵略するの少なきを憂ふるのみ。故に小族愈〻滅亡して、而して之と共に眞の封建的風習を武士の間に生ぜぬ。之と共に足利將軍なるものは殆んど空名となりて、執事・管領の將軍に於けるや、猶ほ將軍の天子に於けるが如く、實權は管領・執事に移り、將軍は

強臣の大罪を犯して得たる所領を識認する一の閑職となり、強臣毫も之を恐れざるに至る。已にして細川清氏其族頼之の爲に殺され、頼之其衆を併せて威權漸やく大に、四國・西國の南朝黨、勢益〻微なり。是に於てか正平十九年（南）貞治三年（北）久しく周防・長門を以て、南朝に屬したる大内弘世、足利氏の必ず其所領を認識せんことを信じ、二國の所領を安ずるを得ば、降を乞はんと言ふ。義詮大に悅び二國の外更に石見を增す。仁木義長・山名時氏も、また之を見て歸復す。義詮、乃ち其押領せる因幡・伯耆・丹波・丹後・美作の五國を以て之に與ふ。石堂頼房・吉良滿貞等、之を聞きてまた歸復す。而して基氏鎌倉にありて、また能く關東を撫安し、畠山道誓が同僚を驅逐するを以て、之を放つて上杉憲顯に專任す。之より南朝日に衰ふと雖も、北朝權臣の專横、愈〻甚し。

足利氏の權執事に移る

權臣の爭鬪は執事の職より起る。初め尊氏の覇府を定むるや、高師直執事たり師直亡びて仁木頼章之に代る。頼章死して細川清氏之に代る。佐々木道譽、清氏を倒して之に代らんとす。清氏專權其二子を八幡宮に携へて元服せしめ、長を八幡六郎と名け、次を八郎と名づく。時人源家の祖八幡太郎の名を襲ふものとなすや、道譽之を讒して不臣の跡ありとなす。義詮、凡庸にして眼識なく、道譽の言を信じて清氏を疎んず。清氏則ち叛きて南朝に應じ、數ば京師を攻む。道譽已に清氏を追ふや、益〻權を專らにして執事たらんとす。道譽曾て遊覽の歸途、その家僕をして妙法院の楓を折らしむ。院人之を咎むるや家僕其主の威を挾んで屈せず。更に杖の大なるものを折る。院人怒つて之を笞つや、道譽其夜、衆を率ゐて院を攻め、火を放つて之を燒く。妙法院は叡山の末寺なり。山僧之を聞きて大に怒り、日吉神輿を奉じて闕下に嗷訴す。幕府已むを得ずして道譽を上總に流すや、彼山僧を辱しめんがため、族黨三百餘人をして、日吉の神獸と稱する猿の皮を腰當とし、靱にかけ、盛宴を張つて屈せざるの意を示す。其剛愎此の如し。故に清氏の去るや、自ら執事たらんと欲して得ず。衆議遂に足利高經の季子斯波義將を以て執事とす。然れども高經其實權を握るや、諸將を驅使し峻嚴を極めて、人心を失す。諸國の守護は後醍醐の時、其所得の二十分の一を課したるを以て怨望して大亂の端となりぬ。故に尊氏天下を一定するに及びて、其五十分の一を取つて諸國の負擔を輕減し、頼之に至つて四公六民の制を取りき。然るに高經に至り、更に二十分一の舊制に復せしかば、將士之に苦しみて、道譽の如きは賦を缺く二歲に及びぬ。此の如くして衆心、高經を離るゝや、正平二十一年道譽徒黨を作つて之を擊たんことを義詮に迫る。高經、義將と越前の杣山に走つて兵を擧ぐ。已にして高經病歿し、義將降る。此に於てか道譽將に執事たらんとす。

細川頼之の善政、新田義宗の敗死、楠正儀の降服、菊池氏の廢亡

北條氏に代つて天下を一統するや、頼朝の如く覇府を鎌倉に開きて、天下に號令せんと欲するの心なる此時に方つてや基氏、關東の管領たり。初め尊氏

きにあらざりき。然れども二百年の泰平は中國・九州・四國をして、一大武力たらしめたりしかば、鎌倉は之を號令せんには餘りに偏陬なりと信ぜられぬ。此に於てか尊氏京師の守り難きの地たるを知りつゝも、遂に都を此に定め、猶ほ基氏をして直義の養子たらしめて鎌倉を管領し、北東の武力を握つて、中原の急に赴かしめんと欲したり。而して基氏また恩威あり。能く八州の武士を統撫し、八州の治は中原の治よりも光彩ありき。基氏今や義詮が道譽の手中に陷らんとするを見て、切に之を諫めて細川賴之を用ひしむ。當時道譽の權勢を抑ふるもの、唯り賴之あるのみ。且つ賴之は反覆表裏、陷擠を事とする暗黑時代の武士中、最も信ずべき一人なりき。基氏の選擇は過たず。賴之が執事たりしより權豪、其私曲を謹み、殿中の諂諛者も其口を謹しみ、士風は漸やく質直に近づきぬ。故に二十二年四月、基氏死して子氏滿代り、十二月義詮尋で死し、子義滿、十歲の少年を以て大將軍たるも、天下は却つて尊氏、義詮の時よりも安全なりき。越えて二十三年三月に至り、南朝後村上天皇、住吉殿に崩ず。熈成親王位を襲ぐ。之を後龜山天皇とす。此歲新田義宗、基氏・義詮の死せるを幸として、兵を越後・上野に擧げて敗北し、義宗死して義治出羽に走る。之より南朝益す衰へ、二十四年に至り、楠正儀遂に北朝に下る。之より先き基氏の死するや、南朝大に喜ぶ。正儀獨り喜ばずして曰く、假令日本國中に敵なからしむるも、今日の諸卿の政道にては忽ちに諸國に敵出て、世はまた亂れんと。彼早く

しむ。長老春屋和尙牒狀を上る、書意、賊船多く日本より出て、海邊を掠劫するを以て、切に之を禁ぜんことを乞ふなり。幕府、謂らく是れ海賊のみ、爲すべき術なしと、遂に返牒を與へず。高麗の使に鞍馬鐙、太刀を與へて歸す。

南朝に望を絕ちたるなり。已にして建德二年三月北朝後光嚴、位を辭して諸仁親王立つて後圓融帝となるや、八月、細川賴之、正儀を助けて吉野を攻む。南朝の亡びざるもの一縷の命のみ。恃む所は菊池の一族が、威を九州に振うて聲援を爲すにあり。之より先き、肥後の菊池武光死し、子武政家を繼ぎ、懷良親王を奉じて四近を征服し、懷良の名を以て外國と交り、威聲九州を掩ふ。大內義弘之を攻めて勝たず。剃髮して命を乞うて歸るに至る。已にして賴之の京師に執事たるや、今川貞世を以て筑紫の探題とす。貞世は獨り武事に精しきのみならず、また文事*あり。當時に比少なき名將にして恩威并び施したり。之より先き九州の豪族多く菊池の爲に征服せられたりと雖も、菊池は唯だ武强と地勢によりて勝つのみ。偏狹苛細、民心の歸服を得ざりしを以て、建德二年貞世、大內義弘と兵を合して武政を攻むるや、武政利あらず。之より諸豪多く叛く。已にして天授元年(南)永和元年(北)武政死するや、子武朝、少貳冬資を誘うて貞世を拒ぐ。貞世擊つて之を破り冬資を斬る。二年直冬もまた其身を措くの地なきを以て北朝に下りて石見に退居す。四年に至り、楠氏の族正時・正種・正勝等、兵を河內に擧ぐと雖も、征東將軍宗良は已に據を信濃に失して吉野に歸り、征西將軍懷良もまた肥後に薨じ、これより菊池氏日に衰ふ。此に於てか、天下漸く一統せんとし、南朝の勢力單り河內・伊賀・伊勢・紀伊の山谷に存するのみ。

*今川貞世、其養子仲秋に與ふる教訓は今川狀と稱し、後世家庭教訓の用書たり。

豪族、自ら擅にす、鎌倉氏滿の異圖、細川頼之誅けらる

名は其爲さんと欲する所を爲して憚からず。大内義弘の如きは石見國を奪れんとするを見て、直ちに南朝に應ぜんとし、而して將軍義滿、之を聞きて其代官として京師に留るものを招き、決して石見を奪はざるべきを誓うて、其離散を防ぎたり。また紀伊の南黨を攻めんがため、義滿自ら軍を率ゐて進むや、美濃の土岐の一族、命を得ずして縱に國に歸り、斯波義將も、また國に歸る。此に於てか、義滿檄を傳へて佐々木を擊つや、義將近江よりまた義滿に屬するに、義滿之を責めず。已にして土岐もまた降るや、義滿また責めず。大名豪族、將軍の命を用ひざること此の如きものありしなり。故に鎌倉の氏滿の如きも、また私かに異圖あり。義滿が、紀伊の南黨を攻むるを機として兵を擧げんとす。執事上杉憲春、諫むれども聽かず。憲春憂懼して自殺す。氏滿驚愕して其異圖を捨て、憲春の兄憲方を以て執事とす。諸侯大名の幕府に忠ならざる此の如きものあり。名は統一と稱すと雖も、實は彌縫のみ。頼之則ち鋭意精勵、儉を以て力を養ひ、力により天下に號令せんと欲す。義滿聽かずして自ら用ひ漸く頼之を疎外す。頼之は固より當時の豪族中、最も幕府に忠なるものなりき。然れども宗族强豪、領國廣大、また義滿に盲從するものにあらず。其跡往々專横に瀕するものあり。土岐・斯波の諸族、之と共に善からずして相爭ふ。叡山の僧も、頼之の剛果にして寺院を尊ばざるを悅ばず。その日吉の神輿を改作せるを名として之を攻め、群黨の陰謀は遂に頼之に勝つ。五年四月義滿、兵を幕府に集め、使を頼之の第に遣はし、其の執事職を已めて國に就かしめ、斯波義將を以て之に代へ、且つ執事を改めて管領とし、以て幕府の尊嚴を作る。頼之の族人、或は兵を擧げて叛せんことを勸む。頼之退けて容れず。剃髮して詩を賦し、志を言ひ、一族郎黨三百餘人を率ゐ、其第宅を燒きて讃岐に歸り、四方を征服し、伊豫の河野の如き舊家も爲に滅亡す。故に義滿後また頼之を以て、四國の總管と爲す。

山名氏亡び細川氏榮ゆ

然れども義滿の慢心は永續せざりき。元中五年（南）嘉慶二年（北）七月義滿南海を巡遊し歸つて北方に出でゝ富士山に上り、六年西、嚴島に遊びて九州に下らんとし、風濤に遇うて讃岐に寄り、頼之を見る。頼之は依然たる忠實の頼之なりき。義滿、輔佐の功を回顧してまた之を用ひんと欲す。時に大名の中、山名最も强大を極め、山名時氏の義詮に歸復するや、五國の守護を得たりしに、時氏死して子師義・時義、また山陽の諸國を略取し、義理・氏清、また南海の地を略し、山名一族の領する所、十國に跨り日本を六分して其一を保ちしかば世之を六分一氏と云ふ。其一族勢を恃んで驕傲なり。義滿之を抑へんと欲す。即ち山名の一族の互に權を爭ふを機として、滿幸・氏滿等をして時熙・氏幸を攻めしめ、猶ほ頼之を召して斯波義將に代らしめ、幕府の力を爲さんと欲す。頼之辭するに老を以てす。此に於て八年正月、頼之の弟頼元を以て管領とす。頼之之を助く。山名氏、義滿が遂に其族を夷げず

*頼之の記に云ふ、一日頼之公會の席に於て、義滿なんぢ諫めて曰く、頼元退けられたるは其子執權たらしめじと。義滿豫計りて頼元を代つて實に計畫せり。是れ醍醐天皇の時平の小說なるべし。案出せざるも、此の如く地位は實に頼之の永德元年新葉集成る。

*文學暗黑時代の武將としては稱有の學者なりき。

*和泉、紀伊、攝津、出雲、美作、山城、若狹、丹後、伯耆、但馬、

氏清の肱股や、其二子右馬允七郎、二人父の命に從つて、其母の根來に歸す。高野の見來者許さず、曰く、汝の母に討死せしめんとすれば、言ひ伴ひて、甲斐なきものとなりぬ。則ち自殺して以て士典型的の武人なり。武代果の戰國時代の人物なり。

**古來戰場の兵數は多く傳記家のために誇張せられて、其實を知る能はざるもの多し。最も信ずべきは此頃の記錄也。明德記に曰く今川泰範、佐々木判官等は八百餘騎、義滿は二千餘騎、赤松上總介は七百餘騎、畠山國基は八百餘騎、大內義弘は五百餘騎、一色刑部大輔は三百騎、勘解由小路義重は五百餘騎、佐々木高詮は七百餘騎なりと記す、總勢六千三百騎也。山名の勢は之より少なかりしが如し、十箇國の領主にして此の如し。固より一國總體の戰にはあらざるも、之より推して當時の兵數を知るべく、源平南北の戰の如きも、之より規模の少しく大なるに過ぎざるを見るべき也。

んば已まざるを察し、氏淸は和泉より、義理は紀伊より、滿幸は丹後より、氏冬は因幡・伯耆より、各々兵を擧げて、義滿を亡ぼさんとして起つ。義滿、古より敵を京師に防ぎて勝つものなきを以て走らんと欲す。賴之、之を止め、大內義弘・畠山基國以下の諸將と、八幡に逆擊して、氏淸を殺す。此に於てか山名の領地を分つて諸將を賞す。唯だ時熙と氏幸は氏淸に敵するの故を以て、但馬・伯耆の舊領を保つを得たり。時に北朝の明德二年なり。故に之を明德**の役と云ふ。

山名氏已に亡びて天下兵革の氣漸やく息まんとす。義滿則ち其

足利義滿天下を一統し、南北兩朝を混一す

一統の大望を遂げんとして、元中九年三月使を楠正勝に發して之に告げて曰く、南方の亡ぶる旦夕にあり、敢て兵を用ひざるものは、深く足下の家聲を欽べばなり、何ぞ來つて仕へざると。正勝之を拒む。義滿則ち畠山義深をして之を千劒早城に攻めしむ。正勝・正元防ぐ能ずして十津川の奧に逃る。正成此城を作りしより六十餘年にして、初めて北朝の手に落つ。義滿則ち大內義弘・六角滿高をして、南朝に至らしめ、神器を北帝に傳ふると、兩統交立すること北條氏の約の如くするの二條を約して和を議せしむ。南朝は已に一兵なく、一將なく、坐して滅亡を待つの外なし。固より此約を聽かざるべからざるなり。則ち十月二十八日を以て儀衞を備へて京師に歸る。義滿其儀衞を見て來降の禮にあらずとなし、之を詰る。南朝の君臣固く爭うて聽かず。遂に父子の禮を以て神器を北帝に讓る。北條貞時兩統交立の約を立てしより此に一百四十年、後醍醐、吉野山に臨幸せしより五十七年にして、南北また一となる。

*後小松名は幹仁。

足利義滿の人物、當時の好尙及び美政

義滿は其材英雄にあらず。然れども少小天下の主となりしを以て、氣宇高遠にして志望廣大なるに於ては、尊氏にも優るものあり。殆んど浮誇虛榮に近きものありき。彼が畢生の大望は天下を統一して父祖の爲し能はざりし大業を成就せんとするにありき。今や其の大望は已に成就せられぬ。是より彼の大望は、制度の廣大と、居家の壯麗とを以て、幕府を飾るの一事に注がれたり。是れより先き義滿、諸侯に課して、盛に室町の第を營み、之を名けて花の御所と云ひ、その執事を改めて管領と號し、鎌倉と京師の執事をして同格ならしめ、武田・小笠原・伊勢の三氏をして武家の故實を調査せしめ、大に制度を更定し、斯波・畠山・細川の三氏をして交る〳〵管領たらしめ、之を三管と云ひ、山名・一色・佐々木・赤松の四氏をして、更る〳〵侍所の別當たらしめ、之を四職と云ひ、武田・小笠原・吉良・今川・伊勢等の七氏を以て七頭と云ふ。其祖父尊氏は死して後、左大臣を贈られたるに、義滿の身に迨んで、內大臣を以て征夷大將軍たり。次いで左大臣に移り、永德二年後圓融、位を其子後小松*帝に禪り、院にありて政を聽くや、義滿また院の別當たり。永德三年源氏の長者となり、淳和奬學兩院の別當となる。義滿時に二十六歲なり。已にして南禪寺の妙芭を以て僧錄司と

*京都五山
第一天龍寺
第二相國寺
第三建仁寺
等四東福寺
第五萬壽寺

**義持時に九識
京都十刹
第一等持院
第二臨川寺
第三眞如寺
第四安國寺
第五寶幢寺
第六普門院
第七廣覺寺
等八妙光寺
第九大德寺
第十龍翔寺

鎌倉五山
第一建長寺
第二圓覺寺
第三壽福寺
第四淨智寺
第五淨妙寺

鎌倉十刹
第一禪興寺
第二瑞泉寺
第三東福寺
第四萬壽寺
第五東慶寺
第六興聖寺
第七東漸寺
第八善福寺
第九法泉寺
第十長樂寺

爲して、天下の僧尼を司らしめ、鹿苑院・寶幢寺を作り、相國寺を創して七層の塔を建て、諸國の守護に役を課す。至德元年京都及び鎌倉の寺院につきて、各々*五山十刹の班を定む。是より禪宗愈よ盛んに足利氏の治世を飾る。已にして南北媾和の後、應永元年義滿、征夷大將軍を其子**義持に讓りて、自ら太政大臣たらんと欲す。朝廷武臣をして太政大臣たらしむるを難かるや、義滿大に憤つて曰く、天子は、我が爲に立てられ、朝廷は我が爲に保たれ、猶ほ我に抗せんとするかと。乃ち自立して天子となり、公卿百官の所領を沒收し、細川氏を以て攝家となし、畠山等を以て淸華とせんと欲す。後小松帝之を聽きて驚愕し、勅して義滿をして太政大臣たらしむ。義滿時に年三十七。天下足利氏を公方と號し、其家に親近する者を暱近衆と號す。此時に方つて朝廷の亡びざるものは一縷の命のみ。即ち公卿に至つては、殆んど最後の打擊を受けて、藤原の一族世變を更ふるもまた起つ能はざるに至りぬ。義滿唯一の大望は、天下を一統して、公卿的榮華を以て其の家を飾るにあり。今や其大望は全く成就せられ、望を見てまた望なきに至りぬ。藤原氏の公卿は惡事兇行を盡くすと雖も、猶未來を信じたりしが故に、冥罰、天譴を恐るゝが爲、其の惡事兇行を和げたりき。然るに北條氏以來、禪宗は武門の棟梁を支配し、殊に尊氏・直義は、最も熱心なる禪宗の保護者たりしがため、禪宗は殆んど足利氏の宗教となりぬ。今や功名に飽きて榮華を盡さんとする義滿は、未來なく、冥罰なき宗教のために其心を堅

當時の政府は如何に組織せられたるかを見よ。○朝廷に於ては關白以下の官、前朝に異ならず。○幕府は左の如くにして組織せらる。

此時三管四職の名廢され、三管領、七相伴、國持衆、御供衆と變じたる也。

管領（總理と云ふが如し三人交も代る）
細川左京大夫勝元、畠山尾張守政長、斯波左兵衛佐義廉。

御相伴衆（參議と云ふが如し）
山名右兵衛督宗全、細川讃岐守成春、一色左京大夫義直、畠山佐衛門佐義統、佐々木京極大膳大夫持淸。

國持衆（譜代諸侯）
斯波修理大夫入道道賢、山名彈正少弼教豐、山名次郎政豐、山名相摸守教之、細川民部大輔教春、細川刑部少輔、山名彈正忠是豐、山名兵部大輔政淸、土岐

くせぬ。剛健猛然なる北人氣質を以て、飽くまでも歡樂を盡し、飽くまでも飮み、飽まても歌はんとするの覺悟を爲さしむるに於て最も便利なるは當時の宗教なりき。此に於てか彼は飽くまで浮世の歡樂を貪らんとして、應永二年六月太政大臣を辭し、剃髮して道義と號し、其室町の第を義持に讓り、自ら北山に別業を營む。瀟洒、綺麗、天下に比なく、柱壁に塗るに黃金を以てす。世之を金閣と云ふ。其結構當時の修養ある社會に行はれたる禪味に出て、當時の好尙を代表したるものなり。義滿日夕、此中に起臥し、猿樂・田樂・舞樂・茶の湯・聞香を行ふ。然れども日本歷史ありて以來最も美なる斷訟の法は此の虛榮公子の時に行はれぬ。即ち問注所に、所衆を置き、左右二班に分つて、訴訟者に代つて問難して、斷訟の公平を維持せんとするの一事なりき。其天下を一統せしものは獨り力征のみにあらざりしを見るべし。

和寇起つて支那、朝鮮を犯す

此時に方つてや支那大陸・朝鮮半島に於ても、亦絕大の變革ありき。元は曾て弘安の年、我に寇して大敗せしより、連年軍備を整へて再侵の志、己むときなかりしと雖も、勢不可なるを以て十三年の後、遂に其企を捨てゝ太平を樂しみ、猛烈朴實なる北人は、南國を征して南國の文化に惑溺し、歐洲・亞細亞の兩大陸を震動したる漠北英雄の子孫、驕惰にして安逸に眠るや、順宗の至正八年、方國珍兵を起す。是れ弘安の役後、五十一年にして義貞鎌倉を亡ぼすの前年なり。此より

美濃守成頼、佐々木中務少輔勝秀、佐々木四郎政高、武田大膳大夫信賢、富樫介成春。

准國持衆　細川中務大輔成經（奥州事）佐々木加賀守。

外樣衆　畠山次郎、赤松新藏人、佐々木鞍智紀伊守、土岐民部少輔、播津掃除助之親、赤松治部少輔入道、有馬、赤松彌四郎。

御供衆（徳川氏の旗下と云ふが如し）　細川右馬頭入道道賢、細川民部少輔、細川下野入道常軒、一色兵部少輔義遠、畠山宮内少輔教國、細川上總介氏久（備中）山名宮内少輔豐之、細川讃岐九郎、細川兵部大輔勝久、大館兵庫頭教氏、畠山播磨守教元、山名七郎豐氏、上野民部大輔持頼、一色五郎政氏、細川讃岐守成春、

盜賊四方に起り天下騒擾し、張士誠は僭號して周朝を立て、朱元璋は明朝を建て、陳友諒は漢を立て互に攻伐を事とし、元遂に動亂の中に亡ぶ。而して天下を一統したる者は朱元璋なり。元璋は鳳陽府臨淮縣大平鄉の人にして都を金陵に定めて國を明と號す。是れ支那史中、希有の革命なりき。古來支那の革命は多く北人若くは西人を以て東南人の國を破るの革命にして、南人を以て北朝を覆して大成せるもの此時に初まる。此時高麗また久しく元に臣事し、金幣を捧げ婦女を献じ、土地を割き、年年其力を失すると共に、内には叛臣陰謀跡を絶たず。恭愍王に至り、元の惠帝、明朝に追はれて北方に走りて北元を立つるを見て、乃ち直ちに明に服事し、其嘗て元に割く所の遼東の地を得て、長く明朝に臣事す。この時に方つて、九州・四國・中國の浮浪、志を國中に得ざるもの、去つて運命を海外に賭するものあり。蓋し西南諸州の民、上古より已に海表を以て家となすが故に、漢晋時代より支那朝鮮を侵略せること少からざりしも、國家康寧なるや、各〻其生を聊するが爲暫く侵略を絶ちたりしが、北條氏の時、元の侵略を受けて之を破りしより海表を縱横するの志勃然として日本國民の間に起りしが、やがて南北朝の紛亂となるや、此志は正當なる軍隊の手によりて遂げられずして、内亂によりて、綱紀紛亂せるを幸とする所在無賴の徒によりて實行せられぬ。彼等は支那に向つて江蘇、浙江・山東・福建の諸州を侵し、朝鮮に向つては、南方諸道沿岸の都邑、殆んど到らざる所なし。彼等は

武田治部少輔國信、畠山中務少輔政光、赤松上總介元家、赤松刑部少輔、伊勢守貞親、富樫中務大輔、伊勢兵庫助貞宗、伊勢備中守貞勝。

御部屋衆（奥附と云ふが如し）　一色治部少輔政熙、上野刑部少輔政直。

*朝鮮の東國通鑑に、倭寇の始まる、忠王二年にありと云ふ。是れ我北朝の曆應元年也。

**支那の倭寇は支那人と聯結するに至れり。王直なる者、倭酋門太郎、次郎、四郎等と結びて、方一百二十歩の舟を作る。二千人を容るべく、木を以て城と樓櫓を作る。馬を馳せて往來すべし。薩摩の松浦津に居り、自ら稱して、徽王と云ふと。

圖書編に云ふ倭寇は薩摩肥後長門の人多し、其次は大隅、筑前、博多、日向、播磨、攝津、

數千百艘の兵船を連ね、八幡大菩薩の旗を立てゝ、甲冑に身を固め、鋭利なる刀劍を用ひ、嚴然たる一大軍隊を作り、或は財物を奪ひ、或は家屋を燒き、或は男女を擒にし、兇暴猛惡至らざる所なく、朝鮮*・支那**の沿岸、目するに倭寇を以てし、倭寇の名、小兒の泣くを止むるに至る。元已に倭寇のために苦しめられ、明に至つて愈よ甚しく、沿岸數里爲に人なきに至る。中に就きて朝鮮の和寇最も甚しく、恭愍王自ら五軍を督して、倭寇を防ぎて大敗し、明と使を聯ねて義滿に請ひ、倭寇を止めんことを乞ふに至る。然れども義滿もまた之を如何ともする能はず。已にして藤原經光なるもの朝鮮に投じて全羅道順天に在り。全羅道の鎮將、誘うて之を殺さんとして露はる。經光憤怒衆を率ゐ日本に還り、黨を募つて、更に倭寇を起し、入寇するごとに婦人小兒をも殺して遺さず。全羅沿岸の人烟、之がために空しく、京師震駭、都を鐵原に遷さんとし、倭寇遂に進んで咸鏡道の北青を蹂躪するに至る。高麗倒れて李成桂の朝鮮となりしもの實に倭寇によりて國中動搖せるが爲なり。義滿が天下の一統に誇りて公卿的榮華を夢みるの時、我國民は外に向つて此の如き大運動を試みつゝありしなり。

支那貿易、海賊、らつぱ、義滿明の封册を受く

然れども此時に方つて日本國民は唯だ殺戮兇殺のみを主とせるものと思はゞ大誤謬にして、斯かる倭寇の間にも、貿易は所在行はれつゝあり、即ち倭寇其者もまた一種の貿易商にして、事あれば則ち和寇となりしなり。また薩摩・肥前・長門・和泉の諸國は早く支那

紀伊、種が島、豐前、豐後、和泉の人多し。村岡良弼氏の古文書を引き、河内の莊園を證し、十三年の物價を如云ふ。一文は永樂錢一枚也。十六文酒二升代十三文慈仙一切廿四文（酒三升代、廿四文（酒つゝみ出立酒三升代アガリノ時）五十六文（魚代）十五文（大根三代）十五文（酢代）七文（慈仙一切十三文（墨代、廿四文（酒四升代、十四文（酒八升代、弟二日出立十一文（酒三升代、弟三日出立十二文（酒二升代、弟四日出立日中六文（酒八升代、廿四日出立日中、廿六文（酒肴三ヶ月分）四十文（酒肴代アガリノ時）五十五文（魚代）七文（酢代）七十八文（大根代）七文（慈仙代、廿四文（米代アガリノ時二度分）

また下總香取宮の古文書によれば應永廿五年の物價左の如し。百五十人手間分）

大陸と交通して互に物貨を交易し、大内義弘の富、最も大にして、其義滿の歡心を繫ぎし所以のものは最も貿易を重んじて支那大陸の物貨を蓄へしによる。而して日本國中、最も貿易の利を重ずるを解せるものは即ち義滿なりき。蓋し此時に方つてや、鑄錢の業久しく廢せられ、金は砂金のまゝに、銀は銀塊のまゝに授受して、交易の媒介は一に銅錢により、銅錢は多く支那大陸より輸入し來れるものを用ひたればなり。義滿最も驕奢にして錢を要すること最も多きが故に、支那貿易を奬勵するに於ては最も意を致す。而して倭寇なるものは此貿易の妨害なるを以て義滿明朝の依頼により、鋭意して之を盡くさんと欲し、或は斬殺し、或は煮殺せりと雖も、容易に之を盡くす能はざりき。之より先き菊池武政の猶ほ九州に跋扈するや、懷良親王を奉じて日本國王と號して支那と交通す。明の太祖朱元璋、書を懷良に致して倭寇を禁ぜんことを乞うて功なきを見るや、眞の天子にあらざるを疑ひ、則ちまた別に僧祖闡を遣して書を京都に致さしむ。義滿之によりて元明更革の情を知り、應永八年三月書を明主に送りて、自ら臣と稱し、黄金千兩を贈るや、九年、明の惠帝復書して、義滿を呼ぶに日本國王を以てす。虛榮浮誇の念多くして、而も無學なる義滿は、國王の號を得て深く滿足す。此に於てか、蕞爾たる大和朝廷を以て、猶ほ隋帝と相對峙せる我國の面目は全く沒了せられぬ。以て當時の文權を握れる五山の僧侶、朝廷の公卿が如何に無學にして事體に通ぜざりしかを見るべきなり。之より明朝送る所の勘合の印を以て、他の賊船と區別し、年々貿易船を發し、彼我の間、往來益す頻繁を加ふ。然れども倭寇は之がために毫も減ぜざりき。之より俗に戰艦を稱して海賊と云ふに至る。當時また海上の海賊と並びて陸上に『らつば』なる野武士あり。彼等は順良なる人民として、諸侯に仕へんには餘りに大膽に、獨立して諸侯とならんには時機を失したるものにして、强盜窃盜を業とす。諸侯もまた之を征服する能はず、之を利用して敵軍を斬擊す。此風應仁の亂を經て、所在にあり。

公卿義滿に媚附す、義滿死して法皇の號を贈らる

義滿已に天下を一統して南北を混蕩し、山名・仁木の豪族を夷平し威風堂々として當るべからず。之に加ふるに其驕奢なる前古比なく、支那貿易より得る所の器翫服飾、また其威柄を助く。此に於てか其參朝するや藤氏の公卿も階下に下りて拜跪するに至り、殆んど天子に仕ふるが如し。二條關白師嗣の子、道忠の如きは、義滿の偏名を受けて名を滿基と改め、以て之に媚ぶるに至る。その威權榮華、義滿以前に此の如きはなく、義滿以後また此の如きものあらず。然れども此の如き義滿の威風に對して屈せざる者は、唯だ一人ありき。大内義弘是れなり。義弘已に長門の要衝にありて近傍を略定し、また支那貿易と、倭寇を保護するとによりて大に富み、意滿ち氣傲り、今川貞世を誘うて足利氏に背き、自立して將軍たらしめんとす。貞世聽かず。義弘、則ち反つて之を義滿に讒して、貞世、自立の志ありと爲す。義滿怒つて貞世を追ふや、九州また亂れ、小貳忠

一五貫文（番匠十人手間）（壁治五貫文）（竺手五人手間分）（十一貫三百文（かぢすみ廿代）一三百文（飯びつ三）一二百文（おき島二）、こい二）

＊議管原秀長書を作る。

＊＊北條氏直二百人のうつばを扶持するを云ふ。倭寇大に朝鮮を犯す、諸將戰つて勝敗す、則ち金逸なるもの、能はず、足利義滿に來りて之を禁ぜんことを乞うて之義滿の情を告げ、義滿の齡を聞くや、菊慰王、之を怒つて倭寇と諸軍を率ゐて戰つて大敗す。郷地の建策し壹岐の二島を取つて、邊愚なる馬を絶ふ。倘んぞ元帥朴葉を以て道の云ふ。則ち蔵百穀を對馬に送り、兵船一百六十艘を擊退したるも探題永應二年、倭寇十年、高麗の禑王、僧釋迦牟尼の像を畫く。

資・菊池貞頼等、千葉・大村の諸黨と共に兵を擧ぐ。義弘擊つて之を夷げ、筑前を得て兵勢益す盛なり。是より義滿に屈するを快しとせず。時に鎌倉の氏滿已に死して、子滿兼之に代り、自ら公方と稱し執事を改めて管領となし、稍自立の跡あり。義滿之を怒る。義弘則ち檄を滿兼に傳へ、東西相起つて京師を攻めんとす。滿兼之を義滿に告ぐ。義弘則ち意を決して兵を擧げ、自ら水軍によりて和泉の堺に出で、京師に迫らんとす。義弘已に起るを聞くや、士岐詮直は美濃に起り、山名氏清の殘黨は丹波に起り、京極五郎左衞門は近江に起り、並びに之に應ず。義滿、諸將と共に義弘を擊つて之を殺す。時に應永六年なり。此より天下また義滿に敵する者なく、運命の寵兒は驕奢なる九年の生活の後、十五年五月を以て死す。其死するや天皇贈るに法皇の尊號を以てす。子義持之を辭して受けず。明帝之に恭獻王の諡號を贈るや、之を受く。義持、代つて征夷大將軍たり。

京都、鎌倉の内紛

義滿の死と共に動搖は始りぬ。十九年、天皇位を皇太子に讓る之を稱光天皇とす。南朝の殘黨、其兩統更立の約に負くを責めて已まず、所在兵を起す。義持、擊つて之を平ぐ。已にして鎌倉の上杉氏憲、足利持仲を奉じて兵を擧げ持氏を攻む。持氏は滿兼の子にして代つて管領たるものにして、持仲は持氏の弟なり。持氏走つて駿河の今川氏に倚り、執事上杉憲基は越後に走る。已にして持氏、義持に乞うて援兵を得て鎌倉を復し、持仲・氏憲以下を殺す。時に義持の弟義嗣北山の第に居り、義滿の世にあるや寵遇兄に超えて、義持の下に立つを欲せず。義持また之を嫉む。持仲の事あるや、義嗣私かに相應じて義持を倒さんとして、事露はる。義持則ち義嗣を相國寺に執へて之を殺す。義持已に義嗣の事に懲り、早く其長子をして權を得せしめんと欲し、應永三十年二月征夷大將軍を其長子義量に讓り餘子をして多く剃髮して僧たらしむ。已にして三十二年、義量死するや義持復事を見る。三十四年、赤松則祐の孫、滿祐、貞範の孫持貞と采邑を爭ふ。持貞庶流にして權利なしと雖も、義持之を殊寵し、赤松氏の所領五箇國を割きて其三國を持貞に與ふ。滿祐憤懣、白旗城に還り、兵を擧げて叛す。義持・細川持元・山名滿煕をして之を打たしむるや、諸將、京にあり徒黨して義持に迫り、持貞を殺し滿祐を許さんことを請ふ。義持已むを得ずして、持貞をして自殺せしめ、滿祐を免す。義滿が雄志によりて漸やく積成せられし幕府の權、稍〻落ちて强臣跋扈の端復た開く。三十四年、義持病む。義量子なきがため、或は鎌倉の持氏を迎へんと云ふものあり。卜筮によりて義持の同母弟青蓮院の僧正義圓を還俗せしめ、名を義教と改め、將軍とす。正長元年、義持遂に死す。

義教の勵精、持氏の自立

七月、稱光帝崩ず、後小松上皇勅して崇光の曾孫彦仁親王を立つ。之を後花園天皇とす。後龜山の皇子兩統更立の約の如くせんことを冀うて得ず。則ち走つて伊勢の北畠氏・越智氏によりて兵を擧ぐ。義教討つて之を平げ、皇子を執へて之を嵯峨野に幽し、正長の年號を改めて

應永三十年七月朝鮮の使大藏經を送る。

永享とす。持氏將軍たらざるを慍り、義教に屈するを屑とせずして曰く、我豈に還俗將軍に屈せんやと、猶ほ正長の號を用ふ。義教また兼心の己に服せざるを知り、勵精治を求め、權門の吹擧を禁じ、壁書を管領の家に送り、訴論の人は奉書の後十日を出てず出て、仔細を述ぶべし、此日限を過ぐる者は沙汰に及ぶべからずとす。また九州の富豪四人を京師に移して京師を飾り、大神宮及び高野山に諧るに托して、伊勢・紀伊に遊び、南朝の餘黨を馳致し、富士山を見るに托して、駿河の今川氏に館して以て鎌倉の形勢を窺ふ。其勵精刻苦殆んど義滿の風を存す。持氏の庸暗到底企て及ぶべからざるなり。併かも持氏一日も離叛の企を廢せず。蓋し是れ持氏の野心のためのみにあらず、地勢之をして然らしむるなり。之を先にしては源氏の平氏と爭へる、北條氏の朝廷を抑へたる、尊氏・直義の後醍醐を覆したる、皆其個人的勢力のみならず、實に其地勢と、此地勢によりて養はれたる人民の氣風とによる。故に足利氏の宗族にてありながら、氏滿・滿兼・持氏の鎌倉に管領たるや、また自立の志を抱く。京都の地勢、偏在して以て之に號令するに足らざるがためのみ。此時、村上頼清、信濃にあり、守護小笠原政康と境を爭ひ、連年鬪爭して數ば爲に敗らる。頼清、救を鎌倉に乞ふ。持氏之を助けんと欲す。小笠原は將軍義教に射を教ふるものなり。故に執事上杉憲實、持氏を諫めて曰く、鎌倉頼清を助くれば京師必ず小笠原を助けん、是れ京師と戰を開くものなり。且つ小笠原は清和源氏の流にして、足利氏と祖を同じうす。之を攻むるは同族相食むなりと。持氏聽かず、私かに一色直兼・上杉憲直をして、兵を集めしめ、先づ憲實を殺さんとす。士心多く憲實に屬して來らず。持氏則ち自ら憲實の邸山の内に至り、罪を憲直に歸して過を謝す。十年、持氏其祖八幡太郎義家の故事に從つて其子を鶴が岡の社に元服せしむ。憲實以て京師に不臣の跡ありとして諫め、將軍の加冠を請はんとす。持氏笑つて曰く、我は尊氏の後裔なり。爭でか黒衣法師をして冠父たらしめんやと。遂に義久と名づく。禮終つて憲實獨賀せず。持氏遂に意を決して之を除かんとして兵を集む。憲實其邑上野の白井に走る。弟清方兵を起して持氏と戰ひ、且つ使を京都に發して義教に訴ふ。義教乃ち上杉持房をして、五萬人を率ゐて東海道より下らしめ、上杉致朝をして、七千人を率ゐて北陸より上野に入り、憲實と兵を合して、鎌倉を攻めしむ。持氏敗れて降を乞ふ。義教許さず。持氏・義久・皆自殺す。持氏の遺孤・春王・安王あり。乳母長尾氏、抱きて日光に走り、人を遣はして結城滿朝に説かしむ。滿朝之を奉じて結城・古河・關宿の三城を修む。持氏の殘黨起つて之に應ず。持房・教朝・清方等從つて之を攻む。三城の諸將士、固守すること、三月にして城陷り、二孤また執へらる。長は十三歲にして、季は十一歲なり、共に刑場に臨み、泰然として死に就く。

赤松滿祐、將軍義教を殺す、赤松氏亡ぶ

義教已に鎌倉を亡ぼすや、また管領を置かず。思へらく天下の亂源

*一人を奥野直次と云ふ。

五年、使を明に發して國書方物を送る。明使また之に來る。其書猶ほ一勅諭日本國源義教と云ふ。

十年八月飛鳥井中納言藤原雅世新續古今集を撰す。

*此時義教の第義昭、古河の城、久しく陷らざるに乘じ、後龜山の皇子を奉じて、兵を起し、義教に代ちんとす。義教之を察して執へんとす。義昭遂れて九州に走る。

文安二年鎌倉の將士持氏の季子成氏を管領とせんと請ふ、之より復管領あり。

を拔けりと。然れども過てり。足利氏は天下の人心に恩威の歴史を刻めるものにあらず。その能く立つ所以のものは力征にあつて存す。鎌倉は京師に離叛するの志ありと雖も、また南方諸侯を威嚇する一の蓄積力たりしなり。今や鎌倉已に蹂躪せられて北方の武力を養成するの淵源なく、加ふるに足利氏累代の族黨皆京師・西南・東海に地を領して、其根據を据ゑしより、天下の武力、北方より南漸し、足利氏は自ら其立つ所以の基礎を失せるものなり。此より足利氏は皇室の如く、公卿の如く、諸侯の權力平均の上に立つの外、自家固有の武力なるものなきに至りぬ。義教之を悟らず、天下之より憂ふるに足らずとなし、諸將を輕んず。赤松滿祐は播磨・備前・美作の守護にして、反覆を耻ぢさる驕臣の一なり。其形貌卑醜にして短小なるを以て、義教之を侮慢して三尺入道と云ふ。滿祐屈せず、數ば義教を譏る。已にして義教が滿祐の族人貞村を寵し、赤松の領邑を割きて之を與へんとするを聞くや、義教を*甕應して其醉に乘じて、之を殺し、族人を率ゐて播磨に歸る。管領細川持之・畠山持國・大内持世等と議して、義教の子義勝を立てゝ將軍とし、兵を出して滿祐を擊つ。細川持常、南道より進み、山名持豐北道より進む。持常、滿祐と姻婚を通ずるを以て逗撓して進まず。持豐獨り進んで美作の諸城を下して還つて白旗城に滿祐を攻めて之を殺す。此に於てか、赤松氏全く亡ぶ。其先圓心、後醍醐に應じたるより暴かに家を起し、反覆跋扈する事九十年なり。持豐功を以て悉く赤松氏の邑を領す。持豐は山名

*滿祐饗樂を設けて義教に饗す、酒酣なるに臨み、義教の傍に侍して馬數十の時、滿祐起て足を放ちて門を閉ぢ、擾動に乘じて、小倉三郎を殺す。義教年四十八。

滿祐の姪教祐、九州に走つて小貳嘉頼に依る。大内持世命を奉じて代つて小貳の地を併す。これより大内氏また起る。

時勢の孫にして後剃髪して宗全と稱す。之より山名氏また漸やく榮ゆ、時に嘉吉元年九月なり。

畠山氏將軍を制す、山名、細川の二氏大なり　嘉吉三年五月

義勝の同母弟義成を立てゝ將軍とす、時に八歳なり。後名を義政と改む。持國已に幼主を立てゝ權を專らにし、剃髪して德本と號す。出入するに綱代の輿に乘り騎馬十二人を左右に從へ、威權將軍を凌ぎ、一條兼良、近衛房嗣等關白たらんとして、競うて德本に媚附するに至る。時に公卿の窮乏前古比なし。南朝の殘黨、日野有光・資親等之に堪へず。後龜山の第三皇子の僧となれるものを誘うて蓄髪せしめ、九月二百餘人の徒黨を募り、宮中に侵入し、火を放つて神器を奪ふ。衞士追擊、神鏡と寶劍とを得たり。日野の黨、玉璽によりて皇子を叡山に即位せしめ、中興の宮と號す。德本兵を發して擊つて之を平ぐ。是れより德本の勢威愈よ大なり。獨り山名宗全、昂然として扞拒し、細川勝元また之と結託して畠山氏を押へんと欲す。德本初子なく、其弟持富の子政長を養つて子とす。已にして義就を生み、漸やく政長を疎んず。義就また政長を讒して已まず。德本遂に政長を廢して、義就を立てんと欲す。政長出でゝ勝元に倚り、其從臣をして宗全によらしむ。政長、將士に人望あり。畠山の一族多く政長に從ふ。一夜火を德本の家に放つものあり。德本逃れて滿則の第に入り。義就は河内に走り、遊佐氏に宿す。德本已むを得ず、政長をして家を繼がしむ。是より畠山氏衰へて、細川勝元・山名宗全の二人

文安五年、赤松左馬助朝鮮より歸り、回復軍を起さんとして殺さる。

漸く大なり。已にして、義就、政長の命によりて相和すと雖も、何人も其明日を知る能はず。大亂の勢漸く決せんとするを見る。

義政帝王の儀を具ふ、驕奢より德政を生ず

此時に方つて義政年少を以て義滿驕奢の跡を受けて、氣宇愈〻尊大に、益す奢侈を極む。その大納言となりて參内するや、古昔藤原氏の公卿が乘れる檳榔毛の車に乘り、日野右大辨勝光、其簾を擧げ、滋野井左少將教國沓を取り冷泉左兵衛佐永繼、劒を取り全然王者の儀禮なり。また義滿の金閣に對比せんがため、東山に銀閣を立つ。その高倉邸の障子を作るに、一間に貴す所永樂錢二萬に當る。二萬の錢は以て二百石の米を買ふべし。また花の御幸と稱する遊幸には、百味を以て百果を作り、御相伴衆には金の箸を給し、御供衆の箸は沈香木を以て作り、金もて逆鰐口を作る。榮華此の如きが故に國用給せず。守護より二十分の一を取るの制も敗れ、衆民より四公六民の租を取るの制も破れ、臨時の課役、賦金を數ふれば、殆んど前代に十倍するものあるに至る。故にまた市民より債を起すに至る。市民の財を借るを倉役と號し、義滿時代には一年四回に過ぎざりしに、義政の時に至つては一月八九度に至るあり。遂に賃還の法なきや、一切の貸借を消して權利義務共に滅せしめ、名けて德政と云ふ。是れ古代にありて富民が貧民に錢を貸與して、利上に利を附し、遂に人身を低當とせしむるの甚しきを見て、帝王の德を布きて、此の如き窮苦を救はんがために初めたるものありと雖も、今や一變して政府借金を爲し、自ら德政と號して、借金を消すに至れるなり。

猿樂・田樂は其歡樂なり。聞香・茶の湯は其事業なり。語錄・山水は其宗教なり。概して云へば古今の豪華此に盡く。人民之がために流離逃散するもの相次ぐ。

足利時代の技藝

然れども此等の奢侈は多少の技藝と文字とを生ぜぬ。奈良朝・平安朝の技藝は多くは建築・彫刻なりき。今や義滿より義政に至る間に於て、日本の歷史に稀有なる繪畫の新紀元は開かれぬ。其の開元者は實に東福寺の殿司、明兆なりき。明兆は淡路の人、東福寺に釋迦涅槃の像なさを慨し、極力、之を寫す。其畫風は、初め巨勢の流に出づと雖も、支那近古の名作を學んで別に一家を爲すものにして、之より一新紀元を開く、世之を兆殿司と云ふ。時に明の畫師如拙來聘す、其門また周文・雪舟・狩野正信の三名手を出し、是より繪畫漸やく盛なり。而して此三者、各〻其趣を異にすと雖も日本の自然山水に養はれたるものにあらずして、南宋の自然山水に養はれたるものなるが故に宋風を帶びたり。是れ足利氏に至りて大陸との交通を始めたるの結果なり。而して當時の技藝の最も顯著なる特質を示すものは、金閣・銀閣の二者なり。共に綺麗なり、共に瀟洒なり。綺麗は國人固有の好尙より來り、瀟洒は當時の宗教たる禪味より來る。而も壯大を缺き、雄偉を缺き、到底奈良時代の建築の巍々たる規模を有せざるなり。是れ奈良時代は技藝の飜譯時代にして、平安より足利氏に至りては日本的

好尙に化せられたる爲なり。此かる綺麗・瀟洒・奇巧の好尙中より後藤祐乘の金屬彫刻を生じ、蒔繪も更に進歩し、祥瑞の燒物も唐津に興り、明珍の冑も出でぬ。僧珠光の手より茶の湯も流行し、世阿彌・獻阿彌の爲に猿樂は絕大の發達を爲し、凡そ一般人民の日常の幸福を進むべき技藝こそ發達せざりしと雖も、貴族的嗜好を滿足せしべむき技藝は、雜焉として室町御所の保護の下に生長せぬ。

足利時代の文學

文學もまた多少の進歩なきにあらず。北條時代より學問は公卿の手を離れ、學校を去りて僧侶殊に禪僧の手中に歸せしに、高時の末年より天下の爭亂一日も已む時なかりしため、文敎は全く埋沒せられぬ。後醍醐即位の前、鎌倉の執權貞顯の孫金澤顯時、金澤に文庫を立て、和漢の書冊を集め、貴賤を問はず、篤志の徒に貸與せしが、足利氏に至り上杉憲實其の敗壞を補ひ、また王朝時代の下野の國學を再興し、僧侶を聘して諸生に敎授せしむ。是れ所謂足利學校なり。東西の將士、各〻其子弟に學ばしむ。其學問を士流の間に流布するの一事に於ては、足利時代は決して王朝時代に劣るものにあらざりき。且つ其文學上の製作に於ても、直義時代に生じたる太平記あり。義政時代に生じたる謠曲あり。また他の時代に對して、足利時代を飾るに足る。太平記の作家、知るべからずと雖も、世に小島法師の作なりと稱せらる。日本文學は歷史的積勢により、文明の性質により、純乎たる大和詞のみを以て遣るべからざるものと決定せられしも、唯だ疑問は如何に漢文を混和すべきかにあり。最初に此問題を解釋したるは紀貫之等なりと雖も、猶不十分たるを免れず。次に解釋したるは鴨長明等なりしと雖も、猶ほ大和詞の多きに失したり。平家物語と源平盛衰記とは、最も滿足に近き解釋を爲しぬ。今や太平記は、更に一種の解釋を爲し、漢詩を混和すること、稍や前の二書よりも多く、其語脈もまた一層漢文に近づき、以て貴族的習氣ある者の需要に應ずるに至りぬ。其文、源語・盛衰記の沈痛勁烈を缺くと雖も、優美にして品位ある一點に於ては遙かに二書に勝る。是また平氏の末路、北條氏の時代より足利氏の時代が、南人的の感情と、貴族的好尙とを有したるを示したるものなり。而してその議論に至つては、最も能く當時に行はれたる思想を代表す。後醍醐は、太平記の爲に無實の非難を得たり。然れどもまた無實の稱譽をも受けたりき。尊氏も然り。義貞も爾り。太平記が、事實の史料としては誤謬多きや疑ふべからず。然れども當時の社會に行はれたる議論感情は、最も能く太平記に於て代表せられたり。英國淸敎徒の革命は、尊氏等が勝ちたると同じく、クロムウエル等の勝利なりき。然れども彼等は文學・技藝を輕んじたるがため、一人彼等のために之を傳ふるものなく、皆敵黨のために畫かれたるがため、あらゆる缺點は擧げられたり。あらぬ害惡は擧げられたり。然れども其美質は悉く埋沒せられたり。彼等は獅子の如く勝ちて、犬の如く傳へられたり。若し延元の內亂をして、唯一北畠顯房等の黨派をして筆せしめば、尊氏等もクロムウエルの如くなりしならん。唯一

の太平記あり。兩黨の姸醜悉く傳へられしなり。謠曲に至つては、足利時代に至つて初めて生じたるものにして其本を宋末元初の詞曲に發したるものゝ如し。義滿、世阿彌・觀阿彌を寵用してより、猿樂は絶大の發達を爲し、遂に公會の樂と定められるゝに至りぬ。猿樂の起原に至つては新近ならず。然れども謠曲を以て之に附し、高尚優美なるものとなしたるは足利時代に始まる。而して當時の文學は重に五山の僧侶に握られたるがため、謠曲の多くは、また佛教思想を以て、人生の運命を批評するの具となりぬ。然も其文章は一種の詩なり。叙事詩よりも殆んど敍情詩なり。其調雲烟漂渺、有を以て無となし無を以て有とす。文章の瑰麗に於ては殆んど其能事を盡しぬ。已に太平記を有し、謠曲を有したる時代は、短歌に於ても、また決して貧しからざりき。當時の和歌は新葉集・新續古今集あり。當時の歌人とも云ふべき公卿は、爭亂に遇うて東奔西走し、擾々騷々、唯だ生きんことを求むるのみ。殊に藤原の定家死して、其子爲永、歌を以て業とせしより、格調を定め、句法を定め、語法を定め、古詩を見ること、聖經の如く、之に觸るゝ、神聖に觸るゝが如くし、詩人をして其規矩の外に逸せしめず。逸するものを異端として排せしかば、歌道凌遲また振はず。故に、此中固より古今の清麗、萬葉の雄邁を發見する能はずと雖も、然も當時の詩、多く人生の實際より出でしものなれば、誦すべきもの少なからず。殊に南黨の手に出でし離別感懷の詩に至つては人をして悲泣せしむるもの少からざるなり。然れども詩人の才、固より常に新奇を求めずんば已まず。連歌の法を發明し、甲乙唱和以て其志を云ふに至りて、一種の新形式を爲し、公卿には攝政二條良基・關白一條兼良・僧心敬・宗祇、最も名あり。中につきて宗祇、最も秀出し、多少の宗教的思想を有し、身を雲水に託して天下を周遊し、足跡殆んど至らざる所なし。是より連歌の風天下に遍ねし。史家が足利時代を稱して暗黑時代と稱するは、その戰鬪日夜已む時なかりしが爲に、その一面を見て之を云ふのみ。其實文明の萌芽は已に業に此中に存したりしなり。

元亀三年細川藤孝が三條大納言實澄傳授より古今集の秘傳を受くるや左の誓文を納れたり。御傳授之事、古今集御傳授之請、爲御門弟、御誓紙之上者、永如御說、子孫不可存疎意故、義滿世阿彌・觀阿彌寵用以他言口外儀、是非、言語道斷之段、其旨候、背者、大日本國中之神罰、冥加忽殊和歌中興之人、可有之、令禁制之、如此條條存之法度、若違之輩、可被加誅罰者也。其身百神之罰

第二十二章　戰國時代（神武紀元二千百二十七年より二千二百三十七年に至る）

應仁の大亂、將軍義政、其室富子

然れども諸侯は此の如き時代に生活するを知らず。野心、貪亂、相爭うて此活力を鎮壓せんとす。故に無言の時勢は彼の野心家をして、大に戰うて氣盡き神疲れしむるを待つの外なしとせるが如し。享德三年十二月、鎌倉の成氏、其執事上杉憲忠を以て、父持氏の仇となし、結城氏朝の子六郎成朝と謀つて之を誘殺す。憲忠の族人服せず。兵を擧げて之を攻む。成氏敗走、古河城を守る。之より連年鬪爭寧歲なく、坂東八州大に亂れ、義政の弟、政知を請うて鎌倉の主となすも、人心服せざるを以て伊豆の堀越に居る。之を堀越御所と稱し、成氏の古河御所と幷稱す。北方が此の如く亂るゝに方つて、中原の大亂漸く熟し來りぬ。康正元年畠山德本、赤松氏の後を立て、功臣の家を保たんと欲し、赤松敎祐・則尙に播磨を與ふ。山名宗全、見て以て己の勢を削くものとなして、二人を攻めて殺す。之より先き中興の宮が日野の徒黨となりて敗北するや、其子また南朝殘黨の擁立する所となる。赤松氏の遺臣、石見・間島・中村等、之を暗殺して、神璽を取り、功を以て赤松氏を復興せんとを乞ふ。朝議之を許して、政則に加賀を與ふ。然るに宗全見て以て勝元が己の權を削らんとするものとなして政則を殺さしむ。是より宗全の威、幕府を壓し、細川勝元と相當る。是より先き勝元、宗全の女を娶つて子なきを以て、宗全の子是豐を養つて子とす。己にして子を生むや是豐を廢す。宗全益〻勝元と隙あり。寛正五年七月後花園天皇位を去つて後土御門天皇の立つ頃は兩黨の間愈よ軋轢して正に火を發せんとするの勢あり。義政、奢侈に於ては一大過失あり。然れども敏才にして果決あり。昂然自ら高く標し、夢想の如き大志あるに於ては、之が匹敵を求めんには當時其人なかりき。義政贈左大臣裏松重政の女富子を娶りて寵幸比なし。言として聞かれざるなく、聰明爲に頗る掩る。香樹院の局・春日局・眞藥西堂・伊勢守貞親等又相慫慂す。故に賄賂公行し、論訴刑賞、多く內人によりて決せられ、管領の權又行はれず。忽ちにして賞し、忽ちして罰し、また忽ちして許さるゝと少からざりしかば、諺に勘當に科なく、赦免に忠無しと云ふに至り、富子は殆んど後醍醐に於ける三位准后の如くなりき。富子子なし。義政之を憂ひ、弟義尋が淨土寺の門主たるを强ひて還俗せしめ、名を義視と改めて養子たらしむ。細川勝元、其執事たり。富子怨憤、走つて宮中に入り、其姨母に依る。已にして意を屈して義政の邸に歸るや、久しからず子を生む。中外私に之を以て義政の子にあらずとなすものあれど、義政毫も疑はず。寵愛比なく、遂に義視を疎んずるにいたる。然れども初め義視を養つて子とするや、決して嫡長たるを廢せずと約したるを以て、富子銳意して其子を立てんと欲して、遂

*天皇名は成仁後花園の子也。

に勝元の敵手、山名宗全を誘うて曰く、一人の子を僧侶たらしむるに忍びず、之を以て汝に託す。汝が爲さんと欲する所を爲せと。宗全遂に意を決して富子の附託を諾す。此時に方つて畠山政長の義就と爭ふや已に久し、宗全義就の勇武を利として、政長を捨てゝ義就に和し、以て用を爲さしめんとす。斯波氏もまた義廉・義敏互に權を爭ふ。宗全義廉を助けて義敏を排す、義政固より義廉を憎む。義視が義廉を助くとの風説を聞き、即ち義視を義絶す。義視去つて細川勝元に倚る。是に於てか一方には勝元あり。義敏あり。政長あり。一方には宗全あり。義廉あり。義就あり。兩黨の旗幟漸やく分明なり。義政之を憂ひ命じて曰く、義就・政長宜しく獨力戰を決すべし。諸將の之を助くるを禁ずと。二人御靈の森に戰ふや、宗全私に義就を助けて、政長を破る。是に於てか、勝元、大兵を集めて宗全を攻めんとし、宗全も亦大兵を集めて之に備ふ。時に應仁元年三月なり。所謂應仁の大亂此に始まる。

混闘十一年　此時に方つてや、天下また南北朝を語るものなく、正統・僞統を語るものなく、新田・足利を語るものなし。皆細川・山名の大軍の下に集る。勝元は其領國攝津・丹波・土佐・讃岐等の兵を集め、且つ之に黨するもの斯波義敏・畠山政長・京極持清・赤松政則・富樫政親・武田國信、其他、將軍の近臣、數十人、其軍數萬に達す。勝元の邸、京都の東方にあるの故を以て、之を東軍と云ふ。宗全は但馬・播磨・備後等の領邑より兵を集め、之に黨する斯波義廉・畠山義就・畠山義統・一色義直・土岐成頼・六角高

*應仁記によれば勝元の軍十六萬一千五百人にして宗全の軍十一萬六千人

頼・大内政弘・河野政通等の軍を合して、其兵十一萬。其京都の西方に陣する故を以て、西軍と名く。國を以てすれば、西軍に屬するは、播磨・但馬・因幡・伯耆・石見・美作・備前・大和・河内・紀伊・能登・越前・尾張・遠江・近江・丹波・伊勢・美濃の十八國にして、東軍に屬するものは、安藝・若狹・加賀・近江・飛彈・出雲・隱岐・越中・紀伊・參河・備中・土佐・讃岐・攝津・丹後・和泉・淡路・阿波の十八國なり。日本の大半、悉く此黨爭に與かる、與からざる者は、東海・東山の一半と西海道のみ。楠氏の遺族、南黨の子孫、皆黨を分つて、兩軍に屬す。五月に至つて、兩軍京都に充滿し、市民驚奔して大半盡く。勝元最も巧慧にして、利害の打算に敏に、冷靜にして沈着、然も、其斷ずるに方つてや、深酷にして大膽、南人の特色を有す。宗全に至つては、一個木强の頑物にして人を殺し、人を威し、人を壓するを知るのみ。打算に至つては極めて少なし。然も諸將を致すものは、その勇武敢爲の氣質のみ。義視、東西兩軍に往來して調停し、義政の旨を傳へて、先づ戰を開けるものは、即ち公敵とせんと宣言す。兩軍之が爲に相持して發せず。勝元先づ幕府を取つて天下に號令し、順逆の名によりて、宗全を苦しめんとし、營を幕府に連ね、兵を發して幕府を守り、足利氏の旗を出して、四門に立て、諸將を幕府に集めて謀議す。宗全、勝元の爲に幕府を取られしを憤り、兵を發して之を攻めて勝たず。是より兩軍交も巷戰して寧日なく、盜賊公行、火を放つて財を掠む。六月八日、火九ヶ所に起りて、百町三萬餘戶を燒き、

なりと云ふ。然れども當時此大兵を動かすこと能はざるべし。

京師の中央、茫々たる荒原となり、前代未だ曾て聞かざる慘狀を生ぜぬ。已にして大内政弘、長門・周防・筑前・豐前の兵三萬人を率ゐて宗全を助くるや、宗全の軍、益す勢を得て、勝元數ば敗る。勝元則ち義政私かに宗全を助くるを疑ひ、近從の士十二人を請うて之を追ひ、猶ほ義政が宗全の陣に走らば、天皇を擁して戰はんとし、宗全が皇居を襲ふの恐ありと脅かして、室町の第に行幸せしむ。伊勢貞親、義視と隙あり。流言して曰く、勝元義政を廢して、義視を立てんとすと。義視走つて伊勢の北畠氏に倚る。北畠氏は極力、尊氏と抗爭せるもの、今や尊氏の子孫北畠氏によるに至つては、世變の甚しきを見るべきなり。已にして義政、手書を以て義視を招く。義視歸れば復流言あり。勝元、義視を奉じて義政と戰はんとすと。勝元則ち、義視をして山名の陣に入らしむ。宗全大に悅びて首領を得たりとなし、義政また心を安じて勝元の陣中にあり。世之を名けて東西の戰、一變して兄弟の戰となれりと云ふ。此の如きもの五年、文明五年三月、宗全七十歲にして死し、五月勝元もまた四十四歲にして死す。兩軍其首領を失ふと雖も、相持するもの四年、文明九年、天皇宮に歸るや、西軍の諸將先づ引いて國に歸り、義視、美濃に走りて土岐氏に倚り、東軍の諸將もまた各〻國に歸る。應仁元年より此に至るまで凡十一年にして、京師初めて靜謐なり。而も之と共に諸將國に歸つて、各〻封疆を固め、戰鬪を事とせしかば、中原平ぎて天下漸く亂世に向ふ。

*之より先き京に京白河を并せて二十萬戶ありき（倭鳳草案）

**京師の民の利に敏なる、此大亂に際して、奈良と坂本とに日々市を立てて、兵士盜賊の掠する貨財を賣買せり。

***一條兼良の孫攝政政房、兵庫の領邑を武士に之を加へにあり。又兼良に加へて殺す。其兼良を歌うて曰く、「聞きて之を執へて死ぬに武士ぞ事ぬ以て命をいかにも生れし家にのくやしきと其公卿境遇の窮苦を知るべし。

京師荒廢して公卿四散し一向宗獨り榮ゆ

京師既に靜謐に向ふと雖も、十一年間の巷戰に、宮殿・寺院、文武の第宅、民家、烏有に歸し、京師大半荒原となる。而して兩軍の將士、市民の倉中にある財物を賭して博奕に敗るゝや、其倉中に闖入して貨物を奪ひ、以て勝者に償ふの風あり。また公卿が亂を避けんが爲豫め藏匿したる財貨も、兵士盜賊のために抄掠せられて一物をも餘さず、歷朝の圖畫・寶器、悉く壞滅せしかば、公卿は亂平らぎたるを見て、歸らんとするも家なきがため、高野の寺院、中國の知人、長門の大内、九州に流浪し、市民は商賣せんとするも道なきがため、行く手定めぬ漂泊の旅行を始めぬ。公卿・市民已に自家の活路を有せざれば巍々たる大堂の中に住みて天下を睥睨せる僧侶も、今は身を寄する所なきがため、或は食を道に乞ひ、或は變じて盜賊となるものあり、京中の光景此の如くなるに加へて、此年大に旱して米穀の收穫を過ちしより、餓莩京師に滿ち、東西兩軍の將士國に歸つて戰端を開くや、貢賦來らず。米穀上らず。皇室の如きは窮乏の頂上にあり。紫宸殿の築地敗るゝも、之を改修するの道なく、三條の橋より之を望むに、內侍所の燈光を見るに至りぬ。獨り此際富榮なりしものは、眞宗の蓮如のみ。蓮如は親鸞八世の孫にして、洛東大谷に道場を開くや、叡山の僧侶に迫害せられ、逃れて字治の山科に移る。而して時人之を尊信して爭亂の間に於て猶ほ財を積んで之に奉じ、富諸侯よりも大に、其御文章なるものに至つては、天子の綸旨を糞土に比する武夫をして、能く感

信せしめたり。

政權下に移り、舊社會解けて新結合生ぜんとす

應仁の亂は勝元・宗全の權を爭ふに起り、義就と政長の畠山家嫡を爭ふに長じ、富子の子義尙と義視との將軍を爭ふに成る。十一年の戰鬪に勝敗を決せざりしが、東西兩軍の解き去るに先だちて、義尙立つて將軍と成り、義政退隱し、義就國に就きて、政長管領となりしかば、其結果に於て兩軍の主張は交綏せられたり。而して義政、東山の銀閣に退き、喫茶・聞香を事とし、古器・書畫を弄す。彼の覇氣已に衰へたると、多少の禪味は、天下の大亂を見つゝ悠々一世を忘れしむ。是より先き文明三年、京師の大亂に乘じ、斯波氏の家臣・織田・甲斐の二族、亂を爲して、其主義雄を弑して、甲斐は越前を取り、織田は尾張を取る。家臣朝倉敏景京師にあり。變を聞き國に歸り、甲斐を殺して、越前を領す。是れ戰國簒奪の初なり。是より簒奪風を爲し、政權益す下に移る。同年上杉顯定は、成氏を古河に攻めて下總の千葉に走らしむ。已にして和するや、顯定上野の平井に戰つて八州を管領す。上杉定正の家臣太田道灌父子、河越・江戸の兩城に分居し、節儉にして民を安んじ、政治を公平にして民心を收めしかば、八州の士民漸やく定正に歸す。是より兩上杉隙あり。數ば兵を交へて寧日なし。已にして顯定反間を放ち、定正をして道灌を殺さしむ。時に文明十八年七月なり。道灌既に死して士心多く定正に背くや、顯定急に之を攻む。此の如く南方は應仁の亂の怨恨に

※文明五年十二月義尙將軍となる、時に九歲。

よりて互に國境を爭ひ、關東はまた强族崛起のために相爭ひ、日本全國、所として干戈を見ざるの地なきに至りぬ。此時に方つて　尊氏以來、門地を占めし者或は驕惰によりて衰凋し、或は敗北により て零落し、政權下に移るの過渡にして、位にある者、能なく、所領大なる者、力なく、族黨内に爭ひ、骨肉交も戰ひ、天下の大勢滔々として傾き、族黨の力恃むべからず、歷史の力恃むべからずして、此に新結合を生ぜんとして、正に是れ四夫獨力を以て天下に呼號するの時なりしかば、智勇辨力に秀づるの壯士、一劒千里を横行して友を求むるの風を生ぜぬ。

伊勢長氏の成功、畠山、細川の爭奪、天皇崩じて葬るの財なし

當時の壯士、族黨の力なくして、最も成功せるものは伊勢の長氏なり。彼伊勢に生れ、少小功名の志ありと雖も、其時を得ずして屈せしが、今や應仁の亂は天下諸侯の優劣强弱を暴露するや、室町將軍仕ふるに足らずとなし、荒木・山中・田目・荒川・有瀧・大道寺等の壯士と共に、駿河に入つて今川氏親に仕ふ。氏親、其勇武を愛し、駿河・伊豆の境を守らしむ。長氏乃ち襲うて上杉氏の國を取り、遂に八州の雄となり、北條氏を稱するに至る。天下の形勢此の如く一變せるを知らず、京都の將軍は、猶ほ詩會を開き、官職を競ひ、書を講じ、使を明に發して金を送り、錢を受く。京師亂後に際して盜多きや、佐々木高賴の地近江にして、最も京師に近きを以て命じて京都を守護せしむ。高賴應せず、長享元年義尙怒つて兵を發して之を攻む。已にして義尙病

あり陣中に死す。義尚子なし。義政、義視を招き、其子義材を立てゝ將軍とす。後名を改めて義稙と云ふ。義稙、義尚の志を繼ぎ、必ず佐々木高頼を亡ぼさんとす。京師盜多きを以て、天皇手書して義稙を召還す。已にして畠山政長に擁せられて義就の後義豐を河内に攻めて正覺寺に軍す。細川政元等政長の驕傲を忌む。義豐之を利として政元に援を乞ふ。政元則ち義稙を正覺寺に圍む。政長戰死し義稙は執らへらる。之より先き伊豆堀越にある足利政知、後妻の子義通を愛して、長子を疎んず。長子怨憤政知を害す。義通、逃れて駿河の今川氏による。今川氏、伊勢長氏をして、其長子を擊つて之を殺さしめ、義通を政元に託す。今や義稙幽せられて京師主なし。政元則ち義通を立てゝ將軍として名を義澄と改む。義稙逃れて大内氏に頼る。大内義興兵を起して政元を討つ。斯かる爭亂の中に後土御門天皇崩じて、後柏原天皇立ちしが、御即位の禮の行はれざるのみならず、幕府四方に徵發するも、費用至らざるが爲、其の柩を黑戸の御所に置くこと、四十餘日、僅かに一萬疋の金を得て之を葬る。政權下に移るの風滔々として盛んなり。細川政元は、其部下香西又六の爲に殺され、政元の部下三好長輝、族人細川澄元、香西を殺し、細川氏の權、三好長輝の手に歸す。越後の長尾爲景、其主上杉を滅ぼして越後を領す。此の如き政權下移の變は國司より守護、守護より小城主に至るまで、到る處に連發せぬ。

大内義興、京都の權を攬る、貴族食を四方に乞うて生く

前將軍義稙、周防にあり名を義尹と改む。永正五年大内義興、義尹を擁して京に入る。時に三好長輝・細川澄元、京師の權を執り、兵を攝津に出し、逆擊して勝たず。義澄を奉じて近江に走る。是より大内義興幕府の權を執ること、十一年。財用足らずして永正十五年、兵を率ゐて國に歸る。義興、國富むが爲に、其京師にあるや、朝廷・公卿、少しく窮乏を免れたりしに、今や義興去るや、朝廷・公卿の財源盡き、公卿には、義興によりて周防に逃るる者あり。義尹、義興を失して孤立し、細川高國の抄掠に堪へずして淡路に走る。高國則ち義澄の子義晴を播磨より招きて將軍とす。京師の窮乏、前古比なし。後柏原天皇此かる間に崩じて後奈良天皇卽位せしかども、即位の大禮は固より行はれず。衣食の費用すら缺き、公卿道を分つて近畿に遊說し、若しくは金銀、若しくは米穀を得て、用を足すに至りたれども猶ほ足らず。之より先き朝權衰へたりと雖も政權の衰へしのみ。御料所ありて以て朝廷の百官王公嬪御を養ふに足り、社會的榮譽の源泉たりき。今や然らず。政權と共に社會的榮譽の源たるべき光榮すら之を失ふに至り、堂々たる皇室、其日用の費にすら窮するに至る。古今大變の極と云はざるべからず。また從來は皇室、窮すれども、貴族の或者は猶ほ其體面を保つものありしが、今や凡ての貴族もまた窮乏し、關白料と號し、公卿、袋を携へて京中の市民に米穀金錢を乞ふに至りぬ。

貴族、將軍を擁するも功なし

此の如く朝權已に地に落ち、幕府も亦空名となる。取るも得なく、失ふも損

せず。故に何人か之を擁するも、以て天下に號令するに足らざりき。細川高國已に京師にあり。朝倉孝景また天下に號令せんとして、京師に入つて高國と力を合す。然れども一も其威力を增加せず。享祿四年、三好長慶、細川晴元と泉州堺によりて京を脅かし、遂に細川高國を攻殺す。將軍義晴則ち晴元を以て管領とす。晴元三好長慶と權を爭うて戰ひ、三好の黨與數ば京を侵す。天文八年義晴亂を避けて八瀨の里に入る。此の如く京師の變動は、勝つも敗るゝも天下の勢を變ずるに足らず。極めて無意義無結果のものとなりしとき、東海・北陸に恐るべき勢力を生ぜぬ。

南人北人、疲勞して新勢力中央諸州に生ず

桓武天皇の勝利は南人を以て北人に勝ちたる歷史なり。平氏の勝利も亦此の如し。源氏の崛起は東人を以て南人を壓したるの歷史なり。北條氏の勝利も亦此の如し。高時の敗滅、後醍醐の失敗は、南北兩勢力の參差交錯したる結果なり。此の如く南人の勝利にも北人の勝利にも、常に中間にありて刺激せらるゝものは東海・北陸・東山の諸國なり。此等諸國の武士は、南人と北人の交戰往來によりて、其勇武と智慧とを感受したり。是等中央諸國の山林が北帶植物と南帶植物の相交互に混和するが爲、最も繁殖する所なるが如く、南北人種の血液は、是等中央諸州に於て相混和し、文明の要素は、此にその融化混蕩を生じたり。故に高の師直・師泰の其兵を用ふるや、雄武精銳、天下比なきに至る。之に加ふるに北方は鎌倉が政變の中央たりしがため、幾十回の紛亂を經て已にその積富の大半を費したり。南方は京師が政變の中心たりしがため、一起一仆の間に其實力を消磨したり。之に反して中央諸州は、何時も政治の中心に遠かりしが爲、中頃高家の管領となりて、南北に轉戰したるの外、其力を徒費せざりき。故に南北の氣力漸やく疲るゝの時、中央諸州は、其人民の繁富なる、其實力の廣大なる、遙かに他の南北に超過せぬ。斯かる形勢の中より麟生せられたるものは、駿河の今川義元なり。甲斐の武田信虎なり。三河の松平氏なり。尾張の織田信秀なり。越前の朝倉孝景なり。越後の長尾輝虎なり。是より天下の權力中央に集まる。

駿河の今川氏

今川氏は足利の族黨にして、尊氏、鎌倉を出づる時、相伴へる三十餘族の中、最も尊重せられたる者にして、其初吉良氏と一家にして、後分れて駿河を領す。ゆゑに時人將軍若し子なき時は、吉良・今川の一家より其人を出すべしと云ふ。今川氏の家聲此の如く高きに係らず、初より京都の政權爭奪に與からず、遠く駿河・遠江に退きて國境を保つ。氏親の時に至り、足利氏政綱を失して天下壞亂するや、則ち四方の浮浪を集めて侵略を事とす。氏親の長子氏輝子無く、弟義元を嗣とす。義元、最も雄豪、大志あり。略ぼ文武に通じ、威恩を以て部下を勵まし、常格を破つて卑賤の徒を重用す。善德寺の僧大原と語り、其材を愛し、延きて幕僚となし、諮ふに國事を以てし、遂に方面の將たらしむるに至りしが如き是なり。故に國勢日に張り、三河を攻めて尾張に入る。

武田晴信の人物、軍隊、政治

武田氏は甲斐源氏の流なり。逸見有直と共に甲斐を分領して、足利持氏に屬す。信滿に至りては上杉氏憲に黨して持氏に抗し、邑を失つて流浪し、逸見氏其邑を併す。信滿の子信長、歸りて逸見氏と爭うて勝たず。己にして信長の兄、信重、歸りて舊封を復して、威勢漸やく大なり。逸見氏恐れて臣屬し、甲斐全く武田氏に屬す。信重の後信虎に至り、南駿河の豪族久島氏を擊つて之を併せ、今川義元と婚を通じ、西信濃に出で、平賀小笠原の諸領を侵し、威勢漸やく大なり。信虎の長子勝千代、信虎のために愛せられず。勝千代、則ち其姉の夫今川義元に結托して、義元の奏請によりて官職を得、將軍義晴の偏名を受けて名を晴信と改め、三條公賴の女を娶る。信虎之を如何ともする能はず。天文五年、信虎信濃海野口に平賀賴成を攻め、戰ふこと月餘にして拔けず。信虎意沮みて軍を旋す。晴信兵三百を請うて殿し、賴成の兵四散するを窺うて、急に襲うて其城を取り、賴成を殺す。信虎、其功を忌みて賞せず。益〻之を疎じ、其弟信繁を愛して之を立てんとす。晴信則ち其家老飯富虎昌・板垣信形と謀り、信虎を廢せんとして、情を今川義元に告ぐ。天文七年、信虎、晴信を迫はんとして之を義元に託すと號し、自ら送つて義元に至る。義元信虎を執へて歸さず。晴信則ち自立して國主となる。是より數ば信濃に出て、諸族と爭ひ、大半之を取り、遂に駿河の今川、越後の上杉、尾張の織田、三河の德川と相爭ひ、四隣震驚す。晴信剛果にして深沈、最も權數に富み、韜略に通ず。少小にして云ふ、五千の兵を以て天下を横行せば、何事か成らざらんと。彼は應仁以來の暗黑時代が生じたる典型的武將の最大なるものなり。彼は感情を有せず、一大意思あるのみ。其意志や氷の如く冷かに、鐵の如くに堅し。而してこの强固なる意思は、殊に軍隊組織の上に現はれしかば、應仁以來、賭博を以て、抄掠を以て、拔けがけを以て其生命とせる軍隊は、彼の國に於て初めて訓練あり、組織あり、持重して輕進せず、一たび進むや、觸るゝ所皆敗るゝ最良の軍隊となれり。彼その軍旗に書して曰、不動如山、侵掠如火、其靜如林、其疾如風と、彼の軍隊は眞に此の如きものありて、全く其大なる意思の權現せるものなりき。之より先き、武將は一個豪果敢爲の勇將のみ。文字の如きは、其知らざる所、知るもまた一錢に當らざりき。今や足利氏の爲に得たる小康は、文學をして武門に普通ならしむ。文學によりて前言往行を鑑むるにあらずんば、以て志を得、人民を安ずる能はざるに至りぬ。古の武將は未だ十分なる封建の下にあらず、半ば戰士にして半ば代官、誅求抄掠は、其業なりき。今や封建漸やく成らんとして、國を有するものは、唯だ一の武將たるに止まらず、また民政を重んずる一の國主たらざる可からざるに至りぬ。故に此時代に於て勝利を得んには、多少の學術なかるべからず。民政を重んぜざるべからず。而して晴信また此點に於て實に代表的武將にして、詩文を知り、宗教を知り、最も志を民政に止め、民富を進めんとし、其採掘し且鑄冶せる甲州金は一

代の通寶たり。西南諸道の武士が野武士、强盜の如き生活を營むの時、中央に於ては此の如く森嚴克己の武將を生じたり。而して其居る所は秦の六國に臨むが如く、攻むる時は低地に臨みて下瞰し、守る時は嶮要によりて高地に居るがため、四隣、慴伏、恰かも六國が秦を見るが如きものありき。德川家康其隣國にあり。常に其兵法、民政を見て之を嘆美し、百事之を師として經營するに至る。家康が他年、天下に雄飛するに當り、機敏にして持重一點の浮氣なく意思强健、民政を重じたるもの、其素質と雖も、また實に信玄に負ふ所多かりしなり。

織田信長

信長に至つては全く信玄と相反す。信長の先、世々越前にあり。足利高經の家臣たり。高經の子斯波氏を稱するに及びて朝倉・甲斐の二氏と共に其家老たりしが、信秀に至り斯波氏を追うて尾張を奪ふ。信長は信秀の子なり。名古屋に築きて之に居る。資性磊落情を縱にし、毫も制する所なし。然も其勇邁の志、果敢の氣、能く部下を率ゆ。信玄は其意思によりて組織を爲し、組織によりて部下を用ふ。信長は其個人的英發の氣によりて部下を鼓吹し、英雄を集む。然かも識見能く泥土の中より將軍を作り、膽氣能く敵人をして心を飜へして己に仕へしむ。信玄は戰國が最も缺く所の組織を與へたり。信長は戰國が最も缺く所の意氣相使ふの風を與へたり。其立つ所以相異なると雖も應仁以來、士風敗頽して社會を結合する君臣、血族の制、已に滅し、漁色、賭博、利益の外人を動かすものなき

信長、一敗して其業挫け、信雄等、偏隅に流涙するのみ、信玄に至つて猶ほ久しく故業を守り、族黨臣下、昔の勢の如きもなし。然らしむる所、亦た以て信玄組織の力大なりしを見るべし。

の時、社會に新精神を鼓吹せるや即ち一なり。然も當時一劍千里を横行せんとするの壯心を懷き、有爲の主を奉じて事を爲さんとする者天下に充滿するの時なりしかば、信長の立つ所は信玄よりも最も時務に急なるものなりき。故に天下の士能く之に投じ、義元と戰ひ、齋藤秀龍を美濃に攻め、また族黨の内亂を鎮めて、勢威海道に奮ふ。

死して後、倒る。地勢の然らしむる所と雖もまたよく信玄組織の力大なりしを見るべし。

德川家康

德川氏は其先新田氏より出づと稱す。曾て二僧あり。相模藤澤の遊行寺上人に從遊して參河を過ぎ、松平・酒井二村の長に養はれて子となる。松平の村長に養はるゝ者を德阿彌と云ひ、酒井に養はるゝものを長阿彌と云ひ、各〻其村を以て姓とす。德阿彌父の名を襲うて太郎左衞門と改め、近傍の荒蕪を開墾して道路を作り、貧民を救うて令名あり。遂に壯丁罪人を募つて、近傍を略して武士を業とす。松平氏は即ち德川氏なり。此の如きもの一百餘年、族黨繁殖、勢威稍大にして、遂に三河の岡崎に據り、數ば織田信長と戰ふ。親氏より六代を經て廣忠に至り、織田氏の侵略を受けて勝たず。救を今川義元に乞ふ。義元質を徵す。則ち廣忠の子竹千代を質とす。信秀襲うて竹千代を奪ふ。義元、兵を發して德川氏を助け、信長の族人を攻め將に之を殺さんとす。信長則ち竹千代を返して其族人と代ふ。竹千代之より今川氏に質たり。義元將士をして岡崎に入り其政事を監せしめ、自ら竹千代の後見と稱し、他日其長ずるを待つて其城邑を返さんと云ふ。竹千代、後名を改めて、家康と云ふ。義元、

また家康をして西三河を攻めて信長と相當らしむるもの累年。斯の如くして家康は織田・今川の間に狹まれて、未だ大に雄飛する能はざりき。

朝倉義景、淺井長政

朝倉氏は織田氏と共に斯波の重臣なり。甲斐織田の族、斯波氏を追ふや、朝倉敏景起つて甲斐を攻め、二十一戰して之を亡ぼし、越前を領し、其曾孫孝景に至りて幕府の供衆に列し、孝景の子義景に至りて、一向宗の僧光佐の兵勢漸く大なり。則ち女を以て之に妻はし、兵勢漸くに大に、近江の淺井長政と相聯合す。長政は近江の人、世々上坂泰貞の從臣なり。後泰貞を追うて其國を奪ひ、數ば齋藤秀龍・六角定頼と戰ふ。其孫長政、また能く戰つて常に朝倉氏と相聲援す。淺井・朝倉二氏の雄を當時に稱するもの、實に京師と北方の通路を扼するを以てなり。

上杉景虎、山陰、九州、奥羽の豪族

越後の上杉氏は元と長尾氏にして、世々鎌倉の上杉氏に臣屬す。後長尾爲景越後にありて自立し、其近傍を侵略し、其主上杉顯定を敗つて之を殺し、越中・越後を併せ加賀を窺ふ。爲景死するや四子景虎、最も勇武十七歳にして内亂を戡定し、强臣不逞を夷げ、聲威四隣を震ふ。彼は獨り勇武のみならず、また俠義あり。獨り俠義あるのみならず、また天下に縱横するの雄志あり。彼は信玄の如き强固なる意志を有せざりき。然れども其英氣俠骨は能く其缺點を補ひ、部下をして、爲に死戰せしむ。彼の軍隊組織、持重の點に於て信玄の軍に如かざりき。然れども其の輕俊快活の行軍は、殆んど信玄の持重をして價なからしめんとす。彼は大將として固より古今有數の大將なりき。然れども彼をして其地位を捨てゝ一個の兵士たらしむるも、又最上の兵士なり。其將士、自任の心强くして、殆んど叛逆的に、疎野にして建武、都會の風を冷笑するの氣あり。景虎の部下、若し都會の巷戰に抄掠することあらば、是れ自ら利せんが爲のみにあらず、都會の風を面憎しと思ふが故なり。景虎の軍若し敗北せば、其微弱の故にあらずして、其自ら任ずるの餘りに深きが故なり。越後は北人の中、未だ曾て都會の風に沈湎せず、固有の元氣を維持するものにして、實に北人の英華なり。北人は今や其の匹夫の雄志に於て、其長上に對する反抗心に於て、其弱に對する俠氣に於て、其輕快奇變の擧動に於て、其健武膽氣に於て、十分に自家を代表すべき景虎を戴きしかば、凡べての長所、遺憾なく活動し、勇武剛健天下殆んど比なく、中原の將士、戰に於ては景虎を稱し、兵法に於ては信玄を稱し、皆其陣法を傳習するに至る。以上七氏の外、伊勢長氏は、已に北條氏を稱し、鎌倉兩上杉の地を蠶食して威を八州に振ひ、安房には里見義寛あり。尼子經久は鹽冶高貞の後を以て、山陰に陸梁して、七百貫の地より起つて出雲・伯耆・因幡・隱岐・石見・美作・安藝・播磨・備前・備中・備後の十一國を侵略し、大友宗麟は九州に起りて二豐・二肥を併せ、佐竹義重は常陸に盤踞し、葦名盛重は會津に據りて四方を侵し、龍造寺隆信は肥前に雄峙し、島津氏は薩摩に負嵎し、東戰西鬪寧日なし。曾て京師

の政權爭奪に與かりし大族は、獨り大内氏中國に跋扈し、細川・山名の徒ありて、四國・中國に徘徊するのみ。而も其權勢移りて下臣の手に入る。

寺院の武力、再發して數諸侯に匹敵す

而して宗教界に於ては、叡山・南都は其學問に於ては已に禪宗の五山に勢力を奪はれ、信仰に於ては日蓮宗・一向宗の爲に、其勢力を奪はれ、破戒無慚の僧徒の巢となりしが、猶ほ暫らくは、兵力を以て天下に呼號したりしに、日蓮・一向二宗の民信を得るに從つて、此二宗また天下の浮浪と連合して、一大勢力となりしかば、叡山・南都は、兵力に於ても、また新興の宗教に讓るに至りぬ。二宗の中、一向宗最も兵力あり。其高僧、末世は兵力を以て佛法を廣めざるべからずと爲せしかば、一向宗の到る所、浮浪必ず至り、浮浪の至る所、騷亂必ず起る。之を名づけて一揆と云ふ。越後の驍將、長尾爲景も、加賀の一向一揆のために暗殺せられ、加賀・能登・越前・越中・伊勢・山城・攝津の諸國、其黨與蔓延して、寺院は即ち城廓、其門主は即ち上將、門主の家司は即ち管領に擬す。其家司下間頼秀、金を出して幕府の御供衆となり、加賀に入り、襲うて富樫氏を滅ぼし、其地を本願寺に併す。僧兵の勢力此の如くなれば、武士もまた、亦其下風に立つて其助を乞ふに至り、畠山義英が父祖の故業を回復せんと欲し、足利の宗族、三好の一族、大和の筒井を語ひて、木澤長政を飯森に攻むるや、細川晴元、其妹婿山科本願寺の門主光敎を賂みて之を救ふ。門主攝津の石山（大阪）に下りて、近國の一向一揆に令を下すや、一揆、雲霞の如く集りて、忽ち義英等を破り、勢に乘じて堺に出で、長政等と共に三好長基を攻め殺す。三好長基は阿波の御所義維を奉じて、勢威京畿に震ふるものなり。而して一戰して敗死せるを見ては一揆の勢力が如何に大なりしかを知るべきなり。一向一揆已に畠山・三好を亡ずや、勢を恃んで驕傲、却つて細川晴元を攻めんとして、先づ其臣木澤長政を攻めて、遂に晴元を堺に攻む。晴元防ぐ能はず。乃ち急に日蓮宗の僧兵に救を求めて、僅かに之に勝つを得たりき。是より一揆自ら其實力を知り、大和の一向一揆は力を合して伊勢に侵入して、國司北畠晴具と戰ひ、京都として興福寺と戰ひ、大和・伊賀の一向一揆は越智氏と戰ひ、南都の一向一揆は雇金屋願了を大將の日蓮宗徒は、叡山と戰つて、洛中の半を燒く。彼等は、獨り僧兵のみならず。職工・農夫・山伏・僧侶を合せて戰ひ、獨り男子のみならず、女子もまた之に加はる。彼等は、獨り利益のためのみならず、己の敵を法敵と號して戰ふが故に、將軍も、管領も、一たび法敵の名を門主より付するや、其運命は最早や知るべきものなりき。一向・日蓮の一揆、此の如くなるや、伊勢山田の神官も、また一揆を發して神領を押領し、祭用に供せず。國司の命を奉ぜず。兵を四方に出して武士の所領を攻む。其首領を村山掃部助と云ふ。宇治・山田・河崎・二見・淺熊の神官悉く之に黨す、已にして北畠氏と戰つて敗るるや、村山大神宮の拜殿に踞して自殺し、男山の神官も、亦一揆を起す。此の如く宗教横流の勢、

滔々として止る所を知らず。而して寺院・神社は獨り善く人心を統一するのみならず、また財富あるの故を以て、其勢威遙かに諸侯に超え、數諸侯を併せて猶ほ一宗派に敵する能はず。諸侯其兇暴に苦しむ。此の如く舊結合を解き、新結合を起さんとするの勢、急潮の如くに流れつゝあるは、實に文明より天文に至る天下の大勢なり。

上杉景虎、武田晴信と戰ひ北條氏を攻む

天文十四年、義晴將軍職を其子義輝に讓る。十七年武田晴信、大兵を擧げて、村上義清を信州上田原に攻む。義清之を拒ぎて大敗し、其の豪將、清野・高梨・井上・隅田を携へて越後に入り、長尾景虎に賴つて國を復せんと乞ふ。景虎則ち少しく兵を出して、先づ信玄と海野原に戰つて、其兵法を觀る。是より連年兵を交ふ。此の時に方つて北條氏益〻强大にして、兩上杉力を合して之を拒ぐと雖も敵せず。遂に扇谷の上杉は武州松山の城に蟄居し、山内の上杉は上野平井の城に蟄居し、諸將多く背叛して北條氏に屬す。上杉氏の全く亡びざる者は、僅かに今川義元が北條氏の背を制するが爲なり。此の如く上杉氏國勢日に慼ふるを顧みず、天文十五年晴信が村上義清と戶石に戰つて、其二將を失せるを聞き、兵を出して晴信を攻む。晴信則ち碓氷を越えて、來つて平井を攻め、翌年北條氏康また來つて攻む。上杉憲政守らず、二十年遂に越後に入りて長尾景虎に賴り、其姓上杉と關東管領の職を之に讓る。之より景虎、天下に縱横せんとして、數ば兵を上野に出して北條氏を攻め、永祿二年、二千の兵を率ゐて路を諸國に借つて京師に入り、將軍義輝に謁し、關白近衞前久を請うて北國の主とせんとして戴いて歸る。義輝其志を好みし、其名の一字を取つて輝虎の名を與ふ。太田道灌の玄孫資正、八州の士心を知り、里見氏を說き、成田氏を說きて、輝虎の地を爲す。八州の士之が爲に輝虎に向ひ、輝虎大擧して小田原城を圍むに至る。北條氏侵略の鉾是より鈍る。

西洋諸國との交通、基督教來る、大内義隆亡ぶ

上杉氏が斯の如く武田・北條の二氏と、信濃・上野・武藏に爭ふに力りて他の方面に於てはまた大變革を生じつゝあり。上杉憲政が越後に走つて景虎に據るの年、陶尾張守晴賢、其主大内義隆を害して、長門・周防の近傍を奪ふ。是より先き南北朝の頃より倭寇、朝鮮・支那を侵して遂に南方フイリッピン諸島に至る。四國・九州・中國の沿岸は、事實に於て已に是等の諸州と消息を通じつゝありしなり。而して當時天下海上の權を占有する者は葡萄牙、西班牙にして、宗教と貿易の權によりて天下を横行し、南島多く其有となる。而して其南東に來る宗教は多くはゼシウイット派にしてイグナシウス、ロヨラが英雄の姿を以て、封建時代の軍隊の精神と、教會傳教の精神とを合して、征服團體を作るや、其勢威向ふ所敵なきに至りぬ。天文八年、葡萄牙の船、初めて薩摩の種子島に來り、種子島時堯に傳ふるに鐵砲を以てす。時堯大に喜びて其術を習ひ、之を高野・根來の僧に傳へ、また幕府に獻ず。是より天下傳唱して鐵砲を得んことを欲す。已にしてゼシウイットの聖

僧ザヴエー、來つて豐後の大友義鎮に謁し、其許可を乞うて基督教を傳ふるや、商船もまた之に從うて至り、珍器奇寶、未だ曾て見聞せざるものを傳へしかば、西國の諸侯必ずしも基督教を好むにあらざるも、貿易のため彼等に交り、遂に轉じて基督を信ずるもの多し。中につきて鐵砲は戰國武將の好んで捨つる能はざる所なり。之より基督教西國に盛なり。已にして宗教貿易また長門・周防に入る。大内氏は歴代貿易の利を知るものなり。而して義隆最も文字あり、義理に通じ、基督教を喜び、其家老内藤隆世以下之を信ずるもの、最初の一年にして三千人に達す。佛僧恐惶、嬖臣と謀つて基督教を排擊して至らざる所なし。已にして大友氏の部下また基督教を喜ばざるものあり。神官・僧侶と圖つて葡萄牙船を攻めんとす。此に於てか海峽を距てゝ、兩岸には排基督教の氣焔大に上る。義隆は性情高潔にして當時貪亂是れ事とする武將中、稀に見る所にして、最も貴族的の趣味と、貴族的王制の南人思想を有す。故に天下紛々各〻疆土を拓くを事とするの時に方り、後奈良天皇の貧しくて即位の大禮を缺くを見るや、金穀*を奉つて之を助け、以て其禮を遂げしめ、功を以て太宰大貳となり、菊桐の徽號を受くるに至る。故に公卿も亦同氣相求めて長門に下る者多し。其顯著なる者は三條公賴・二條尹房・日野資宣・廣橋兼秀・冷泉紹惠等なり。是より義隆益〻貴族の習氣に染み、遂に皇居を作りて、天皇を迎へんとして果さず。家臣等、其和歌・儀禮に習うて、漸く武士に遠からんとするを見て之に服せず。義隆已に基督教を信ずるによりて佛教徒の心を失し、また貴族的生活によりて士心を失す。家臣陶晴賢久しく異志を蓄ふ。今や人心〻服せず。宗教的動亂生ぜんとするを見て、天文二十年、急に兵を擧げて義隆を害し、其一族・威縁、寄寓の公卿に及び、大内氏全く亡ぶ。

*天文四年

*或は云ふ元就初め自立の志あり、陶を教唆して背叛せしむと。

毛利氏著はる

此時に方つて毛利氏、安藝にありて稍著はる。毛利氏は、其先大江廣元より出づ。初め微にして、七十五貫の食邑あるのみ。其隣邑に武田元繁あり。平生相好からず。共に尼子經久に服屬す。尼子氏、元就を重ずること武田氏に如かず。則ち去つて大内氏に仕ひ、其力を藉つて近傍を侵略して遂に尼子氏と戰ひ、數ば之を破り、聲威漸く大なり。陶晴賢の亂を聞くに及び、急に兵を發して之を攻め、其衆を嚴島に殲くして、大内氏の國を領す。是より毛利氏の威、山陰・山陽に振ひ、數ば九州の大友氏、出雲の尼子氏と爭うて、日夜其疆を擴む。永祿九年遂に尼子義久を出雲の富田城に攻めて之を下し、尼子氏全く亡び、元就の領邑十餘國に跨る。

京都の無政府

此時に方つて京師の窮乏愈〻甚だしく、僅に山城一國に行れし幕府の威令も、今は京師に止り、京師の中すら行はれざる所あるに至り、一向一揆・日蓮一揆は、叡山の僧侶と相戰ひ、平和柔順なる京都の士民今は刀劒を取りて富家を攻め、德政と號して財寶を奪ひ、貸借を消滅せしむ。幕府は其無權力にして窮乏せるや、皇室と異らず。唯だ皇室に異なる所は、猶ほ其奇翫異寶の賴つて食

美濃の齋藤秀龍、其女を信長に娶はし、之によりて尾張情勢を察報せしむ。

義元全力を以て驚津丸根を拔かんとす其本營兵少きに乘じたるなり。

ふべきあるのみ。故に貴族の窮乏に至つては最も甚だしく名門顯族にして衣服を有せざる者あり。人あり、常磐井家に詣らんとするに、常磐井氏辭するに夏裝束を耻づるを以てす。至れば則ち衣冠禮樂の顯族、衣服を有せず。裸體のまゝ蚊帳に身を卷きて出づるに遇ふ。後奈良天皇は此の如き光景中に崩じ、太子方仁親王立つ、之を正親町天皇とす。時に弘治三年九月にして、實に毛利元就が陶晴賢を亡ぼしたるより二年の後なり。

武田北條今川の同盟、織田信長、今川義元を亡ぼす

京師は此の如く無政府の慘狀を生じたるに方り、中原の豪傑は縱橫の策を盡くして、攻伐を事とし、北條長氏の子、氏綱、其子氏康は織田信長と聯結して、今川義元を攻め、義元は武田晴信と聯結して之に抗し、上杉輝虎は、晴信と氏康を攻め、南錯北綜、西支東吾、各〻其覇王の業を爲す能はず。兵禍連年、結んで解けず。尾張の臨濟寺、善德寺の僧、此間に誘說して兵を已めしめんがため、義元の子氏眞のため、氏康の女を娶らしめ、晴信の子義信のために、義元の女を娶らしめ、氏康の子氏政の爲に、晴信の女を娶らしめ、三氏和を媾じて・信長・輝虎のみ、其同盟に外れたりき。此より三氏の間事なく、晴信・氏康は專ら輝虎に當り、義元は專ら德川氏を提げて信長に當る。永祿三年、上杉輝虎、小田原を圍むの年五月、義元西上して京師の主たらんとし、駿河・遠江・三河の兵を集めて、尾張に入り、鷲津・丸根の二城を攻む。信長、時に淸洲の城にあり

其兵力、遙かに義元に如かず。部下多く敵を恐れ、城によりて守らんことを欲す。然れども信長は何の時にありても防禦の地に立つものにあらず。彼の精神には無休の活動あり。彼は窮苦に對して何時も打勝つの氣力あり。彼は何時も暗黑の中より一道の光明を發見し、守勢の中より常に攻勢を發見す。若し萬事爲す能はざるか、彼は其運命のある所に任せて、突進せんとす。此の如くして敗れて死するもまた可とす。彼は其汚辱の生存を以て、享くるに足らざるものと爲す者なり。此性情は彼が一生の最大困厄に際して最も其光輝を發せぬ。彼部下の諫爭を容れず、三千の兵を以て新勝の勢に乘じたる二萬の大軍を攻めんとし、一夜其徒を集め、宴を設け徹宵歡飲す。信長則ち自ら『人生僅か五十年夢幻の如くなり』と、古曲を歌うて舞ふ。一座感慨、皆慷慨の涙にむせぶ。則ち翌日急に起ち、風雨雷電に乘じて、義元を桶狹間に襲うて之を斬る。是より信長の威名四方に震ひ、四隣の土豪皆附屬し、美濃の半ば其威勢に服す。是より中原諸豪權力の平均、漸く覆らんとす。京人立入宗繼、信長の威名人物を聞きて、其風采を想望し、天下を救ふもの或は此の人ならんかと信じ、中納言藤原の惟房に說き、皇室をして信長に賴らしむ。惟房乃ち公卿と計つて、宗繼を使として私かに信長に說かしむ。信長感激之を諾す。時に永祿十年なり。

信長、家康と同盟す、三好、松永、義輝を殺す、信長、上洛す

此の如くして信長の前途、益〻開くるに方り、諸

道の豪傑は益す攻伐に寧日なし。永祿五年長曾我部元親は四國に起りて土佐を取り、六年武田晴信は上野に入りて其七部を略し、上杉輝虎は越中・上野・下總を略し、七年、北條氏康は、里見義弘と鴻の臺に戰つて之を覆へし、大友義鎮は筑後の諸城を攻めて之を取る。而して信長もまた此年を以て美濃を攻めて齋藤龍興を亡ぼし、居所を岐阜に移し、其西上の道を開く。已にして意外の事變は、信長をして西上を急がしむるに至りぬ。初め將軍義輝の立つや、三好長慶京師の權を專らにし、管領細川晴元と隙あり。細川氏綱を立てゝ管領とし、晴元を追ふ。已にして長慶の臣松永久秀權を專らにし、長慶の族人、康長・政康・岩佐成通また黨を立てゝ相爭ふ。世に之を三好の三黨と云ふ。三黨專横兇惡至らざるなし。義輝惡みて之を除かんとす。義輝の從弟義榮將軍たらんことを欲し、之を三黨及び久秀に計る。永祿八年、義輝、二條の第に徙り、門扉未だ成らざるに乘じ、久秀等襲うて之を殺し、義輝の弟、僧周嵩を殺し、また弟義昭に及ばんとす。義昭、其侍者細川藤孝と密かに脫して近江に入り、其妹の夫武田義統に依り、また出てゝ越前に入り朝倉義景に寓す。已にして信長の聲名を聞き、細川藤孝をして出てゝ信長に說かしむ。信長之を迎ふ。是に於てか信長遂に意を決して西上せんとす。然れども信長は其聲威の張ると共に、三河を隔て美濃につゞきて、信玄の恐るべき勢力と相接近するに至りぬ。是に於てか三河の德川家康の攻守同盟を約して、信玄が海道より進むに當らしめ、更に金幣を厚うして信玄の厚意を求め、猶ほ其背叛せんことを恐れ、信玄の女を娶つて信忠の室たらしむ。家康族黨、勇武と雖も國小に勢微なれば、信長に附庸するの外なかりしなり。信長已に信玄と和するを聞くや、上杉輝虎も亦北條氏康と和し、氏康の子三郎を養うて子とし、以て其八州に於ける大望を捨てゝ、直ちに京畿に向はんとし、頻りに加賀・能登・越中を略す。輝虎の勇武、已に北方に鳴り、其黑色の綿衣を着け、鎧を着けず。頭を包み、青竹を提げて馬を走らすや、雄武剛果の北條氏すら見て辟易す。況や北陸の諸侯をや。皆風を望んで降る。唯だ信玄其後を躋み、其脇を衝かんとするを見て、中原略定の志を遂ぐる能はず。此の如く群雄相制するに乘じ、永祿十一年十月、信長遂に意を決して西上す。時に三好・松永の黨與、義榮を立て將軍とす。近江の佐々木承禎、三好・松永に黨して信長を防ぐ。信長擊つて之を走らし、義昭を携へて京に入り、三好・松永・細川の黨與を、近畿諸州に攻めて之を降す。時に義榮已に死す。則ち義昭を立てゝ征夷大將軍とし、其將羽柴秀吉をして、止つて京師を守護せしめて、岐阜に歸る。秀吉法令嚴峻、不逞の徒を懲治せしかば、應仁以來一百年にして京師の人心初めて安んず。

信長、淺井、朝倉を破り、比叡山、本願寺の僧兵を破り、基督教を保護す

河を攻め、今川氏眞を破つて其國を奪ひ、伊豆に迫る。北條氏康今川氏を救うて信玄と戰ふ。德川家信長已に西上するや、信玄兵を出して駿

*此時、義昭琵琶湖上に詩を賦す。「月光落ちて湖水暗し一江夜思悠々、天公孤舟生慰吾秋月白亦是人間一流水、結愁、否、以て北湖の公の雅なる見なり。」孫子が閑なる柳子猛烈なりしかなるべし。

康また頻りに兵を出して遠江を征して、居を濱松に構へ、大井川を以て信玄と堺を接す。而して信玄が眼前の大敵たるを以て、深く信長と結託して以て之に當らんと欲し、凡そ信長の征伐、必らず之を助けざるなく、同盟軍の向ふ所天下敵なし。元龜元年四月信長、朝倉義景を攻むるや、近江の淺井長政・佐々木承禎之に應ず。信長乃ち歸つて德川家康の援を乞うて之を討つ。義景また兵を發して淺井を助く。兩軍、近江の姉川に會戰し、義景・長政、遂に敗走す。已にして八月、三好の殘黨、義繼・康長、攝津の野田に起り、齋藤義興福島に起り信長に敵す。本願寺光佐また石山の壘によりて之を助く。信長自ら出て之を討たんとするや、淺井・朝倉の二氏また三萬の兵を擧げて、比叡山の麓に據り、其後を窺ふ。信長還つて之を防ぎ、滋賀の宇佐山に陣す。武田晴信、信長の窮窘を聞きて其後を襲はんとし、兵を出して遠江・三河を攻めて、數城を取る。勢州長島の一向宗徒、また起つて信長に敵す。信長の諸將之を征して勝たず。比叡山の僧徒また無賴を募りて遙かに晴信に應じ、寺中に婦女を姦し、酒に醉ひ肉に飽き、破戒無慚を極む。信長使を發して順逆を說けども聽かず。凡そ近畿に於ける凡ての兵力、凡ての宗教は、皆信長に敵したりしなり。然れども遂に彼を屈する能はず、淺井・朝倉先づ走つて諸城皆信長に降る。信長則ち諸將を比叡山に遣はし、その破戒無慚を責めて火を放つて、一山を燒き其衆徒を殲くす。是より比叡山遂に兵力なし。是に於てか、本願寺の光佐も來つて降を乞ふ。

武將のみならず、宗教も亦彼に屈したるなり。信長早くより基督教に嚮ふ。今やまた一向、比叡の僧侶が、反覆常なく兇惡を逞しうし、私利に殉し、順逆をすら顧みざるを見るや、則ち彼等の宗敵たる基督教に好意を表して、宣教師を保護するに至りぬ。基督教は之より先き、已に中國・九州に盛なりしが、三好長慶・松永久秀の時、京師の僧、基督教の言ふ所を奇なりとして、書を豐後にある宣教師に發して之を招く。已にして京師に入るや三好長慶之を信ぜしかば、京師・堺の間之を信ずるもの忽ちにして二萬餘人に達す。將軍義輝の如き其死するに先ちて、已に其徒となる。已にして山僧市民を相煽揚して松永久秀に迫つて、宣教師を追はしむ。之がため基督教は一時衰へしと雖も、今や信長の保護を得るや、民心靡然として之に向ひ、信長の子信忠も之を信ずるに至りぬ。

信長の政、義昭、信長を忌む、晴信の死

信長は獨り武將たるのみならず、また實に改革者の氣象を有し、嚴峻にして公平なり。彼の統治は極めて廉價にして、行軍に要する所は、草鞋と握飯のみ。彼の民政は簡明にして公直、足利氏が歷代賦課したる濫役・重稅は、悉く革除せられ、京師の民皆再生の思を爲しぬ。皇居は彼の爲に造營せられぬ。彼皇室に財貨を奉らんとするも、却つて寇盜を皇室に招かんことを恐れて正金を以てせず、金を京畿の富豪に貸し、毎月其利を皇室に奉らしめしかば、皇室も二百年來初めて枕を高くして眠るを得たり。强盜は京畿に跡を潛め、山僧は覆されて跡なし。北條氏以來、

彼が如き政治を與へし者は未だ曾てあらざるなり。故に上下皆その慶により、其世の長からんことを欲す。獨り之を欲せざるものを義昭とす。*義昭已に幕府の奢侈秕政に習ひ、寺院の狡獪冷血に慣れ、信長の爲に立てられて、將軍となるや、榮華足らずとなし、奢侈滿たずとなし、信長の崇尊足らずとなし、信長の立てし法令を破り、秀吉の行ふ施設に背き、收斂・濫課して、民を苦しめ、私かに信長を除かんと欲す。信長固より義昭に盲從すべき義務を有するものにあらざるが爲に、義昭の秕政十七條を數へて之を責む。義昭憤慨す。三好・細川の殘黨、志を新政に得ざる公卿と相慫慂し、義昭をして書を以て輝虎と晴信を招かしむ。時に北條氏康死して氏政立つ。晴信の部下喪に乘じて之を擊たんとす。晴信聽かず。其老死の時已に迫れるを知り、生前中原の主たらんことを欲して信長を攻めんとす。已にして德川氏の質子、逃れて國に歸る。則ち北條氏と和し其質を取り、元龜二年二月、遠江・三河に入りて數城を略す。德川氏援を輝虎に乞ふ。三年四月輝虎兵を出して聲援を爲す。已にして冬に入るや、晴信、輝虎の雪に沮まれて出づる能はざるを知り、十二月兵を進めて三形ヶ原に陣して家康の居城濱松に迫る。信長私に兵を以て之を助け、勉めて堅守して戰ふなからしむ。家康肯ぜず、戰つて大に敗れ、殆んど獲られんとす。此役、晴信、信長の部將平手汎秀を獲て之を證として、信長と絶ち、宣言して敵國と爲す。天正元年三月、三萬人を以て美濃に出づ。信長敗走す。則ち轉じて三河に入る。已にして晴信疾あり。諸將に託するに後事を以てし、其子勝頼を戒しめ、武を弄する勿らしめ、且つ言ふ、我死せば天下唯一輝虎あるのみ。彼れ俠武にして信實あり、若し援を乞うて國を託するあれば、彼れ必らず汝に不利ならざるべしと。遂に死す。北條氏偵して之を知り、輝虎に告ぐ。輝虎正に食す。報を聞き箸を擲つて長嘆して曰く、惜むべし、好漢遂に逝く、天下また英雄なしと。二人の信ずること斯の如きものありしなり。諸將喪を祕して發せず。

*義昭走つて信長に賴るの前、僧侶たり。

義昭信長と戰うて敗る

之より先き、晴信、兵を三河に出すの報あるや、義昭思へらく、信長北顧の憂あるに乘ずべしと。則ち塞を近江の石山と堅田に築きて、兵を擧げ、以て信長を除かんと謀り、信長が和を乞ふも聽かず、益々無賴の徒を募る。信長則ち柴田勝家・明智光秀・丹羽長秀をして、擊つて之を破らしめ、自ら京師に入る。義昭惶恐、和を乞ふ。信長その再び事を擧げんことを察し、丹羽長秀をして、豫じめ大船數十を作らしめて岐阜に歸る。義昭・信玄の已に死せるを知らず、猶之を恃み、七月また宇治の槇島に據りて兵を擧ぐ。信長復擊つて之を降し、奏して其官爵を削り廢して庶人となす。是に至つて足利氏全く亡ぶ。其世を保つこと十三代二百四十年。是よりまた將軍なし。信長勢に乘じ越前を攻めて朝倉義景を亡ぼし、還つて淺井長政を攻めて又之を亡ぼし、河内に三好義繼を亡ぼし、天正三年、家康を助けて武田勝頼と三河の長篠に戰つて大に之を破る。之より地を割きて諸將を賞し、

越前の大部を猛將柴田勝家に與へて、北方の藩鎮たらしめ、以て上杉輝虎の前路に備ふ。天正三年十一月入朝して權大納言左近衛大將となり覇業殆んど成る。

小黨滅亡、大侯崛起の運、政權下に移る、舊社會の聯鎖悉く絶ゆ

此の時に當つてや天下の氣運、益〻小黨滅亡、大侯崛起の時に嚮ひ、武藏・相模を中心とせる八州は、殆んど北條氏の威を仰ぎ、北陸道は上杉氏に屬し、中國は殆んど毛利氏に族し、中央諸州は織田氏に屬し、四國は長曾我部氏に服屬し、九州は大友・龍造寺・島津の諸氏に分領せられ、唯だ奥羽は、佐竹・最上・伊達の諸氏に分屬し、近畿及び近江・越前のみ、本願寺光佐の黨與、三好・細川の殘黨と相煽揚す。其他の小諸侯は、漸々滅却し、若しくは衰頽して、新結合の勢日に大なり。而して此新結合の聯鎖たる全く舊時のものにあらずして、新顯象なりき。古へは同族によりて結び、異族によりて戰ひぬ。今や同族相救ふの聯鎖は全く跡を止めず、族人相戰ふものと異族の同盟と相均しきに至りぬ。例せば信長は其舅齋藤秀龍と戰つて之を亡ぼし、妹婿淺井長政は朝倉義景と連合して信長に敵し、信長の同族は權を爭うて相殺戮し、德川家康は其の族人と相戰つて力を外に伸ばす能はず。細山・畠山は同族の戰に亡び、足利氏も亦同族の攻伐に亡びしが如き是なり。古へは北方南方の氣質の差、政治思想の差異によりて戰ひぬ。今や足利氏の一統より、東西南北の血族混淆せるがため、氣象、思想の差異また混淆融和せぬ。伊勢の長氏が八州に覇を稱するが如き、大江廣元の子孫、中國に入つて毛利一家を起せしが如き、土肥實平の後、小早川氏となりて、賴朝の從者吉川氏の後、中國に入りて、共に毛利一家に合したるが如き、島津氏が北人の血族に出づるが如き是なり。古へは貴族と平民とによりて黨を分ち、門閥を以て相爭ひぬ。今や政權漸を追うて下に下る。皇室の權、藤原氏に移り、藤原の權源平二氏に移り、源氏の權北條氏に移り、北條氏の權、足利氏に移り、足利氏の權、山名氏に移り、山名氏の權、細川氏に移り、細川氏の權、三好氏に移り、三好氏の權、松永氏に移り、松永氏衰へて織田氏興る。更に他の諸侯の一家に就きて言へば、足利氏衰へて斯波氏起り、斯波氏衰へて織田氏興り、足利氏衰へて上杉氏起り、上杉氏衰へて、長尾氏興る。是れ一部の顯象にあらず、全國を通じて皆然り。かくの如く政權漸を追うて下に移るのみならず、貴族もまた其身を雲上より民間に下すや、勢威漸く大なり。京師の貴族が餓死に瀕する時、一條敎房の孫、土佐に入つて九十六族を兼併して、細川氏に代りしが如き、西園寺氏、伊豫に入つて漸く大なるが如き、北畠氏の子孫伊勢の宮司となりて、南朝のために固守せしより、子孫連續信長の時に至るまで伊勢の七人衆と號して、盤根亡びざるが如き是なり。此の如く血族も地力氣質人種の差異も、階級も以て社會を結合するに足らず、唯だ利を同うするによりて相結合したるは、應仁前後の天下の形勢なり。

社會の新結合力、忠義心の發芽

此の如き形勢は長く繼續すべきにあらず。早晩新道德を起し、新聯鎖に

よりて新結合を起さゞるべからず。新道德は起り、新結合は起りぬ。誰か之を起したる。是れ學者にあらず。聖人にあらず。貴族にあらず。大立法家にあらずして、却つて無學無識なる山林の英雄なりき。彼等の中には名譽ある祖先の歷史を有するものなきにあらず。然れどもそれすら、口碑に存するのみにして、以て人を服するに足らず。彼等は財貨なく、官職なく、强固なる族黨なく、郎黨なく、赤裸裸無一物の者として天地の間に生れ來りぬ。然れども彼等の心中には、至大なる寶貨を藏せぬ。彼等の勇猛にして死を恐れざるの心は、幾多の猛夫をして之を抑がしめぬ。彼等の剛果敢爲の氣象は、幾多の勇士をして甘じて其下に立たしめ、彼等の寛宏、物を惜しまず、土を割き財を分つこと、弊屣の如き心は部下をして信任して戰はしめぬ。彼等は妻子よりも勇士を重じ、族人よりも浮浪の徒を愛せぬ。彼等は、藏さず、僞らず、落々たる心事を以て其部下を率ゐしかば、部下は父母妻子に別れて其主領と合せぬ。智勇辨力を以て天下に呼號せんとする浮浪は、隨所に存しければ、一分此美質を有するものは、一分多く天下の材を致せしを以て、主從意氣を以て相結ぶの心は、血族・法律・階級・人種に代りて、天下を結合するの新聯鎖となりぬ。之より先き、王朝より北條氏を通じて、眞正の忠義なる思想極めて薄弱にして、血族に對する親愛、法律に對する服從、階級に對する尊敬ありしのみ。學者の所謂忠義なるものに至つては、未だ曾て國民的思想と云ふべからず。北畠親房の如き神皇正統記を著はして、國君に對する忠義は利害强弱得喪の外にありて爲さんとしたるも、遂に成功せず。眞個の忠義心なるものは、元龜・天正の英雄によりて作られし意氣投合なる精神が、歷史と積恩とによりて扮飾し、醇化せられしに初まる。

兵農の分別、城下の發達、戰術の變遷

而して此新結合は最も健全にして最も有力なる結合なりき。何となれば斯かる社會に於ては、信賞必罰は其最大急務たり、愚者弱者にして上に昇り、智者强者にして其下に立たん乎、衆心遂に服せざらんとす。衆心服せずんば事業遂げざるなり。故に斯かる組織の下にありては、民政は周到ならざるべからず。物產は開けざるべからず。然れども斯かる時代の賜として、一大弊害の存したるは又掩ふべからず。即ち兵農全く二に分れたること是なり。是より以前に於ても、兵農は分れざるにあらず。然れども、猶ほ其附近の土豪に於て、先づ最下の族黨を組織し、國主はこの土豪を集めて大族黨を作るが故に、武士なるものは地方農家の小中心にして、土豪は即ち大地主、大地主は即ち武士なりき。今や然らず。智勇辨力あるものをして、其個人的力量によりて競進せしむるがため、土豪は社會の單元たらざるに至りぬ。加ふるに連年干戈絕えず。何時、敵軍の進擊し來るか知るべからざるがため、武器の發明進步したるがため、戰鬪の法進步して、個人的鬪爭より軍隊的勝負の時となり、また舊時の如く、武士をして地方に散在せしむる能はずして、此に城郭を構へて其

中に集團せしむるに至りぬ。固より古來城郭なさにあらず。然れども古の城郭は唯家居の大なるものに過ぎず。上古にありては、城とは稻を積みて其中に立て籠るものなり。平安朝の頃より壯大なる家屋を作るの習ありと雖も、以下數百年南北朝以後に至るまで、城郭とは家屋の大にして高きものに過ぎざりき。今や長鎗の發明あり。小銃の輸入あり。遂に大砲を輸入して、國崩と號するに至る。斯の如き精銳の武器に對しては、古の族黨組織の遺物にして、一騎先づ進みて其系譜を述べ、勇力を述べ、戰を挑むの風は廢せられて、自然に組織訓練ある兵を生ぜざるべからず。之と共に其城郭は唯だ柵を立てゝ、敵を防ぐのみならず、石垣により、高樓によりて防禦を爲し、且つ其周圍を大にして、武を業とするもの皆此中に居住し、一旦緩急あらば、全力を一時に集合する城郭たらざるべからず。此の如くして、武士は田畝を離れて一所に集り、所謂城下なる町を生じ、家中なる一族を生ぜざるべからず。武門武士なるものゝ純乎たる別階級となりしものは、實にまた此新結合の結果にして、元龜・天正の間に成りしものなり。而して此の軍國の精神を最も能く代表したるものは、織田氏なり。

信長の城郭陣法、世風を一變す、部下の人物、毛利征伐

織田氏は其居る所の地勢重要、四方の會にして、天下の智を集むるが爲、其新氣風を代表するに於ては、最も他に優り、その安土に築ける城は、中央に高

*天文二十年、石火矢と云ふ大鐵砲二挺南蠻羅馬國の國王（法王か）より進ぜられ、大友義鎮物にとして、一挺は筒口四寸餘り、一挺は口三寸餘りあり。國崩と名けたり。增補大友興廢記）

**此頃より石垣により、天主臺により、十分の防禦あり、家屋を城と云ひ、屋を防禦な陣屋と云ふ。

樓あり、高さ十丈、以て四方を望見すべく、之を周らすに石壘を以てす。其高さ七丈、壕を深くし、壘むに石を以てし、堤を高くし、殊に其京師の權を取り、鐵工に巧に、銃砲の製作に巧なる堺の鐵工に命令するの便あるを以て、銃砲を利用するの一事に於ては他に優り、天正三年、武田勝頼を攻むるや、三千の銃士を一隊とするに至りき。是より諸國皆之に模して其軍制を改め、一時天下を風靡す。而してその謀臣猛將の雲合霧集するや、また一代に卓絕す。柴田勝家は勇猛を以て名あり。丹羽長秀は沈勇を以て名あり。羽柴秀吉は才略を以て名あり。瀧川一益は膽氣を以て名ありて其銃術天下比なし。淺野長政は公直にして勇武、以て將たるべく、以て相たるべし。明智光秀の軍學に明らかにして機才ある、其他池田信輝・前田利家・佐々成政・塙九郎左衛門・森可成・築田左衛門・河尻與兵衛の如き皆當世得がたきの材武なり。德川家康の如きは、信長に臣事せざるも、また其屬庸にして其持重の質、周到の見、質實の風、直裁の氣、鐵石の意志、一代稀有の材なり。信長已に柴田勝家をして、上杉輝虎に備へしめ、德川家康をして、北面を守らしめ、東北憂ふるに足るものなし。時に毛利氏、足利義昭を容れて之を保護し、再び京に入らしめんとし、また石山の本願寺光佐を助けて京攝の間を亂さしむ。播磨の人黑田官兵衛孝高、頻りに信長を慫慂して之を征せしむ。是に於てか遂に羽柴秀吉をして之を征せしむ。時に天正五年、信長、紀州根來・雜賀の僧兵賊徒を平げ、松永久秀を攻めて之を大和の信

*光佐後に近衛氏の周旋により織田氏に降る。

貴に殺すの年なり。

第二十三章　秀吉の一統（神武紀元二千二百三十八年より二千二百六十年に至る）

秀吉の人物及び地位

*天文五年正月、秀吉生まる。

秀吉は尾張の賤民の子にして姓氏を審にせず、少小僧となり、奴僕となり、慧譎にして多く容れられず。市井無賴の群に入り、尾張・美濃の間に轉徙す。信長の識鑑能く舊格を破つて人を用ふるを聞き、永祿元年、信長を道傍に干して、之に仕へ、堅忍忠實、信長に知られんことを求む。信長之を會計に試み、土木に試み、戰鬪に試み、其材を知つて遂に大に之を用ひ、宿將老臣の上に位せしむ。彼は應仁以來の風雲が鬱生せる最大人物の一にして其氣象開爽にして快活、智力博大にして明確、殆んど古今の英雄が達したる最高峰に達し、如何なる窮境に處しても、其思想畫策を失はず。如何なる困厄に處しても自己を失せず。殆んど北氷洋上に踏舞する佛人の風ありき。彼は家康の如き持重の質、鐵石の意思を有せず。しかも其明確なる智力、湧くが如き才思は、能く其缺點を補ふに足れり。彼は信長の如き感情と膽氣とを有せしや否や疑ふべし。然れども其博大なる智力は、能く彼をして膽氣と同一の勇氣を有せしめ、彼をして望外、望を生じて、殆んど大感情によりて生ずる小說的幻想の如き力を有せしめぬ。信長は大局に過たずと雖も、往々小事を忽にして、爲に大計を過

ちぬ。彼は大業を志すと雖も、小事に忠實なるを忘れざりき。信長は磊落なりと雖も、時に猜疑に落ちぬ。彼は信長の如く磊落にして而して明白なる腦髓は、疑ふべき餘地を止めざりき。信長は應仁以來大亂が生じたる一半の氣質を代表して、多殺の缺點あり。秀吉は大亂將に收局して、統一治平ならんとする氣質を代表して殺を貪らず。若しそれ僞善に至つては彼の知らざる所なり。失望は彼の夢にだも知らざる所なり。然も彼の智力は放縱驕傲なる天才のみにあらず。快活にして疎磊、嚴肅にして冷刻に近き信長を崇拜して、信長に訓練せられたるがため、極めて屈伸あり。極めて敎育せられたる智力なりき。彼の天才は之を父に負へり。彼の智力を以て、凡ての境遇より敎訓を受け、凡ての境遇に、己を適應せしむべく、己を作る屈伸自在の智力たらしめしは信長の賜なり。信長は殆んどフレデリック大王なり。落々たりと雖も、偏狹に近く、嚴峻或は粗厲に近し。秀吉に至つては朗々、洒々、抵滯する所なし。彼の匹儔はそれ曹孟德か。斯の如き人物は戰國武士が慕望せざる能はざる所なりき。彼等は信長に於て主君らしき首領を得たるを悅べり。今や彼等は秀吉に於て、首領らしき主君を得んとす。故に其の所領天正元年に於ては近江の廿二萬石に過ぎずと雖も、無名の英雄其幕下に集まる者無數。福島市松正則は工匠より起り、黑田孝高は貧寒なる播州の士人より起り、加藤虎之助淸正は秀吉鄕里の頑童より起り、小西行長は大阪の藥商より起り、長束正家は商家より起り、石田三成は觀音寺の茶童より起り、竹中半兵衞は亡命より起り、皆秀吉に一身を委ぬ。信長の將士は、多く宿將にして世祿あり、若しくは土豪なるもの少からず。秀吉の部下に至つては、皆微賤にして名なく、その祖先すら分明ならざるものなり。而して其材武に至つては、却つて信長の將士に勝り、秀吉をして赫々の功勳、他の宿將を超えしむ。然も秀吉多く信長の旗下に屬して戰ふが爲、自ら擅にする能はざるの故を以て將士久しく鬱屈せしが、天正五年、中國の管領となりて、山陰・山陽・九州を隨意に切取すべしとの許諾を得るや、將士踴躍、已に自立したるもの〻如し。秀吉の雄才是より初めて伸び、城を姬路に作り進んで因幡・伯耆・備中・淡路を取り、擊つて宇喜多を破り勢威中國に震ふ。

武田氏亡ぶ

天下信長の恐るゝ所は信玄・輝虎の二人のみ。然も信玄已に死し、輝虎も亦中原に出づる能ずして、天正六年三月を以て死し、其養子景勝・景虎權を爭ひ、景虎信州善光寺に據り、景勝高田の春日山に據りて相戰ふ。武田勝頼、景勝を助け、景虎を襲うて殺す。此の如くして上杉・武田已に內亂によりて勞るゝや、信長遂に意を決して之を攻めんとす。適木曾義昌、信長に內附せん事を乞ふに遭ふ。則ち天正十年二月檄を北條氏政に傳へ德川家康と共に兵を發して勝頼を攻む。勝頼時に信濃の諏訪に在り。信長の子信忠五萬人を以て岐阜より木曾口に入り、信長七萬人を以て伊奈口に入り、金森五郎八三千人を以て飛驒口より入り、家康三萬人を以て駿河より進み、氏政兵を國境に出して遙に信

忠に聲援す。甲信の諸將多く勝頼を厭ひ、風を望んで解走す。勝頼則ち諸將の質三百人を焚殺して天目山に入る。信忠追躡、瀧川一益をして土寇を煽動して之を殺さしむ。斯の如くして武田氏は亡びぬ。

明智光秀、信長を殺す

信長大に功を論じ、賞を行ひ、瀧川一益に上野及び信州の二郡を與へて關東管領とし、家康に駿河を與へ、四國を三男信孝に與ふ。以下各差あり。是に至つて信長の領邑二十餘國に跨り、北條氏以下皆財貨を献じて款を通じ、天下一統の業殆んど成らんとす。時に秀吉、備中高松の城を圍む。城將清水長左衞門尉、善く防ぎ、毛利輝元また中國の安危此一擧にありとなし、銃士を送つて之を助く。秀吉則ち山谷の水を湛へて之を苦しめんとして、城邊三里の堤防を築く。城將に落ちんとして、輝元其族人小早川隆景・吉川元春等をして、精鋭を盡くして之を救はしむ。兩陣の間十餘町、相持して未だ戰はず。六月、秀吉急使を發して援兵を信長に求め、援兵をして城を圍ましめ、自ら毛利氏を攻めて、長驅席卷せんと欲す。信長、則ち池田信輝・高山右近・中川清秀・明智光秀をして、秀吉を救はしむ。光秀は十兵衞と稱す。美濃の人にして、世〻齋藤秀龍に仕ふ。光秀に至り四方に流寓して細川藤孝に仕へ、其老臣米田氏と隙あり、去つて信長に仕へ、數ば戰功あり。丹波を領して龜山の城主たり。その軍學、材武、智惠、一代の名流たり。然も性狷介にして偏狹、且つ自ら負ふこと實に過ぎ、矯飾にして快活の氣を缺く。彼は武人よりも、寧ろ衣冠禮樂の朝廷に立ちて、法家たるべき者にして、疎磊なる信長の幕中にあらんには餘りに重々しかりき。彼信長に從つて、數ば戰功ありし中にも、丹波の八上城を攻むるや、光秀、城主秦秀治を招降せんとして其母を送りて質たらしめ、秀治兄弟を招きて之を執ふ。光秀思へらく母を質して敵を降す、一大功勳なりと。信長則ち命じて秀治を焚殺せしむるや、城中亦之に酬いて光秀の母を焚殺す。光秀たる者信長を銜まざるを得ざるなり。信長宴を開くや將士鯨飲亂雜喧囂を極む。獨り光秀飲む能はず。一日光秀酒に堪へずして走るや、信長之を執へて其背に跨り、刀を拔きて曰く、酒を飲まずんば能く之を飲むかと。遂に其頭を擊つて鼓に擬す。是れ神經質なる者の堪ふる能はざる所なり。此の如くして感情の差異は恩讐を生じ、光秀の信長に平ならざるや一日にあらず。今や信長德川家康を安土に饗し、光秀をして饗應を司らしむ。光秀禮法に通ずるに於て多少の負誇なきにあらず。盛に供張を整ふること十餘日。饗應未だ開けざるに、また直ちに先鋒として秀吉を助くべしとの命を受く。是れ矯飾自ら負ふ者の堪ふる能はざる所なり。思へらく信長遂に己を除かずんば已まざるべしと。我彼を殺さずんば、彼我を殺さん。今や佐久間は北越にありて出づる能はず。秀吉は毛利と戰つて退く能はず。丹波長秀は四國にあり。瀧川一益は北條氏と相拒く。皆急に歸る能はざるべし。信長今京師にありて兵備なし、今にして之を殺さずんば時なかるべしと。遂に其部下明智光春・齋藤利三・溝尾義朝・藤田行政・明智光忠等を集めて志を告げ、且つ曰く、若し

以て非となさば請ふ我首を刎ねよと。衆皆誓つて共に死すべしと云ふ。則ち國中の兵三萬人を擧げ、揚言して曰く、中國に下るに先つて軍容を信長に示さんと。已にして桂川を渡るや鞭を擧げて京師を指して曰く、我敵は本能寺にありと。兵を麾きて之に迫る。本能寺は信長の居館なり。時に京師兵燹の後を承け、市街荒涼、本能寺より、桔梗の旗、遠く曉風に飜るを見る。信長初めて光秀の叛を知り切齒して出て之を防ぐ。左右一百餘人、皆甲を著くるの暇なく、單刀接戰するも衆寡敵せず。信長則ち火を放つて自殺す*。光秀同時に信忠を二條城に攻めて之を殺す。之より兵を分ちて、信長の族人を求めて之を殺し、遂に家康に及ばんとす。家康走つて和泉に藏れ、吉野の間道を經て遠江に歸る。光秀衆心を得んとし、京師の戸税を除き、安土にある財貨を取つて之を將士に頒つ。天皇使を下して數ば之を勞ふ。

秀吉、高松城を取り毛利氏と和す

此時高松の城主力已に盡るを以て、自殺して將士を救はんことを乞ふ**。秀吉之を許して、其城を收め、毛利輝元と對陣す。毛利氏、遂に秀吉の敵にあらざるを知り、備中・備後・伯耆を割きて和せんことを約す。約正に成つて、信長兇變の報至る。秀吉毛利氏に告ぐるに事實を以てし、猶ほ三國割讓の約を守らんとするかを問ふ。是れ固より秀吉の胸中、利害の計算已に明かなるの後に出てしものなりと雖も、敵人は見て以て膽氣となし、小早川隆景主として秀吉の人物の到底

* 信長の死する時四十九歳

** 高松の城主筏によりて使を發し、書を秀吉に與ふ曰く「謹而奉述愚意、當地永々御滯陣楚辛勞力作恐奉察候、然者當城極運之養、彌近奉覺候清水兄弟難波傳兵衞尉近松左衞門尉代衆命可致切腹之條被御憐愍籠城之輩被施於寛仁君德悉於御助成者忝可奉存候依回章明日中可及切腹候然者小船壹艘幷美酒佳肴聊預恩賜候者且忘籠城之辛苦且可散老兵之疲勞候恐々謹言」清水兄弟は城主にして難波近松は毛利より援兵として送りしもの也、秀吉、之を見て感佩して部將をして返書せしめ、其の子弟を殺せざらしむ。曰く『御狀の趣筑前守令相達之處各四人代衆命籠城之諸人可有御助成之結構一入被相懸即可被應御望之旨候、然者小船一艘、酒肴十荷並上林檎極上三袋令進上候明日檢陵出候樣にと御使者被申候得其意存候四人の外假雖長男連枝切腹有之間敷旨被申候」城主等遂に船中に自殺す。戰國武士の氣象斯の如きものなりき。

*** 六月六日高松を退き、七日洪水によりて滯留し、八日姫路に入り、一日休息して、八日に出發し、十一日午前尼ヶ崎に入る。秀吉の軍は一番高山の兵二千、二番中川の兵二千五百、三番池田の兵五千、四番丹羽の兵三千、五番織田の兵四千、六番秀吉の兵二萬。

天下の主たらずんば已まざるを論じ、寧ろ約を守つて恩を賣るに如かずと爲し、遂に秀吉若し光秀を討たんとせば、貸すに兵を以てせんと言ふ。秀吉大に悅び五百挺の鐵砲、百挺の弓を借り、急に京師に出でんとして尼ヶ崎に至り、使を發して信長の諸將を會す。時に高山右近は高槻の城にあり、中川清秀は、茨木の城を守り、池田信輝父子は有岡・尼ヶ崎・花熊の城を守り、丹羽長秀は近江の佐和山にあり、織田信孝は神戸にあり、其威望平生、秀吉の上にあり。然も非常の事變は、人物の階級を打破し、彼等皆秀吉の催促によつて、尼ヶ崎***に會し、其命を聽き前後を部署して山崎に至る。

秀吉、光秀を亡ぼす

光秀、秀吉が此の如く急奔殺到するを慮らず、安土・淀の間に徘徊せしが、秀吉來攻の報を聞き、急に其二男を質として、大和の筒井順慶を招く。順慶依々應ずるが如く、應ぜざるが如くす。光秀則ち兵を發して、秀吉を山崎に逆へ擊たんとす。秀吉の總軍三萬六千五百人、光秀の總軍一萬六千人。光秀先づ天王山を取つて、高きによつて山崎を打たんとす。秀吉もまた天王山を爭ふ。已にして秀吉の兵先づ天王山を奪ひ、勢に乘じて進擊す。光秀大敗して青龍寺に入り、また伏見に走らんとして、小栗栖の土寇に襲殺せらる。秀吉、光秀の父を殺し、父子の首を梟す。是に於てか諸將相議して信長・光秀の故地を分ち、信忠の子三法師を立てゝ主とし、近江の三十萬石を捧げ、織田信雄をして事を攝せしむ。

秀吉、反對黨を亡ぼして天下を取る

信長の生前勝家の聲望遙かに秀吉の上にあり。今や秀吉大難を定めて威望頓に高く、正親町帝之に右近衛中將を與へんとし、京師にありて天下の政治に當るを見て、勝家怏々として樂まず、數ば秀吉を凌辱す。丹羽長秀、秀吉に勸めて曰く、天下を定めんと欲せば先づ勝家を斬るべしと。秀吉笑つて曰く、我豈に敵せん耶と。却つて質を納れて之と和親す。勝家釋けず。瀧川一益・佐々成政を聯ねて秀吉を攻めんとす。織田信孝、又信雄が隱然、織田の族長たらんとするの勢あるを見て喜ばず、また勝家と聯結す。秀吉之を聞き、急に岐阜城を攻めて信孝を降す。時、初冬にして雪深し。勝家其國越前にありて兵を出す能はざるを以て僞つて和を乞ふ。秀吉聽かず。近江の長濱を攻めて、勝家の子勝豐を降して勝家の道を塞ぎ、已にして天正十一年正月七萬五千の兵を起して伊勢に入り、瀧川一益を攻む。勝家之に聞き兵を擧げて近江に出づ。秀吉、一軍を分つて一益に當らしめ、自ら長濱に出で、勝家と相對す。已にして信孝岐阜にありて再び兵を擧げ、勝家に應ず。秀吉憤激、信孝の母の來つて質たるを執へて磔殺し、疾く進んで大垣に至り、擊つて信孝を破る。勝家の將佐久間盛政、秀吉のあらざるに乘じ、近江の軍を攻めて、中川清秀を破つてこれを殺す。秀吉、また急に美濃より歸り、盛政を賤ヶ岳に攻めて之を破り、首を斬ること五千。長驅席卷、勝家を追うて越前に入り、北の莊を圍む。勝家火を放つて自殺す。秀吉が大垣を發したるは二十日の正午にして、北の莊を陷れしは二十三日なり。其軍を遣るの速なる、此の如きものありしなり。之より勝に乘じて加賀・能登を平げ、還つて信孝を亡ぼし、一益を降し、天下の大勢、遂に秀吉に歸す。德川・毛利・上杉の諸侯皆使を發して戰勝を賀せしむ、之より先き秀吉、勝家・丹羽長秀・池田信輝、各〻一人の所司代を京都に置き、合議によりて事を決せしが、勝家亡びて丹羽・池田も亦其の所司代を罷めしかば、天下の政治一に秀吉の手に決す。秀吉遂に覇府を開かんとして地を相し、本願寺の僧光佐が籠れる石山の地勢、西南は中國・九州・四國の咽喉を扼して、東北中原諸國を控制するに足り、沃野に連り、大江・大海に通じて、輸送に便なるを見て、遂に近畿十餘州に賦課して此に築く。大阪城是なり。

家康、織田氏に黨して秀吉と戰ふ

是より秀吉殆んど天下の主たり。其領邑の大、威力の强、勢望の隆、信長の上に出で、天下また信雄を語らず。信雄憤慨、秀吉を除かんことを計る。秀吉則ち其老臣を誘ふ。天正十二年三月、信雄遂に老臣を殺し、使を發して、池田信輝・德川家康を誘ふ。家康は信雄に黨し、信輝は秀吉に誘はるゝを以て聽かず、却つて秀吉の先鋒となつて尾州に入り犬山城を取る。時に信雄・家康清州にあり、相携へて、小牧山に陣し、柵を立て壘を築き、犬山と相對す。信雄・家康の聯合軍二萬にして、秀吉の兵十二萬五千、兩陣相持して戰はず。已にして信輝、秀吉に建策して潛かに三河に入つて抄掠す。家康、また師を潛めて其後を追ひ、擊つて之を長久手に破りて信輝等を殺し、ま

家康長久手より歸り小幡に陣すと聞

た軍を旋して小牧山に入り、また兵を出して、尾張蟹江の城を攻めて瀧川一益以下、秀吉の黨與を降す。此時に方つてや秀吉の威名全國を掩ひ、其勇才武畧、鬼神の如く語られぬ。家康眇たる一大名を以て能く信長の遺孤を助けて、秀吉の大軍と戰ひ、其神機妙算、秀吉をして送迎に暇なからしむと云ふや、家康の名望一朝にして高し。長曾我部元親之を聞き、遙かに家康に應じ、四國より大阪に出んとし、根來の僧兵また家康に應じて秀吉の後を絕んとす。蓋し德川の一族、常に强國の間に挾りて戰鬪なきの年あらず、殊に其西隣は、武田晴信の精鋭なる軍隊を引受けて、一日も武備を怠らざりしかば、三河武士は嚴毅猛烈、殆んど上杉の勇猛、武田の訓練を兼ねたるものとなれり。唯だ戰鬪は常に信長の下に戰はれしを以て赫々の名なかりしなり。今や其材武は天下の諸侯をして秀吉以外また一大英雄の存するを知らしめ、其遺孤を助けて戰ふの一事は、其高義賴むべきを信ぜしめぬ。而して天下最も此を知れるものは、小弱諸侯にあらずして、其敵手たる秀吉なりき。＊＊秀吉能く戰ふと雖も、彼の最大伎倆は兵戰にあらずして、英雄の心を攬るにあり。彼の戰は信長の如く奇變に富まず、家康の如く嚴毅ならず。唯だ天下の力を集めて正面より掩擊するにあり。若し將軍としての個人的伎倆を論ずれば、決して信長に如かず。信長、また家康に如かず。故に力征を以て相爭はんとせば、秀吉家康の屈すべからざるを知りて思へらく、長く家康と戰ふは決して利にあらず。速かに和して之を羅致せざるべからず

き、秀吉憤慨、大軍を發して赴く。本多平八郎小牧山守將の一人也。則ち僅かに二三百人を率ゐて、秀吉の大軍に並びて進む。其間五六町。秀吉其驕氣に驚く。三河武士の風此の如きものありき。

＊＊詩人石川丈山は元和元年大阪の役に與かれる勇者也。林羅山に與ふるの書に於て、信長と秀吉の戰術を論じて曰く、凡秀吉之所長者克乘臨機應變之勢間不容髮不便敵獲窺情氣幷吞四海指揮三軍寘敵國掌握之中運籌決勝者匪諸將之所能及信長之所長、不拘土地之險難不辨兵卒之多寡出於不意擊於無備十戰十勝能獲其全者也。……是皆奇戰非正戰至其行軍用兵則如風之發如電之過……是以屬信長之麾下者雖老將軍監未嘗聞出師有號令云由是觀之秀吉頗

と、十月使を信雄に發して和を乞ふ。信雄之を諾す。則ち犬山城を信雄に與ふ。家康引いて國に歸り、長曾我部元親の畫策もまた廢絕す。

根來僧兵の降伏、秀吉關白となる、新民崛興の勢極る

然れども秀吉は目的なしには徒らに和せざるなり。彼は信雄よりも急に除かざるべからざるものを有したり。紀州＊根來の僧兵なり。九州の島津なり。北方の北條氏なり。根來は其祖覺鑁が天子の上に位する者僧侶の外なきを信じて寺院に入り、空海を駕せんとして眞言新義を唱へしより其僧多く覇氣あり。足利氏の末に及びては已に儼然たる一個の諸侯となり、兵を近傍に出して民財私產を奪ふ。雜賀の黨亦之と結託して數ば信長に抗す。時に服屬する事なきにあらずと雖も、其巢窟未だ曾て轉覆せられざるを以て、海によつて南海と相通じ、益〻猖獗に、家康と相應じて秀吉に抗し、高野の僧亦兵を擁して攻伐を事とし、無賴亡命の徒を集めて民田を奪ふ。此に於てか天正十三年秀吉先づ十萬の兵を發して根來を攻めて之を破り、進んで雜賀を攻め、其將五十人を執へて磔殺す。高野の僧侶之を聞きて震恐し、關を廢して民害を除き、民田を還す。區々の僧兵を擊つに十萬の師を要す、以て其の勢威の大なりしを見るべきなり。之より四國を攻めて長曾我部氏を降し、遂に征夷大將軍たらんと欲す。秀吉の大望も其無學は其望を此に止まらしめしなり。今出川晴季・近藤前久、秀吉に勸めて關白たらしむ。秀吉曰く、關白とは何ぞと。二人其人臣の極なるを言ふ

用正戰信長常用奇戰有形乎秀吉之軍無形乎信長之軍。是れ實際の言也

＊根來最も武器を選ぶ。鳥銃の最も早く用ひられしは、薩摩、根來、堺也。また其物產も多し。根來の漆器の如きは精、天下に冠たり。

や、秀吉大に悅んで關白を望む。九條植通極力之を排し、藤氏以外の子、關白たるべからざるを言ふ。朝廷聽かず、豐臣の新姓を與へて**關白たらしむ。凡そ源平以後、大臣將軍となりて、時の執權たるもの、假令平民の奉戴する所となるとも、其血管中には、皆多少貴族の血液を有せざるはなく、好し有せざるも有すと稱せざるはなし。獨り秀吉に至つては純乎たる平民なり。一滴貴族の血を有せず。其下に立つて大諸侯たるものも、亦多くは虛飾なき純乎たる平民なり。而して人怪まず。自ら恥ぢず。我より古を爲すの心あり。此に至つて政權の下移、其勢を極め、源平以後の幾爭亂を醸成せる新民崛興の勢は、其極に達し、上下混蕩、南北合一、舊日本の歷史を組成したる凡ての要素悉く崩壞し、新歷史の端此に開く。

佐々、上杉、島津、德川の服屬、諸侯の誓文、金配り

然れども虛名は、彼を滿足せしむるに足らず。官爵は彼の無休の精神を沮む能はず。彼の大望は即ち大業にして、一統の大業成る迄は心を滿足せざるなり。併も彼は無謀の戰を好む者にあらず。必ずしも攻めず、必ずしも窮迫せずして、服屬せしむるに足る者は談笑の間に服從せしめんとす。天正十四年八月十萬の師を起して北陸に入るや、佐々成政之を防ぐ。秀吉使を上杉景勝に發して曰く、佐々成政、命を奉ぜざるを以て之を攻む。請ふ救ふ勿れと。景勝故らに兵を起して越中に入り、宮崎の城を取り、火を放つて歸り秀吉に言はしめて曰く、越中は我先君の領する所、佐々氏の掠むる所なり。我れ之を回復せんと欲するや久し、敢て爲さゞるものは、聊か以て公の言を容るゝ所以なり。我が兵を用ふる此の如し、請ふ爲す能はずと爲す勿れと。秀吉其膽氣を重んじ、佐々を降すの後、二騎三十八卒を從へ、秀吉の使者と稱して微行越後に入り、左右を却けて景勝に會し、之を諭して入朝せしむ。時に景勝の傍にある者直江兼續のみ。秀吉の傍にある者石田三成のみ。是れ北方武士の歎美服從せざる能はざる擧動なり。景勝遂に秀吉に服屬す。此に於てか秀吉更に家康の歡心を求めて得ず。適〻家康妻を失す。秀吉、則ち異父妹の佐治日向に嫁せるを奪ひ、改めて家康に嫁せしむ。*家康猶ほ入朝せざるや、秀吉更に生母を送つて質となす。弟秀長怒つて曰く、家康の亡狀何ぞ此の如くなるや、寧ろ一戰して雌雄を決せんと。秀吉笑つて聽かず、家康遂に已むを得ずして入朝す。三河の家臣、秀吉の生母を一室に居らしめ、屋外薪を積み、家康の身若し變あらば直ちに火を點ぜんとして待つ。家康至れば秀吉之を待つこと極めて禮あり。酒饌饗應、豐美を極む。家康意稍安ず。秀吉則ち中心を開きて家康に語つて曰く、我微賤より起つて高位に上り、人心或は服せざらんことを恐る。足下苦し恭敬、余に下つて諸侯に示すに、典範を以てせば、天下の事成らん、我足下に求むること、是より多からずと。家康また到底秀吉の敵にあらずして人心靡然として之に服し、和平の氣日夜に興るを見て、意を屈して之れに從ふ。十一月秀吉諸侯を其聚樂第に會す。家康、首座

**秀吉關白となりて豐臣姓を用ふるや部下悉く豐臣を用ふ。一門一家は勿論、浮田秀家、前田利家、家康の子秀康、信長の弟信秀、京極高資、金山忠政、筒井順慶の子定次、大友義統、稻葉貞通、峰屋頼高、細川忠興、蒲生氏郷、堀秀政、長谷川秀一等、皆豐臣姓を用ふ。之を用ひざるもの信雄、家康、家康の臣井伊直政、長曾我部元親あるのみ。秀吉京都奉行五人を置く、淺野彌兵衞尉、前田玄以、長東大藏大輔、石田治部少輔、増田右衞門尉、是也。

*此時秀吉、家康の必ず異議あらんことを慮り二書を裁す。巳にして使者家康に會すれば、果して異議あり。曰く秀吉の妹を娶るは可、然れども長子巳に國事に當るが故に、質たらしむるを得ず。新婦の生めるを世子たらしむることを得ず。我死するも封を創るを得ずと、使者書を出せば、秀吉巳に此事を約す。恩廬の周密此の如きものあり。

天正十四年十一月正親町天皇位を皇太子周仁親王に讓る、之を後陽成天皇と奉す。十四年十二月秀吉此年、大政方廣寺を建て、大佛を作る。

彦山は、久しく衆徒を養ひ、四方に兵力を強大し、叡山の如く、京師に於けるの亂を久しくせり。大友州の內亂、毎に彦山徒の力也。

にあり。秀吉に仕ふること、恭敬を盡くす。是より諸侯皆相告げて曰く、家康にして此の如しと。天下滔々、相率ゐて秀吉に服す。獨り服せざるもの南方に薩摩の島津義久あり。北方に相模の北條氏政あり。秀吉書を送つて義久に諭し、且つ仙石權兵衛をして身を商賈に扮して、其地理を探らしむ。大勢變遷の春風は猶ほ未だ薩摩の奥に入らず、彼等は猶ほ賴朝を半神的に信じ、朝廷の公卿を詩歌的に崇敬す。秀吉の書を見て曰く、賴朝以來近衞殿の外、上洛を促せしものを聞かず、猿面冠者我を屈せんとするかと。秀吉到底之れを打擊するの外、警醒する能はざるを知り、十二月畿內五國、北陸の五國、近江・美濃・尾張・伊勢・伊賀、南海の六國、中國、凡べて三十七國より、三十萬人の兵を徵し、一年の糧食、二萬疋の馬料を具へしめ、天正十五年二月、海陸、道を分つて九州に向ふ。戰は先づ豐後の府內に開かれぬ。薩人、敗れて退き、馬嶽の城もまた敗れぬ。秋月もまた小熊の城を献じて降りぬ。彦山の惡僧も震慴して歸伏せぬ。之より諸城風を望んで解走す。豐臣秀長は日向より上陸し、前田利長は大隅より上陸し、三方等しく鹿兒島に向ふ。薩人は初めて上國の兵の恐るべきを見ぬ。義久力盡きて剃髮して來り降る。秀吉則ち島津氏の侵地を削り、政令を更始して歸る。之より先き天正十四年の冬、天皇位を太孫に讓る。之を後陽成天皇とす。秀吉九州より歸るや二皇兩后皇太子を聚樂第に饗して歡を盡くし、首として諸侯を率ゐて相約し、永く朝貢を廢するなからんことを誓ひ、諸侯また關白に對して決して負く所なからんことを誓ふ。諸侯が秀吉に負かざるは已に事實なり。而も靑天白日の下、天皇の前、萬衆の眼前に於て之を誓ふは、是れ明かに諸侯を臣屬たらしめしものなり。是に於て秀吉の覇業全く成る。秀吉則ち京師の租稅を全く皇室の御料とす。其入る所地子銀五千五百三十兩、地子米八百石なり。また近江高島郡を以て公卿及び諸親王の采邑とす、其入る所八千石なり。秀吉已に天下の主たり。財貨蓄ふるに足らずとなし、其藏する所を出し、金三萬枚・銀五千枚及び三十六萬五千兩を諸侯に分與す。

諸侯の誓文は左の如し。

敬白　起請聚樂第
一就今度聚樂第行幸破出之趣以雜人有能惑誤事
一禁裏御料所地下賜公家門跡衆門跡幷諸家所知行等若無道行族出有之者爲各加意見當分之儀不及申子々孫孫無異議之樣可申置事
一關白殿之仰聽之趣於何人逆背事不可申之事
右條々若違背者一事於令違背者梵天帝釋四大天王惣日本國中六十餘州大小神祇殊王城鎭守別氏神春日大明神八幡天滿大菩薩天神部類眷屬族神罰冥罰各可罷蒙者也仍起請如件
近衞少將豐臣利宗　參議左近衞中將豐臣秀家　權中納言豐臣秀次　權中納言豐臣秀長　內大臣源家康　大納言平信雄　中納言吾金（聚樂幸記）殿

時黃金は一の奇寶なりしが故に、

東北諸豪の來附、北條氏政の降伏、伊達政宗の屈伏

東北の邊鄙も、長く此盛德大業に盲目なる能はず、その豪族・伊達・南部・津輕・佐竹・岩城・相馬・秋田・里見・結城・那須・葦名・蠣崎の諸氏、皆欵を容る。獨り北條氏政、悍然として抗す。秀吉戰はずして之を壓せんと欲し、百方之を誘ふ。氏政猶ほ聽かず。此に於てか天正十七年意を決して之を征せんとし、駿河・越後、以南の四十五國に兵を徵し、京師の留守を毛利輝元に託し、二十六萬の大軍を率ゐて進み、兵を分つて武藏・相模・上野の諸城を攻めて之を取り、全軍皆韮山と小田原とに集る。已にして韮山また落つ。小田原猶ほ抗拒す。秀吉反間を放ち城中をして相疑はしむ。氏政事爲すべからざるを察し、遂に出でゝ降る、秀吉其勇武事を起さんことを恐れ、迫つて自殺せしめ、氏直を高野に放つ。之より遣臣族黨賴る所なく亡命して乞食するに至るも、猶ほ他

秀吉奉行を立て人名を呼びて之を與ふるに諸侯悅んで之を受けたり。

＊秀吉の小田原に出陣するや、作り髯し、且つ服裝なり美にして涅齒す。（太閤記）

秀吉小田原を降すや、鎌倉に入つて賴朝の塑像を見、其背を撫して語つて、曰く、一旅の師なくして天下を取るもの唯だ公と僕とのみ。然れども公は門閥あり、余は微賤に起る、且つ僕、遂に區々日本の統一を以て足れりとせず、正に明に及ぼさんとす、公もまた僕に如かざる乎と。また道、尾張を經るや、遙かに一村を指して曰く、我鄕里は、彼處にありと、則ち輕裝して中村に入り、父老を招き、談笑時を移して去る。今名古屋城に上れば中村を望むを得べし。

＊條々

一諸國百姓等、刀、

家に仕ふるもの少なし。而して德川家康移されて其後を襲ひ、太田道灌の故地、江戶に築く。秀吉更に進んで下野の小山に入り、伊達政宗に會して、其侵地を削り、蒲生氏鄉をして、會津白河を領せしむ。木村伊勢守をして葛西・大崎を領せしめ、政宗をして其間に居らしむ。且つ云ふ、削地若し不可とせば、則ち退きて城壁を治めよと。之より先き政宗已に小田原に謁す。秀吉大言して曰く、公輩草野の私闘に慣るゝのみ、何ぞ王者堂々の戰を見ざると。盛に軍容を張つて之を示す。政宗、仰ぎ見るを得ず。膽氣已に秀吉に屈す。また爭ふ所なきなり。此に於てか天下全く一統す。

民戶の武器を收めて大佛を作る、田制改革、當時の經濟事情

天下已に平かなるや、民戶の兵器が騷亂の基たらんことを慮り、秦始皇が天下の兵器を收めて金人十二を作りしに倣ひ、天正十六年七月天下に令し悉く民戶の兵器を收め新たに作るべき大佛の釘を作ると稱し宗教によりて民心を抑ふ。是より先き平民もまた＊刀を帶ぶるもの少なからず。平民の黨を作つて諸侯たるもの少なからず。今や此の法令により兵器全く民間より絕えて、武士と平民との別全く立ち、封建の勢遂に成る。其所業は純乎たる秦の始皇なり。而して彼天下に令して堯舜の＊＊政を行ふと言ふ。此くて秀吉また法度・衡量・租稅を一にして、全國始めて統一の治に從ふ。而してこの一事に於て彼を助けしものは、長束大藏の大輔・增田右衛門尉なりき。彼等は先づ使を發して天下の田地を撿して、其廣狹長短を定め、三百六十步の段

わきざし、弓、てつはう、其外武具のたぐひ所持候事堅令二停止一候。其仔細者、不入道具相たくはへ、年貢所當を難澁せしめ、一揆を企、自然給人に對し非儀の動をなす族、勿論御成敗あるべし。然者其所の田畠令二不作一、知行つひえに成候間、其國主給人代官等として、右武具悉取あつめ、可レ致二進上事。

一右取置かるべき刀、脇差費にさせらるべき儀にあらず。今度大佛御建立候釘かすがいに被二仰付一べし。然らば今世は不レ及レ申來世迄も百姓相助かる儀に候事。

一百姓は農具さへもち、耕作を專に仕候へば、子々孫々まて長久に候、百姓御あはれみを以て、如レ此被仰出候、是國土安全萬民快樂の基也。異國にては唐堯のそのかみ天下を令二鎭撫一寶劍利刀を農器に用ひ候も本朝にてはためしあるべからず。此旨

を改めて三百步と爲し、六尺三寸平方を一步とし、其收穫を三分して、一を農夫に與ひ、二を領主に納れしむ。足利氏の末より信長の時に至るまで田制三あり。三百步を大步とし、百五十步を中步とし百步を下步とし、百步以下は之を棄田と稱して租稅を課せず。其租は六公四民、若しくは五公五民、若しくは北條氏の如き仁政を布くの地にありては、四公六民なるものありき。此の如き不畫一なる政治の下にありて足利義輝の時、壹岐・對馬の二島を除き（北海道は當時存せず）日本國中の總高千八百六十九萬七千二百四十二石なりしに、今や段步を改め、隱田を暴きしがため、八百萬石を增加せり。加ふるに二公一民の制となりしかば、萬民は古今未だ曾てあらざる重稅を課せられしなり。然れども秀吉が＊＊法令を一定して農民をして領主の侵掠を免れしめ、度量衡を一定して僞詐なからしめ、また水旱によりて、一段の收穫一斗に充たざるときは、租稅を全免するが如き方法を設けたるによりて、また多少の救治を得ざるにあらず。然も應仁以來、英雄割據の形勢を生じ、族黨の制破れ、勇士募集の法起り、個人的勇力の價減じ、武器の精銳を競ふの風となり、最も要する所は富なるがため、英雄競うて殖產を勵まし、民產頓に進み、佐渡・甲州の金山皆騷亂中に採掘せられ、黃金の多き古今此の如きはあらず。銀四十二目を黃金一枚に換ふるほどなりしかば、是等の重稅も足利時代の貧苦にして濫役なるに比しては、寧ろ幸なるものありて天下乞食なきに至りき。

知り、善其經營を存し、百姓は農業に精を入べき事、右道具念度致進上、可沙汰候也。
天正十六年七月日　御朱印
（阿部文書）。

＊諸公人侍事は一申すに及ばず、中間こもものあらし子に至るまで其主に義とまこはず出候間へ相抱ふ曲事候間へ主の曲事候間へ主の相屆け合點このかに相屆けに非におよれば、ばざらば是非およれば、一百姓其在所に有之田畠荒すべかへら其給人其在所へ相越し百姓とり二相劉檢見を遂一郎米三分一百姓に道一二米未進人三分一百姓に道一二米未進人給人とるべき事くし給人すべきなかり自然其年によりし地料米百姓に一段の田あんば、一反の拂ばら不可よ内の條農せ百姓に可拂り内の條農せ翌年の毛をまとら翌年の毛をまとらすと付せうすと付せ候やし。右に二分に如壹斗に定よいたず三分上りたべ一百事。年貢なはら一百事。

定

學問の缺乏、東常縁、紹巴、藤原の惺窩

空しく、僅かに紹巴の連歌に巧なるあり。禪僧正徹の和歌に巧なるあるのみ。北條氏の末、足利氏の初より、文學の權公卿の手を離れて禪僧の手に歸せしが、禍亂の爲禪僧其衣食の道を失したるより、文學を業とするものなく、僅かに一の東常縁ありしと雖も、常縁、東國の亂を平げんがため下るや、京師また文學の大宗なきに至る。其他太田道灌の後土御門の時にある、細川藤孝の秀吉の時に於る、皆一代の名家たりと雖も、僅かに其限ある子弟を教ふるに止りぬ。人あり、四書の素讀の師を求めて得ず、公卿の山科氏、學問深甚の名あるを以て往つて之を問ふに、大學・中庸・論語を教へ、孟子に至つては其書を有せずと稱して教へず。實は師自ら孟子を讀むを解せざりしなり。此の如くして公卿は其文學の權をすら失ひぬ。然るに越後上杉の重臣直江兼續、英雄の姿を以て學を好み、長門の小早川隆景、また學を好みしかば、地方武士の間に於ては學問漸やく起らんとし、藤原惺窩出づるに至つて儒學興隆の端、漸やく開けたるも、猶ほ文教一代を動かすこと能はざりき。社會は猶ほ生存の計に餘裕なかりしが故なり。

社會の行樂

然りと雖も社交行樂に至つては、早く已に發生しつゝありき。當時明及び葡萄牙・西班牙との貿易漸やく發達するに從つて、珍器異寶日夜に至りしかば、上流社會に於ける生活の程度漸く高く、之と共に秀吉が天下の大軍を集めて、南島津を攻め、北、北條氏を征するや、天下の財貨は數百年來干戈の衝たりし五畿近傍に集まりしがため、此の近傍に於ける社會の行樂は漸く起る。義政時代にありては金を明に送つて錢を買ひしに、今は外國貿易に對しては金銀判を用ひ、內地の賣買に於ても銀塊を切斷し、量目を量つて之を通貨として用ふるに至り、之より後久しからずして金銀貨幣を作るに至り、慶長判の名は、後世、善良なる貨幣の標準となりぬ。以て社會の生活が如何に高く上りしかを見るべきなり。故に貧寒なる公卿は殿上に歌會を催して、豆餅を以て歌賃とするに方りて、秀吉以下の諸侯、及び近畿の富豪は、茶の湯及び茶器の展覽會を催すに至りぬ。此中最も奇なるは、秀吉が自家の珍器と、市民の珍器を競はんがため、北野の松原に茶會を催したるにあり。この會や貴賤を問はず、志あるもの皆會するを得、堺の市民は京の市民と、互に其風流を競ふに至りき。この一事に於ては秀吉等猶ほ義政の風流遺韻を仰がざる能はざりき。

宗教の勢力盛にして信仰衰ふ、秀吉基督教を抑へんとす

宗教は其初め天台宗の政治的勢力の衰ふると共に衰へて禪宗起り、禪宗、其皆空の見によつて信を衆民の間に博する能はざるの時、一向・日蓮の二宗起り、天下の騷亂に乘じ、兵力を以て其教義を弘むるや、燎原の火の如き勢あり。信長を苦しめ、家康を苦しめ、甚だしきは家康の家臣が長島の一向一揆に誘はれて家康に敵するや、一歩退けば一歩地獄に近し

きぬうちたるべき事。諸侍しきれはく事一切停止也、御供の時は足なかたるべし中間こもしなかたのは不べき断あしなかた一袴足袋にうら付くべからざる事。一中間こもの、かばたびはくべからざる事。

右條々若有違犯之輩者可處罪科者也

天正十四年　月　十日

九日

（西村文書）

石高なる呼ぶに貫を以てせるもの、流なる民此頃よりせるもの廢せらまたる現今の如くなられれり。貫ばの米五石錢にに當る。草蘆坪雜坪なとり文とし、千坪とよ貫ととし、十石、五石と合計とめて、五石と得る也。ばれ石と地る方にとよりて一定石せなる。即ち一貫上本國の天正前日、流下なる者なる者は絹服布、布、葛下布なる布なる用用布、木綿と交ふ此頃外國

一日本者神國たる處、きりしたん國なる邪法を可授候事儀

一其國郡之者近付門徒にに成し、破壊し前神社佛閣を打破候事

一甚以不可然

一代々國郡に被仰出候事

一所々知行等給人に事

一諸寺諸宗寺領、其種を得たる玉領、蓄取も其他また此頃より來れり。

通して、初まる

*定

一、日本は神國たる處、きりしたん國なる邪法を可授候事儀

一、甚以不可然

一、代々國郡に被仰出候事

一、所々知行等給人に事

一、諸寺諸宗寺領、其種を得たる玉領、蓄取も其他また此頃より來れり。

と叫びて、殆んど家康を亡ぼさんとするに至り、遂に天下の大勢力となりしが、其勢の張ると共に、其眞正の信仰は漸く衰へぬ。此時に方つて基督教の一派ゼスウイット宗の來るや、其聖僧ザヴエーの堅忍高德なる、其の財富に富める、其の軍隊的猛氣ある、頓に九州一圓を靡かしめ、中國を經て近畿・東山・北陸に蔓延するに至り、其堅信勇猛の心恐るべきものとなりぬ。其傳ふる所の化學は魔法の如く傳唱せられたり。其施す所の仁惠は、國を買ふの價なりと說かれたり。僧侶之を內に讒し、愚民外に之を傳ふ。之に加ふるに基督教を信ずるもの、多くは九州の諸侯、新進、有爲の才あり、事變を好むの少年武士なりしかば、武士の間、また軋轢を生ぜぬ。若し一旦變あらんか、基督教の勢は一向一揆・日蓮一揆の上にあらんとす。一向一揆・日蓮一揆中には、猛將謀臣あるにあらず。然も其信長、家康を苦しめたること彼の如し。若し基督教の如く、大諸侯を初として智謀勇猛の士を有するものを敵とせんか。由々しき大事ならざるべからず。是れ慧眼なる秀吉の看過する能はざる所なり。故に信長は佛敎の危害を見て、極力佛寺を滅せんとせしが、今や秀吉は極力基督教を滅ぼさんとす。然も部下の猛將謀士中に其徒多きがため、倉卒に手を下す能はずして機會を俟つ。其間、幾多の流言浮說は行はれぬ。僧侶は之を喜びぬ。然も僧侶よりも、最も喜びしものは秀吉なり。彼は此の如くして機會を俟ちぬ。已にして機會は來りぬ。秀吉九州にある時一葡萄牙船あり。肥前の平戶に入る。秀吉宣敎師に命じて博多に回航せしめて之を見んとす、船長聽かず。秀吉その盛怒、霹靂の如きに託して、直ちに令を下して曰く、宣敎師等二十日以內に日本を退去せよ。然らずんば死罪に行はんと、此くて後、基督敎禁止の令は下りぬ。已にして天正十八年使を呂宋に遣はし、服屬を命ずるや、其太守、フランシスカン派の僧ペトロ・バウチスタをして布敎を乞はしむ。秀吉之を許して京都に傳敎し、敎會を立てしむ。基督敎また京師に盛なり。長崎にある葡萄牙の商人、大に之を憤り、是れ西班牙の爲に日本に叛亂の種を植うるの使者なりと讒す。秀吉大に怒り、直ちにバウチスタを追ふ。是よりゼスウイットの僧また長崎を中心として傳敎するの自由を得たり。然れども秀吉の大方針は常に基督敎を抑ふるにありき。

國民の氣風、習俗、法律、及び道德

當時國民の氣風は佛敎の感化によれる厭世思想なく、純乎たる日本固有の戰士的氣質となりぬ。凡そ如何なる時にありても、宗敎の高遠なる敎義は、時の詩歌・散文・小說の力によりて社會に注入せらるゝを常とす。何となれば國民の多數は、其錯綜せる敎理を自ら咀嚼するの識力なきが故なり。今や應仁以來社會の文敎は全く跡を絕ち、文學なるものは殆んど忘れらんとしたり。固より國民に佛敎の厭世思想を附與するの機會なかりしなり。況んや應仁の大亂天下を一大軍營たらしめ、殺伐の氣風天下に充滿するに加へて、厭世的佛敎は、已に一たび禪宗に打破せられ、再

び眞宗・法華宗の今日主義のために薄弱ならしめられたり。是等の原因は相集つて一大急潮の如く、國民の厭世思想を洗ひ去りしかば、國民の氣風は、其最初の狀態に歸りて、無垢なる戰士的氣風となりぬ。戰士的氣風は敵に對しては殺伐なれども情あり。其威を惡みて其窮を憐めばなり。戰士的氣風は義烈を尊とび、情を矯むること多きが爲、其調沈鬱なり。戰士的氣風は必ずしも事の正邪を問はず、道の善惡を論ぜず。操守殉情を主とするが故に其音悲愴なり。此の如くして此等の氣風や、人質の制や、敗者を窮迫するの風や、法律の行はれざるの風や、相合して一種の戰國的道德を生ぜぬ。戰國的道德は敵ながらも强者を賞嘆するの風なり。味方ながらも、死を惜みたる者を疎んずるの風なり。味方の多數を救はんがために死するの風なり。復仇の風なり。人の妻たる者夫に後れて自殺するの風なり。要するに厭世時代の道德の極粹は、世の憂を離れて自ら淨くするにあるが故に、其最後の方法は遁世なりき。今や戰國時代の道德の極粹は世と戰ふの勇氣にして、之を示すの標語は死の一字なりき。備中高松の城主が秀吉に攻められて自殺し、部下の降を乞ひたるが如き、永井隼人が和田伊賀守の敗るべきを知つて先づ戰つて和田の爲に死し、其家臣郡某が半ば死して本陣に擔がるゝや、何ぞ我揚卷を敵に見するやと罵つて死せしが如き、班鳩平次が淸正に仕へんとして舊祿を問はれ、未だ功なくして祿を貪るは上杉家の家法にあらずと云へるが如き、小田原陣に北條氏が越後の强兵に對し、今一矢見せよ

間今日より二十日之間に用意仕可二歸國一候、其中下々伴天連に不レ謂族申懸者あらば可レ爲二曲事一。一墨舟之儀は商賈之事候間各別に候。年月經諸事賣買可仕候事。一自今以後佛法之妨を不レ成輩は商の儀は不レ及レ申候、何にてもきりしたん國より往還不レ苦候條、可レ成二其意一事。

天正十五年六月十九日　御朱印

南蠻寺興廢邪宗門記及切支丹由來記の二書妄誕笑ふべき事多しと雖も、當時の世は實に此く信じたるなり。

秀吉の一統　國民の氣風、習俗、法律、及び道德

と望み、其陣頭に現るゝや小銃もて狙擊し、秀吉其武士の法に背くを誚ひるや、氏政が之を辯したるが如き是れなり。源平二氏の氣風が、平家物語・盛衰記を生じて、此二書長く北方武人の經典たりしが如く、南北兩朝の爭太平記を生じて、太平記が長く足利時代の理想的詩歌なりしが如く、元龜・天正の戰士的氣風は、口碑・傳說によりて、後來武士の經典となりぬ。而して此の戰士的氣風たるや、婦人にも及びたるが爲、此時代の婦女は、決して南方文化を受けし京都の女子の如く、若しくは德川氏以後の女子の如くならず。强勇義烈にして爭を好み、死を見る歸するが如く、一向一揆の徒には、市民の女にして戰に加る者少からず。柴田勝家の妻か生存の勸誘を受けながら肯ぜず、歌を殘して猛火の中に自殺したるが如きは、稀有の事にあらず。當時の氣風を代表せるものなりき。また市民の妻にして一旦夫のために離緣せらるゝや、近傍の朋輩を募りて、先夫の家に亂入し、新婦を打擲するが如きは珍事にあらざりき。戰士的氣風は男女上下を一貫したるなり。此の如き無垢なる氣風の民にして、善政・英雄・善法を有すれば是れ進步あり、希望ある國民なり。然らずんば野蠻に復らんとす。日本國民は、秀吉の爲に野蠻に復るの運命を免れたり。彼は威力を以て治平を與へたるが如く、法律を以て治平を與へぬ。此法律の爲、諸侯は關白の許可なくしては婚を通ずる能はず爲れり。武士は徒黨を作るの禁を得たり。多く妾を畜ふるの風は排せられたり。大酒は禁ぜられたり。訴訟の法も定められたり。

殊に其海路諸法度と稱する海上法に至りては、習慣風俗を基として立てたるものにして、他の普通の法律の漠然たるに比して、周到緻密、今日の眼より見るも稱賛すべきもの少からずして、船主と荷主の關係、船主と船長の關係、其權利義務、其契約より生ずる結果、其天變より生ずる損害の負擔、船舶衝突に關する規定等を明記し、其風波に際して、船足を輕くせんがために、海中に投ずる積荷の損害を他の積荷と均分するの法に至つては、英國の法律と相近きものあり。而して此等の法令を布達するに、皆小早川隆景・毛利輝元・前田利家・浮田秀家・德川家康五人の名を以てせり。是より國人康安、希望洋々として生ず。

倭寇の猖獗、呂宋の入貢、秀吉明を征せんとす

秀吉已に天下を一統して諸侯服せざるものなく、言は法律となり、行は命令となる。此に於てか使を四方に發して、朝貢を促すや、朝鮮・琉球直に入貢す。此時に方つて、倭寇の勢益〻盛にして明の海岸・遼東・山東より、廣東に至るまで倭寇の至らざる所なく、澎湖島を取り、臺灣に入り、呂宋に入る。呂宋は元龜二年、信長比叡山を燒くの年、西班牙の水師提督レガスピーの征服する所となり、純乎たる西班牙領となり、軍艦大砲を以て其要所を防禦せらる。然れども倭寇は之がために其志を廢せず、絶えず攻擊を加へしが、天正八年バジアドル港に於ける大戰に於ては、倭寇の舟、西班牙軍艦に衝破せらるゝや、倭寇直に躍りて軍艦内に入り、短兵相接して殆んど一艦中の水兵を盡さんとするに至りぬ。天文二十二年上杉・武田河中島に戰ふの年は、倭寇大舉、數百の戰艦海を掩うて支那大陸に迫り、浙東・浙西・江南・江北、一時に其侵略を豪り、大湖・燕湖、南京も其襲ふ所となるに至りぬ。英雄豪傑が區々の境域を爭ふの時、國民は外に向つて此の如き絶大の遠征を試みつゝありしなり。故に此等の南北の遠征に加はりし冒險功名の徒、常に堺に出入して京攝の間に居り、頻りに秀吉を干して、其說を勸めしかば、誇大自ら悅ぶ秀吉の胸中、更に一個の新天地を發見せぬ。封侯は彼の望なりき。今や望は遂げられたり。天下の統一は彼の夢なりき。今や夢想は事實となりぬ。成功は人をして、更に大望ならしむ。今や秀吉は更に其望を大にして、海表に號令して南北東西を混一せんと欲するに至りぬ。思へらく、區々の倭寇猶ほ能く明朝と呂宋を破る。天地の特寵を得たる乃公の雄才大略を以て之に臨む、何事か成らざらんと。天正十八年小田原を征するに先ち、原田孫七郎を使として、呂宋に入つて服屬を命ぜしめ、聽かずんば直ちに征服軍を起さんと言ふ。呂宋は已に西班牙の領地となりフヒリツピンと號せらる。其大守ダスマリニマスは、固より西班牙の命を聽かずして其の運命を定むべきの權なしと雖も、秀吉の聲威隣近に震ひ、且つ已に倭寇の猛勇を熟知するが故に、假に使を發して方物を獻じ、且つ和親を乞ふ。秀吉また朝鮮王、李昭に命じて、明を促して入朝せしめ、聽かずんば道を朝鮮に假つて明を征伐せんと言ふ。朝鮮王笑つて曰く、

英人ホーノマンのフヒリツピン群島志によれば大守は秀吉と攻守同盟を

結びたりと云ふ。大事を守る權國なれば、實なる臣屬なるなり。然れども、吉秀の諸侯、榮華の峠を念の文字なきに恐らく許同さ等決對して此の如くなる原因等。其間なるべし。秀吉遂に意を決して對馬の國守宗義智をして、商人を使延慢して呼び吉秀倒す。

秀吉眇たる一身、則ち明を窺はんと欲す、是れ蜂の龜甲を刺さんとするに等しきのみと。秀吉大に怒り明の亡命汪五峰と共に、天文二十二年の大倭寇を起せる者の殘黨を招き、明の形勢を問ふ。彼等の語る所によれば、當時の倭寇の一黨三百人を以て、直ちに南京に入つて福建に下るに、向ふ所風靡せざるはなく、明將の我を恐るゝ乳虎の如しと云ふ。秀吉遂に意を決して對馬の國守宗義智をして、商賈に扮して朝鮮に入り、形勢を探らしむ。

秀吉子を失す、外征の議決す

にして長政の亡ぶるや、其妻改めて柴田勝家に嫁し、勝家の亡ぶるや自殺し、三孤、賴る所なくして民間に藏る。秀吉その長女の美を聞き、之を納れて寵愛比なく、男鶴松を生むや、熱愛して措かず。天正十九年鶴松三歲にして死す。秀吉時に年五十五。哀悼悲傷して已まず、殆んど寢食を忘るゝに至り、數ば出遊して、以て憂を消さんとす。一日清水寺の塔に上り、四方を望み、慨然として古今を懷ひ、人生の恃むべからざるを感じ、悲愁、中心より湧き來る。彼をして厭世時代の思想を有せしめば、彼は剃髮して世を退き、豪華一世を驚かすを以て最後の事業としたりしならん。然れども一代の戰士的氣風と、彼の强固なる智力は、彼をして義政たらしむるを許さず、彼をして悲愁の中に突進し、大業を以て悲愁より免れしめんとす。彼思へらく榮華は一朝のみ、何ぞ前古無比の大業を以て、名を萬世に遺すに如かんやと。遂に意を決して朝鮮に入り、明を征服せんと欲し、家康・輝元・隆景・利家・秀家の五大老、生駒雅樂頭・中村式部少輔・堀尾帶刀先生の三中老、淺野彈正少弼・前田玄以法印・增田左衞門尉・石田治部少輔・長束大藏大輔を大阪城に召して、外征の議を咨うて曰く、今や天下統一せりと雖も、明主猶ほ我命を奉ぜず、余此時を以て之れを夷げ、皇室を支那に移し、四百餘州を割きて、諸侯を封ぜんと欲す。故に先づ朝鮮不服の罪を問うて之を責め、若し服すれば先鋒たらしめ、服せずんば先づ之を亡ぼし、長驅して支那に入らんと欲す。余今愛子を失つて悲悼禁ぜず。然れども人生百歲の壽なし、何ぞ欝々の間に終るべけん耶。余が心已に決す、卿等以て如何となすと。この時、天下一百二十年の大亂より初めて泰平となり、行樂漸く起り、諸侯各〻劒を鞘にし、弓を囊にして、治平を樂まんとす。もとより秀吉の誇大自ら樂しむの氣象を知れるを以て、賴朝の故事を追うて富士の征狩を起し、若しくは大土木を起すが如きは之あるべしとは豫想せしも、未だ支那征伐あるべしとは思はざりき。今や此言を聽き、愕然として或は狂となし、或は喪心とす。一人敢て可否を云ふものなし。暫くして浮田秀家、席を進みて之を賛せしかば、衆已むを得ずして之に和す。秀吉大に悅び天正十九年三月令を發して兵を徵す。其の徵兵の標準は、諸侯の領邑の大小に應じ、一萬石につき四國・九州は六百人、中國紀伊は五百人、五畿は四百人、近江・美濃・伊勢は三百五十人、遠江・三河・駿河・伊豆

且國へ叡慮爲被成候路次例行幸之儀式可御出陣、御泊道筋人馬可御泊所度候、然に可申付事、足傳馬は、國限に可秀吉の經綸の細目を天子見るべし。彼の委細なんとなく支那に本日定天移子さば、白日豫の關白職の朝鮮支那の豫定關白職を之席を參せんし度ならも印度と欲したる也。

は五百人、是より北方諸州は二百人、若狹より能登は三百人、越後・出羽は二百人を出さしむ。また沿海諸侯をして十萬石ごとに、大船二艘を作らしめ、海港の民、百戸より十人の水手を出さしめ、凡て公役に應ずるものは其租を免じ、軍人役夫、軍を脫して逃るゝものは殺すのみならず、其親戚を誅すべしと令し、役夫外に在る間は、鄕黨邑人相助けて其田地を耕さしめ、若し田荒るれば、其責を鄕人に負はしむべしと、また城を肥前の名護屋に築き、十萬の役夫、百萬の金を費し、壯麗宏大、古今比なし。曰く、此より號令を發して、外征の紀念を百世に垂れんと。

秀吉親軍の軍容、征明軍の部署

已にして關白職を其義子秀次に讓り、自ら太閤と稱して軍事を統轄し、文祿元年三月廿六日親軍三萬を率ゐて京師を發す。發するに先つて諸將に命じて曰く、此役空前絕後の大業なり。衣服・軍器・旗幟を美麗にして金銀を鏤め、彩色を施し、彼輩をして笑はしむる勿れと。故に其親軍の軍容整正、約束嚴明、六十六の旗を立てゝ、日本統一を示し、劒戟の光、日に映じ、甲冑の美、人目を眩射す。秀吉自ら錦の戰袍を着て大刀を帶び、金甲馬に跨り、一隊の將士をして、修驗者に粧うて、螺を吹きて前駈せしむ。足利義昭もまた數百騎を率ゐて旗下に屬す。已にして、四月、大軍肥前に集まる。即ち號令を發して、一切の抄掠を禁じ、金銀を惜しみて、敵國人民の心を失はざらしめ、殺を嗜むなからしむ。地圖を諸將に分ち、色を以て國を分け、その向ふ所を部署す。小西行長第一軍たり。加藤淸正等第二軍たり。黑田長政等第三軍たり。島津義弘等第四軍たり。福島正則等第五軍たり。小早川隆景等第六軍たり。毛利輝元等第七軍たり。浮田秀家等第八軍たり。淺野長政等第九軍たり。羽柴秀勝等第十軍たり。九鬼嘉隆・藤堂高虎・加藤嘉明等水軍の將たり。秀家總大將を兼ね、小西・加藤の二軍先鋒たり。大軍、次を以て海を掩うて渡る。

明の國狀、朝鮮の微弱、行長平壤を取る

此時に方つてや支那は明の天下にして、古來最も廣大なる一統を遂げたる時なり。其主神宗、權臣張居正の家を族滅せしより、大臣族滅の禍起り、下には處士、直名を賣つて大臣と相排するあり。加ふるに神宗閨中亂れて事を見ず、朝政漸やく亂れ、訓詁・考證の學、大に盛んにして、兵備日に怠り、連年、倭寇のために海邊を蹂躪せられて、地方官等之を防ぐ能はず。元人侵略の古途たりし寧夏の地また叛亂し、傾覆の勢漸く成らんとす。明人許儀後薩摩にありて醫を業とす。秀吉の畫策を錄して百萬の大軍起程すとなして私かに之を福建府に報じ、琉球王また其臣鄭廻をして、福建巡撫に至りて事情を報ぜしむ。明主之を朝鮮王李昭に質す。之より先き朝鮮王、金誠一等を日本に送りて情僞を察せしむ。誠一歸つて曰く、秀吉もまた凡物のみ、決して軍を起さゞるべしと。故に李昭猶未だ秀吉の眞に遠征の意あるを信せず、誇張の辭として明主の心を安んず。已にして秀吉實に大軍を起すと聞き、倉皇狼狽、守備を治む。然れども其將士多く日本を恐れて相推諉し、適

此役毛利輝元、其銃士をして甲冑を着ざらしめ、以て行軍に便にす。是れ近時輕裝兵の初也。

城壁を作るも用に當らず。天變地異、また昔倭朝鮮を亡ぼすの兆として傳られ、妖言數ば起り、國民故なくして驚くもの、數ば相傳へて云ふ、世久しからず變ずべし、生前醉飽するに加かずと。宴樂數十日、千百群をなして、或は笑ひ、或は哭す。曰く、將相の其器にあらざるを笑ひ、國朝の將に岷ぴんとするを哭すと。已にして小西行長・宗義智等、釜山を攻めて一舉に之を拔き、八千人を殺し、二百餘人を擒にし進んで東萊を攻め、蔚山郡守李彦誠を執へ、朝鮮王に與へて道を假るの書を附して王に送らしむ。李彦誠、中道遁逃して書達せず。王、申砬をして京畿・黃海の二道を守らしめ、李鎰をして忠淸・全羅の二道を守らしむ。二人虛名あるのみ、兵を知らず。唯だ至る所兇威を恣にして民に厭はるゝのみ。已にして行長は中路により大丘を經、鳥嶺を越えて、淸正等東路により、蔚山より慶州・永州・龍宮河を經て、竹嶺を越えて、長政は西路により金海・秋風嶺を越えて、大軍等しく三道より京城に向ふ。諸城風を望んで解走し、日軍の進むや無人の地を行くが如し。已にして小西行長先づ京城に入れば、王昭已に出でゝ義州に走る。既にして秀吉遙かに命を傳へて朝鮮に分つて、諸將の向ふ所を示す。淸正咸鏡道を得、行長等平安道を得、長政等黃海道を得、三成等江原道を得、輝元等慶尙道を得、隆景等全羅道を得、正則等忠淸道を得。秀家は京城に止つて京畿を鎭壓す。既にして行長・淸正兵を併せて臨津を渡り、開城を取り、大同江に迫る。淸正兵を分つて咸鏡道に出て烏梁海に至り、其二王子を擒にして歸る。烏梁海は今の露領浦鹽斯德港の近傍の地なり。斯の如く兵鋒向ふ所勝たざるなし。然れども缺く所は水軍の力にして、朝鮮の水軍の將李舜臣が我水軍を巨濟島に扼するや、藤堂高虎等戰つて勝たず。後來島通泰、また李舜臣と戰つて敗死す。我陸軍既に開城に入つて、水軍猶ほ之に伴はず。故に糧食給せず、士卒漸やく勞る。此時國王昭平壤にあり。使を明に發して援兵を乞ふ。適〻遼東巡撫郝傑また明王に奏して朝鮮を救はずんば、倭遂に遼東より北京に入らんとすと云ふ。北京の朝廷群議囂々たり。或は兵を遼東に出して國境を守りて、鷸蚌の爭を傍觀すべしと言ふあり。或は浙江・直隸・福建の水軍を集めて、直ちに日本を衝くべしと言ふ者あり。兵部尙書石星主として援兵を發するの說を持し、一面陸兵をして、一面沿岸諸國に命じ、水軍を集めしめ、以て日本を衝かんと欲す。援兵未だ至らず、王の從臣驚恐する事數時、遂に王を奉じて咸鏡道に逃れんとす。尹斗壽之を排すれども聽かず、先づ寵臣をして出てしむ。市民之を見て憤激して曰く、汝等平生金衣玉食して今則ち國を誤り、已に敵を禦ぐ能はず、また王をして我を捨てしめんとするかと。囂々嘖々刃を揮うて宮門を塞ぐ。昭、力めて之を排して平壤を出づ。尹斗壽・金命元、猶一萬人を以て平壤を守り、沿岸一帶に營を作り、舟を奪つて悉く北岸に集む。一夜金命元江を隔てゝ日本軍士の倦怠せるを見、宗義智の營を斬つて之を斃し、また長政の陣に及ぶ。已にして全軍悉く起るや、命元敗走、流を亂つて走る。行長

李舜臣の船舷上錐を植ふて攀づる能はざらしめ、銃眼を穿ち、銃士船中に藏れて狙擊す、之を龜船と云ふ。

等之によつて初めて淺瀬の在る所を知り、長驅進擊遂にまた平壤を取る。

秀吉援兵を發す、行長明軍を破る、諸將の不和、兵力足らずして秀吉泣く

行長書を朝鮮王に與へて其出師の意決して朝鮮を蠶食せんと欲するにあらざるを辯じ、また人を京城に遣はして秀家に謂はしめて曰く、平壤より以北、一の鴨綠江あるのみ、江を渡れば則ち明地なり。請ふ速かに大兵を發して繼いで至れ、全軍長驅して明に入らんと。諸將朝鮮未だ全く服せざるを以て、明に入るを難ず。則ち使を發して援兵を秀吉に乞ふ。秀吉乃ち增田・長束・石田以下十一將に、五萬六千人を附して朝鮮に入らしむ。此時に方りて、明漸く援兵の議を決し、其總兵官祖承訓をして、遼東の兵五千人を率ゐ、參將郭夢徵・戴朝辨、遊擊史儒・王守官と共に朝鮮を救はしめ、先づ史儒をして發せしむ。朝鮮王李昖、其至るを望み、狂喜、感泣、其馬を下りて史儒を拜して曰く、弊國の存亡大人の肩にありと。史儒傲然として曰く、憾むらくは平壤を救ふに及ばざりしをと。已にして祖承訓至るも、義州に止つて敢て進まず。朝鮮の斥候誤つて報じて曰く、倭兵多く京城に退くと。承訓之を聞き義州を發して平壤に向ふ。道に土人に問うて曰く、倭兵退きしか。土人曰く、未だし。承訓天を仰ぎて大笑して曰く、倭兵退かず、是れ天、我をして功を爲さしむるなりと。則ち疾く兵を進む。史儒先鋒たり。順安より馳せて平壤に至り、風雨に乘じて城壁に潛み、翌曉齊しく鼓譟して進む。事不意に出で、平壤の市門鎖されず。且つ行長正に中和に築かんかためめ、兵士を發し、城中にあるもの多からず。諸將甲を環せずして短兵接戰す。此時承訓の兵多く遼東の騎兵にして、平壤道狹く、馳突に便ならず。日本軍士、巷衢の要衝によつて要擊し、擊つて史儒・戴朝辨・張忠・馬世隆等を殺す。承訓大敗して走り、死するもの二千餘人。已にして黑田孝高、秀吉の命を奉じて京城に入り、諸將を會して相議して曰く、明の先鋒敗れて還らば、大軍再び至らん。宜く此城を修築して死守せざるべからず。また平壤より京城に至るの通路、等しく城壘を築きて備へざるべからずと。行長曰く、明人已に其膽を落す、再び鴨綠江を越えて來らざるや必せり、患ふるに足らずと。遂に從はず。此時に方りて、石田三成・增田長盛・大谷吉繼監軍たり。三人共に行長の親友たり。行長已に電擊雷馳して平壤を取り、功勳最も大なり。諸將其功を嫉みて助けず、監軍の之と私するを疑ひ、軍氣漸く怠る。而して諸將、朝鮮を衝くや、疾風の如く當る所摧けざるなしと雖も、撫安防備は其長所にあらざるが爲、禽奔獸散したる韓人、所在相集つて土寇を起す。是より攻勢變じて守勢となる。且つ藤堂高虎の敗、來島通泰の死の後、李舜臣、日本水軍の落弱を欺き、進んで見乃梁に來りて、日本より朝鮮に至る水路を斷せんとす。脇坂安治之と戰つて勝たず、船舶悉く其の燒く所となり、二百人の兵士島上にありて歸るを得ず。加藤嘉明・長曾我部元親も、亦之を救うて大敗す。已にして北方の寒威漸く強く、糧食益々乏しく、軍氣沮喪す。且つ征韓の師初めて出づる者十萬、後

此時小早川隆景は全羅道を徇へ、少壯、氣ある士人を、兵となし、衣服を變じて弓矢を取らしめ、內地の叛亂を鎭撫せしむ。

に援兵として出づる者五萬なりと雖も、處々の城邑を鎮壓するの要あるがため、前進して明軍と戰ふに足るものは、行長・清正に屬する二軍のみ。秀吉、内にありて日夜、家康、利家と議を交へて兵を增さんとするも、十萬は如何にしても京畿の守護として存せざるべからず。十萬は如何にしても肥前大營の守護として存せざるべからず。此外國力を盡くすも以て朝鮮に入らしむるの兵を出すの策なし。快活高朗、曾て泣かざる秀吉も、談此に及ぶや切齒扼腕して泣くに至る。未だ明の大兵に接せずして形勢漸やく非なり。

明史記事本末によれば、大同江以南日本に興ふるの約ありと云ふ。

秀吉明主との約

北京の狼狽、沈惟敬、行長と和を議す

日本の國力、内に勞るゝ事此の如くなるに方つて、北京の朝廷もまた實に狼狽を極めたり。石星初め、日本の力を圖らず、其急進電馳、此の如く一ヶ月を出でずして、早く平壤を取らんとは信ぜざりき。已にして祖承訓大敗の報を聞くに至りて、始めて事態の容易ならざるを知り、銀一萬兩、伯爵を懸けて能く日本と戰ふものを募る。然れども一人遂に應ぜず。則ち外交の術によりて、日本の兵鋒を緩うせんとして遊說を善くする者を募る。時に明人倭寇に加はつて日本に來往して情僞を知る者あり。浪士沈惟敬功名を希ひ、之に從ひて日本の情僞を知る。石星之を招き策を問ふ、惟敬曰く、秀吉を屈する名號を以てすべきのみと。石星則ち惟敬を神機三營遊擊將軍と平壤に至つて行長と會して和議を談ぜしむ。行長曰く、明人詐多し。若し約する所天地に誓つて變

一和平約無相違者不可有地變也遼東、縱然賢明日本之帝皇之妃女備大明國可迎合來依間絕斷商船、及一切禁止貿易之事、海禁未開、此時有改往之年、官船、一艘有大明使臣之本來好可兩國不朝貢之變更日本之使者、五旨通商、

一晉於朝鮮國家之事、宜安百姓、今朝鮮國道王子、爲前驅伐對者、將不此姓目、難彌前驅人口通之子、投件、可八鮮、遂領、鎮眞國人口投之也、實、一、餘投前朝、以逆意納眞國好鮮國差王、爲又城分、意納國人也、三、日、國明顯、朝鮮、朝鮮人人人一員前年有王、海一事兩朝者、四、然四、興不年、遂道之之、朝鮮四、附爪、從朝鮮四、

ぜずんば、之を太閤に奏して和を議せんと、惟敬惟々諾々す。時に三監軍赤平壤にあり、行長之と議して條件を呈出して曰く、明主の女を以て日本天皇の皇妃たらしむべし。朝鮮を分割して其四道を日本に與ふべし。朝鮮の二王子を還すと雖も、一人を日本に送りて永住せしむべし。日本、明と和好する、舊の如くなるべし。朝鮮の太政大臣をして、入つて日本に質たらしむべし。朝鮮をして日本に服せしむべしと。惟敬、皆諾す。行長則ち五十日を以て休戰の期となし、此間に北京の批准を取らしむ。

朝鮮の土寇起る、愛親覺羅の族、朝鮮を助けんとす、李如松、平壤を取る、明軍の大敗

此時に方つて日本の諸將、朝鮮全國に散在して土寇を防ぐに汲々として、平壤以北に力を及す能はず。故に朝鮮の諸將、休戰を幸として多く亡命を招き敗兵を集む。行長約を守つて之を攻めず。而して北京にあつては石星、銳意兵備を整へて、遼東一帶の地守備を有せざるの地なきに至る。此時、朝鮮會寧府に接近する寧古塔の夷種、愛親覺羅氏漸やく大に、傍近の部落を併呑して、文祿元年に至り其主奴爾哈赤、長白山北、鴨綠江の地を略有し、數ば朝鮮を窺ふ。今や朝鮮の危急に瀕せるを見て、使を發して援兵を出さんことを云ふ。朝鮮其禍心を察して之を拒む。愛親覺羅氏は他日の清朝なり。此の如くして行長が惟敬に約する五十日は經過せり。然れども惟敬來らずして明の驍將、李如松其部下を率ゐて遼東に入る。如松は元と朝鮮の人、走つて明に入り、其舍弟、如柏・如楨・如樟・如梅等皆武人たり。如松先きに寧夏の叛亂を夷げて

一擊朝鮮國王、遂沈惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

世不鮮可沈惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

間可國可沈惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

書有王、擊惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

大之遂之、不惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

明如柏之、混惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

者唐此臣、國惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

使也文祿二年癸未六月廿八日、朱印

從來田三成の歷史多行石

等の惡西長

士小西

と侯

沈惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

故惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

に小行

惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

吉行

惟敬、行長、和を議す、明軍の大敗、

賊長

遣石

に

大名あり。今や五萬一千人を率ゐて至る。是れより先き行長韓人を用ひて諜者たらしめしに、韓將之れを執へて殺せしかば、敵軍已に義州に入るも、行長之を知るを得ず。已にして文祿二年正月二十六日李如松の先鋒急に進み、行長の斥候二十騎を執ふ。二騎逃れて之を行長に報ず。之より先き平壤より京城に至る間に、七城を築き、大友義統・黑田長政・久留米秀包・小早川隆景・吉川廣家、兵を分つて之を守る。行長等則ち急を大友に報じ、遞次相報ぜしめ、二萬八千人を以て平壤を守る。已にして李如松二十萬の大軍を率ゆと聲言して平壤を攻む。時嚴寒に際して供給意の如くならず、防戰二日にして城中の死者千六百人に達し逃遁するもの相繼ぎ、存する所六千人のみ。首を擧げて援兵を待てども至らず。則ち議を決して城を捨て、大同江の氷を踏み、京城を望んで退き、大友の營に至れば疾く逃れてあらず。諸將風を望んで京城に退く。獨り小早川隆景、開城を守つて動かず、必らず李如松と戰はんと云ふ。秀家等人を遣はして百方之を說く。隆景則ち京城の先鋒たらんことを約して京城に退き、南大門の外、碧蹄館に陣す。已にして李如松勝に乘じて進み朝鮮の士兵また其後に屬し、大軍京城に迫る。諸將或は壁守せんと欲す。立花宗義主として野戰を主張す。戰は小早川隆景・黑田長政・毛利輝元・立花宗茂によりて開かれぬ。野戰は明兵の長所にあらず。李如松の兵少しく靡くや、浮田秀家以下の全軍之に乘じて明兵を斬ること三萬八千人、李如松大敗し傷を負うて平壤に走る。

和議再び起る、秀吉の意氣衰ふ

如松已に敗走すと雖も、日本の軍士も亦漸く糧食の乏しきを苦しみ、浮田秀家、主として京城を捨てゝ釜山に入らんと主張す。加藤光泰、之を駁して曰く、今加藤淸正・鍋島尙重、北邊にあり。之を捨てゝ退かんとするは國辱の大なるものならずやと、秀家曰く、糧盡くるを如何せん。光泰曰く、糧盡きなば砂を食はんのみ。余初め足下を敬稱して中納言殿と云へり、若し强ひて退かば中納言權兵衞と云はんと。已にして加藤・鍋島も亦圍を脫し、土寇を破りつゝ來會し、また少しく敵の糧食を得たりしかば、退軍の事も行はれざりき。此より先き惟敬、已に行長の條件を諸すと雖も、北京の朝廷が、果して之を諾するや否やを知らざるを以て、將士の間に遊說す。諸將士皆決して地を割くべからざるを言ふを以て、期を失す。今や李如松大敗してまた起たざるを見て、則ち頻りに誇張して、北京を動かし、また行長と和を議せんことを促がす。行長、時に京城の附近龍山にあり。浮田秀家・增田右衞門・石田三成・大谷義隆・小早川隆景等と議して、惟敬の和議を秀吉に通ず。此時に方つて、秀吉の弱點は現も明白に現はれ來りぬ。彼は家康の如き强固なる意思を有せず。智力の湧く所に任せて縱橫すと雖も、然も堅忍の力を缺けり。彼が北條氏政を攻むるや、僅かに五ヶ月の征戰に倦みて歸らんとす。その銳利なる智力に伴ふべき强固なる意志を有せず成功の連續するに方つてや、翻々揚々として止る所を知らずと雖も、蹉跌一たび來るや、彼長く之に堪ふる能はざるなり。彼

は何人よりも已に久しく外征に厭けり。而して彼また秀家が大將の器にあらざるを知りながら、德川家康を以て之に代ふるの危險を見たり。家康を外にしては、一の蒲生氏鄕あるのみ。併も氏鄕が已に與へなば、容易く之を征服すべしと云へるを聞きて悅ばず。老年は無限の大望と快活の精神とを衰弱せしめ、衰弱は猜疑と倦怠とを生じ、彼をして行長等の和議を聽かしめて曰く、朝鮮大明に猛威を振ふも益なきことにして上下莫大の費に堪へず。宜しく明使の請ふ所を容るべしと。此の如くにして文祿三年五月、明の媾和使參將、謝用梓・副使、遊擊、徐一貫、名護屋に來る。秀吉は大饗應を爲せり、彼等は明、日本と和し、同盟軍を起して韃靼を擊たんと云へり。秀吉の尊んで得ざる寶物は、何物なるかを問うて、歸つて必ずこれを秀吉に贈らんと云へり。秀吉遂に行長等が初め呈出せる條件を基として、和を講ぜんことを明に通知し、增田・石田・大谷・小西の四人をして其局に當らしむ。已にして明使去るや、秀吉將士と共に假裝會を名護屋に催して歡を極め、樂を盡くして、また朝鮮のことなきものゝ如し。蓋し、秀吉意滿ち氣驕り、年邁き、老重なり、小罪に盛怒を發し、小蹉跌に心を惱まし、其腦力はまた昔日の秀吉にあらざるなり。小兒の死によりて適〻憤を發して外征の師を起せしに、今や寵姬淺井氏また第二兒を生まんとするに至りしかば、家鄕蟄居の念融然として生じ、千里遠征の大氣魄何時しか已に衰へたるなり。

*秀吉、農夫となりて瓜を賣り、家康はあしが賣となる、秀勝は潰瓜を賣り、織田常信は僧となり、前田利家は高野僧となり、蒲生氏鄕は茶賣となりて、茶や秀吉に賣りて、高價を貪り、侍女藤堂、婢女となり旅店の戲る。

日、明兩國兵を退く、朝鮮抄掠の爲に衰ふ

本國に於て惰氣の起る已に此の如くなれば、惰氣遍く朝鮮陣の諸將に渡り、三軍監、兵を釜山に退けて和議を決するを待たんと云へば、已に疲勞し已に糧食なき諸軍、一人、異議を唱ふるものなし。然れども土寇明兵の後を追はんことを恐れ、小早川隆景の策により、火を王城に放ちて灰燼とし、敵をして據るの地なからしめ、煙に乘じて大軍一時に釜山に退く。之より先き日本軍隊の進むや、約束嚴束にして抄掠少かりしが、其歸るや、劫奪抄掠太だしく、大石巨木をすら拔きて歸るに至る。已にして釜山に歸るや、兵を近傍に分つて十六城を築き、また晋州城を圍みて之を取る。此時、朝鮮王昭開城府にあり。李如松、京城にあり。此報を聞きて沈惟敬を責む。惟敬則ち小西行長を責む。行長惟敬を罵つて曰く、兩國和を講じて撤兵せんとするに、明兵獨り進軍するは何ぞ。獨り晋州を取るに止らず、不日兵を進めて京城に入り、破約の明兵を攻めんと。惟敬則ち如松に說きて、兵を引いて遼東に歸らしむ。如松の兵沿道處々劫掠を恣にす。朝鮮は南方已に敵人日本のために抄掠せられ、北方また友國明兵のために奪掠せられ、之より財寶重器地を拂つて空しく、二十九ヶ月間の蹂躪によりて生じたるの傷痍は爾後一百年を經て猶ほ癒えず。

秀賴生る、秀次殺さる、淀君出づ

之より先き文祿二年八月秀吉の妾淺井氏秀賴を生む。秀吉大に喜び之を立て、嗣となさんと欲す。然れども關白秀次、殊に之を讓るの志なし。秀次は秀吉の異父妹、智子

の生む所にして秀吉の養つて子とせるものなり。秀吉の征伐に從つて數ば功ありと雖も、秀吉の大材なくして其驕縱を有し、少小富貴を極めしがため、兇惡の習を得、將士の怨を買ふもの多し。秀吉、之をして朝鮮に入り秀家に代らしめんと欲して諷するも、風波を厭うて敢へて從はず。已にして秀頼生るに及び、功を希ふの臣、淺井氏と秀次の間を讒する者あり、秀次意を秀吉に得ず、不平勃々、酒を被つて益々兇惡に陷り、手から近臣を刃し、城上より市民を擊殺し、或は胎婦を割かんとするに至る。淫荒度なく、右大臣晴季の女一たび嫁して寡居するを娶り、また其先夫によりて生む所の女を納れ、母子並びに寵し、其他公卿諸侯の子女の美なるものを漁し、寵姫の多き數百人に至る。秀吉之を惡みて之を廢するの意ありと雖も、之を云ふを憚る。已にして秀吉、大阪を秀頼に與へて伏見に隱遁せんとして大に伏見に築き朝鮮及び名護屋に一部の軍を屯せしめ餘は悉くこれを召還して伏見の土木を助けしむ。秀次之より深く危疑し、兵を集めて自ら守り、諸侯の親近なる者に迫つて曰く、太閤歿するの後と雖も、必らず秀次に叛くなからんことを誓へと。毛利輝元、其書を獻ず。秀吉乃ち人を遣はし、秀次を執へて之を高野に放ち、後追つて自殺せしむ。時に年二十八。其子女妻妾三十四人、皆殺さる。其墓に題して畜生塚と云ふ。時に淺井氏淀の別邸に居る、世に淀君と云ふ。秀次死して、秀頼關白たるべきを見るや、天下の將士爭つて淀君に仕ふ。是より淀君の權漸く大なり。

沈惟敬の詐僞露はる

慶長元年六月、明使揚方亨・沈惟敬、明主の批準を携へて至る。朝鮮の使者、黃愼・弘朴長また隨伴す。秀吉朝鮮の使者を責めて曰く、我已に兵を朝鮮より班して朝鮮猶ほ未だ地を割かず、是れ約に背き我を欺くものなりと。遂に之を見ずして唯だ明使を見る。之より先き沈惟敬單身名護屋に來りて王者の用ふべき衣冠・地圖・武經・駿馬三百を獻ず。秀吉明の使者を見るや、自ら惟敬が送る所の衣服を着け、列侯をしてまた之を着けしむ。此くて明の使者進んで國書を呈するや、秀吉、僧承兌をして之を讀ましむ、書中『玆特封爾爲日本國王』と云ふに至り、秀吉激怒、驟かに顏色を變じ、其衣服を脫し、國書を奪つて地に擲つて曰く、日本我掌中にあり、王たらんと欲せば王、帝たらんとせば帝、何ぞ外奴の封を待たんや、と遂に明使を追うて國境の外に出でしむ。惟敬、秀吉の呈出せる條件の外、明王の地歩を占めんがため、且つは秀吉を悅ばしめんがため、封冊の一事を加へて却つて事を破りしなり。而も猶ほ北京を欺かんがため、道に奇器珍寶を買うて之を明主に奉り、秀吉悅んで封冊を受け、謝恩として奉る所と稱す。後事露れて獄に下さる。

再度の外征、諸侯功なし、秀吉病み得て死す、諸侯の紛爭

秀吉の大志は再び激怒のために喚起せられぬ。慶長二年二月、復た兵を起して朝鮮を擊つ。浮田秀家・毛利秀元大將たり。前役の諸將多くこれに屬す。兵集るもの十六萬一千九百人。先づ使を發して、朝鮮王を責めて曰く、速に地を割く事約の如くせよ

と。また小西・加藤の兩先鋒に言つて曰く、此行若し功なくんば汝等の妻子を磔殺せんと。朝鮮王之を聞き急に使を明に發して援兵を乞ふ。明則ち楊鎬・麻貴・劉挺等をして之を救はしめ、且つ沈惟敬が敵國本國を幷せ欺けるを怒り、之を罪せんとす。惟敬恐れて行長に降らんとして、明將、刑玠の爲に捕へられ、則ち其部下をして明軍の情僞を行長に洩らさしむ。行長之によりて策を立て、先づ朝鮮水軍の將、元均を誘うて之を破り、兵を進めて南原を取る。黑田長政また明將解生を全義館に破る。京城震驚荷擔して走る。然れども此役は征戰の性質已に惡戰なり。諸將の前頭には大明侵略の希望ありて光輝を放つにあらず。唯だ敵を破りて憤を霽らさんとする者多し。故に其土民の服從せざるもの前役よりも甚しく、戰鬪に大經略なきや前役よりも甚し。且つ前役に方つてや明兵の來る、行長平壤を取りし後にあり。今や明兵已に朝鮮の中心にありて、日本兵の未だ京城に近かざるに先つて、南下し來る。加ふるに朝鮮水軍の將、元均已に行長の破る所となりしと雖も、李舜臣猶ほ在り。李舜臣は初め元均に讒せられて軍柄を失せしが、今や元均の敗によりてまた水軍を指揮す。彼は最も日本水軍の弱點に通じ、且つ水軍によりて日本の糧道を絶たば戰はずして之を屈すべきを知るものなり。則ち盛に水軍を放つて對馬・釜山の間を抄掠して兵糧を奪ひ、菅正隆を錦島に攻めて四千人を殺すに至る。加ふるに朝鮮は前年の兵亂により井邑荒敗せしかば、糧食を得べからず。故に日本兵已に南原を取つて

京城に向ひながら、また徐ろに兵に引きて釜山近傍に歸り、持久の策を畫せざるべからざるに至り、行長順天にあり、淸正蔚山にあり、其他の諸將を分つて、尙州・梁山・密陽・大丘・金海・東萊・泗州の地に陣せしむ。是より明兵益〻勢を得て南下し來る。其兵凡そ十四萬人と稱し、刑玠總軍を領し、李如梅左將軍たり。李芳春、解生右將軍たり。朝鮮の將士皆之に屬し、進んで蔚山を圍み、兵を梁山に出して、釜山との交通を絶つ。加藤淸正・淺野幸長等蔚山にあり。孤城堅守、馬肉を食ひ人溺を飲むに至り、僅かに釜山・順天の援兵を得て免るゝを得たり。此他、小西行長は順天を守りて劉挺と對抗し、島津義弘は、新塞に茅國器等の大軍を破りて二萬人を殺し、藤堂高虎・九鬼嘉隆・脇坂安治等濟州島に明の水軍の將、陳隣を破ると雖も、局面を一變するに至らずして、殆んど守勢に立ちぬ。此の如くして慶長二年も暮れて三年となるや、秀吉の心身益〻衰へて外征に倦み、使を發して、秀秋・行長・淸正・義弘・幸長等、十餘將十萬人を朝鮮に止らしめ、餘は皆召還す。慶長三年六月、秀吉、伏見にありて病を得、時に年六十三。秀吉の世にあるや、天運人事一として彼に幸せざるはなく、彼れ自ら天の寵兒と信じ、何ごとをも爲し得ざる事なきを信じたりき。然れども彼が爲し得ざるものは二あり。即ち明の征服なり。早く子を得るなり。若し彼をして壯年にして子あらしめば猛臣謀將をして之を守らしめ、天下を諸侯の權力平均の上に据ゑて晏然として死すべかりしなり。然れども彼れ晩年迄も子を得ず。

慶長九年、家康大久保長安の策により、東海・東山・北陸の三道に、一里塚を作らしめ、六十間を一丁とし、六丁を一里とし、三十塚上に榎を植う。是れ織田信長が其領邑中に行ふ所なりしたるもの也。

其病を得て死の近きを知りし時は、秀頼の年僅かに七歳。以て人を率ゐるに足らずして、人に率ゐられんとす。加ふるに秀吉の正妻杉原氏と妾淺井氏と交も權を爭ふ。而して淺井氏才色双絶、年齒また秀吉より若きこと四十一歳、深く新進の文官に結びて其力に頼る。故に新進の文官に快からざる舊諸侯は、自ら杉原氏の門に入つて淺井氏を疎んずるに至りぬ。是より諸侯文官の間、正妻黨と妾黨とを生じ、更に之を區分すれば、文官黨と武官黨となり、才華自ら進む者と、勳閥によりて自ら立つものとなる。是れ何の時代も、世漸く治平となるや、必然生ずる所の現象なり。而して秀吉は、心身漸く疲勞したる時、此現象を見、思へらく群侯相爭ふの結果、天下再び亂れて、秀頼長く其位を保つ能はず、顚覆の禍足利氏の如くならんと、則ち諸侯を會して淺野長政・前田玄以・石田三成・増田長盛・長東正家の五奉行をして之に諭さしめて曰く、列侯群臣、交も疾爭して相傾覆せんとするの狀あるを見て、余が心實に憂へて息まず。宜しく宿怨を解きて、互に幼主を輔佐すべしと。然れども諸侯は實に多く此五人と爭ふものなり。固より服せずして曰く、幼主を奉ずるは謹んで命を奉ぜん、宿怨を忘るるは則ち能はずと。五人入つて之を秀吉に報ず。秀吉默然、暫らくして之を家康に託す。家康出て、聲色を勵まして諸侯を責む。諸侯則ち誓つて怨を忘れんと言ふ。秀吉之を聞き大勢已に德川氏に歸せんとするを見る。然も天下の大亂を憂ふるの公義と秀頼の安全を希ふの私情とは、秀吉をして、家康に謂はしめて曰く、余死せば國難必らず起らん。今天下を以て足下に附す。請ふ、心力を盡くして太平を謀れ。秀頼長じて後、其材能立つべくんば立てよ、癈すべくんば癈せよと。然れども秀吉は劉備にあらず。家康は諸葛亮にあず。家康辭して曰く、家康は其器にあらずと、強ふる再三、固く辭して受けず。秀吉之を三成・長盛に告ぐ。二人曰く、殿下獨力天下を征して大業を創む、何ぞ一旦之を他人に附すべけんや。殿下の遺孤の爲死せんとする猛臣謀將、雲の如く、雨の如し、後事憂ふるに足らざるなりと。秀吉之を頷き、更に片桐且元・小出吉政をして秀頼の傅たらしめ、且つ言ふ、天運を恃む勿れ、天運は人事にあり、人心苟も與みせば、天下の大も恐るゝに足らず、決して秀頼をして我名を恃みて家康と隙を生ぜしむる勿れと。彼れ已に天下の畢竟、家康に歸せんとするを察したるなり。併も猶ほ其子の安からんことを欲して、秀頼を前田利家に託し、外征の收局を三成に託し、則ち家康・利家・景勝・秀家・輝元の五人を年寄と稱して、國家の大事に當らしめ、五奉行をして小事を決せしめ、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴の三人を中老として、年寄奉行の間を調停せしめ、また諸侯をして相誓はしむ。曰く秀頼に仕ふる太閤の如くなるべしと。曰く、從來の法令を守り、政事は多數の議に從ふべし。曰く、互に私怨を捨つべし。曰く、徒黨を立てず、爭議あらば親戚朋友及び秀頼の親近者と雖も、法を枉げずして之を匡すべし。曰く、所領增減等の事は秀頼の生長して事を見るを俟つて改變すべし。曰く、秘

機を洩らすなかるべしと。五年寄をして各〻五奉行に誓はしめ、五奉行をしてまた五人に誓はしめ、遺命終るや、則ち曰く、十萬の師をして海外の鬼たらしむる勿れと。八月十七日其の曾て尼孝藏主に與る所の歌を取り自ら花押を書し、半ばにして遂に歿す。歌に曰く、『露と起き露と消えぬる我身かな浪花の事は夢の世の中』。智力博大、止る所を知らず一世を籠蓋して猶ほ足ることを知らざる英雄も、興亡古今の事を思うては、遂に英雄の一身、渺たる滄海の一粟に等しきを感じ、恰かもナポレオンがエルバ島に人生の奥義を悟りたるが如くなりき。

外征軍歸る　三成、名護屋に至りて、遙かに遺命を傳へて朝鮮の諸將を召喚す。諸將潛かに行李を治む。福建巡撫謀して秀吉の死を知り、之を北京に奏す。明主大に喜び命を朝鮮の諸將に傳へて、日本兵を追擊せしむ。秀秋先づ釜山の軍を拔いて歸り、清正・義弘、繼いて兵を收めて發す。行長また順天より歸らんとするや、劉綎兵を進めて之を圍む。清正・義弘歸つて行長を救うて舟に上る。明韓の水軍其全力を盡くして行長等を追ふ。清正先づ去り、義弘且つ鬪ひ且つ退く。敵軍銳を盡くして行長を圍む。行長奮擊して之を破り、鄧子龍・李舜臣を殺す。已にして力盡きて、島嶼に上り。敵寨を奪つて之に據る。義弘適ま來つて之を救ひ、擊つて敵將を殺し、遂に名譽の退軍を爲しぬ。斯くて十一月を以て、諸將皆名護屋に至るや、三成、秀吉の遺命を宣ふ。諸將皆泣あり。然れども秀吉追懷の涕は、須臾にして乾かざるべからざるものありき。

第二十四章　徳川氏霸權の確定（神武紀元二千二百六十一年より二千二百六十五年に至る）

徳川家康の人物及び地位

凡そ日本歴史ありて以來、人物の輩出せるは元龜・天正時代を以て其頂上とし、殆んど支那の六朝五代の如きものありき。而して之を平定して統一せるは秀吉なりと雖も、秀吉勳閥あるにあらず、力征と氣象と智力とを以て壓服したるのみ。英雄豪傑固より甘んじて其下風に立つも彼等は秀吉の個人的力量に服したるのみにして、其家に服したるにあらず。故に秀吉一度去るや、中原の鹿は復彼等の競取力爭に附せられたるものと信ずるなり。而して當時彼等の中聲望最も高き者を德川家康とす。家康は多年武田・今川の豪族に挾まりて、攻戰鬪伐寧日なく、流離艱苦を極めしが爲、其意志堅實にして冷靜、些しの小說的感情なく、成敗利害の打算、殆んど寸毫を差はず。彼れ曾て其子孫を戒しめて曰く、世人金銀の貴きを知らず、鐵なかつせば禍亂何によりて治まらんと。彼は實に鐵の如くなりき。一度戰に臨むや直裁鋭進、前に敵なきが如し。彼の天才は之を其父より受けたり。然も彼の堅實鐵石の如き意志は、之を信玄に學び、膽氣直裁の風は之を信長に學びぬ。彼は小國を以て敵を四方に受け、民政に注意して土田を拓き、寸々尺々を伸ばさゞるべからざるが爲、周到緻密民を憐みて之を助長せざるべからざるを解したる政治家となり、農・工・商を以て武將の三實となせり。秀吉は信長に屬して、早く天下の勝地を占めしが爲、土地を割き財物を與ふる糞土の如くにして、其大を好むの心を以て諸將倦くなきの心を鼓舞して之を用ひたり。然も其賞功は人に存して子孫に存せず。家康は彈丸黑子の地に起り强國に挾まれて、土地財物を得る容易ならざりしが爲、恩威を以て部下を統べ氣節を勵まし、且つ其人を取るのみならず、又其家門子孫を取りて心を安んぜしめ、譜第恩顧の士なるものを作ること、恰かも賴朝が天下の諸豪を家人とするが如くなりき。然も秀吉が諸將倦くなきの心を蔵して、之を用ふるに反して、其部下を戒飭して謹愼節慾せしめて之を用ふ。彼曾て其部下に教へて曰く、五字七字の秘傳ありと。部下之を問へば則ち曰く、『上を見な』『身の程を知れ』と、此の如くして彼は其部下をして族人の一大集會の如くならしむるを得たり。彼は沈毅にして老成、堅實にして大膽、殆んど意志の化石したるが如く、平和に於ても一等、戰鬪に於ても一等なる人物にして、正しく秀吉が智力に任せ成功に乘じて、擴充せる大業を收拾すべき天分を有したりき。然も彼は信長の磊落なく、秀吉の開爽なく、一點の色彩の人を眩惑するものなく、一個の魔力の人を魅するものなく、其爲す所陰險なるが爲、成功すれども人に解せられず、其行ふ所冷刻なるが爲、勝利を得れども、人に歎賞せられず。成功と勝利とは、適〻以て人に厭惡せらるゝの基な

いかに私體の者にても、宗旨をかへぬに於ては、首を切ぞとの御意の下にて、男立の御意中、御主樣のの上ゆるすと、御遊戯に被遊候樣、一向宗に罷在べきやうは無御坐に付、前の淨土宗に可罷成旨申上候に、鬼角の御意は被成御わらひ被遊、彼成役坐に候か、其後段段と御念頃に被召仕候右の又四郎、我等儀も大體となり、中々つなきが、殿樣事は御腕先に出合ひてはなきぞと物申候に

りき。彼の容貌風采趣味は彼の人物を代表せぬ。短身にして肥大なるは其骨格なり。醜劣にして品格なきは其容貌なり。拙劣蔓草の如きは其文學なり。咄々唖の如きは其辯なり。然もその戰場に立つて采配を振るや、其聲音雷の如く十七八町の外に聞え、恰かも摩利支天の地より生えしが如くなりき。彼は物を惜む事、殆んど吝嗇翁の如き者ありき。然も與ふるの取るが爲なるに方つてや、天下の半ばも惜まざるなり。彼は色を好むこと秀吉よりも甚しかりき。然も彼は肉欲家のみ、秀吉の如き小說的戀情を有せざりき。彼早く秀吉が天下を一統すべきを信ずれども、其武を示さずして和するは永久の屈伏なるを知り、一度戰つて之と和し、長く客將の地を占めて畏敬せられき。然も秀吉の浮誇を知るが故に、之に仕ふる恭敬にして、曾て其誇榮心を傷けざりき。彼は秀吉世にあるの日、其武力と富と、膽氣と聲望に於て、已に秀吉の後繼として信ぜられき。今や秀吉死す。天下の大勢は自ら此冷酷なる鐵石漢に歸せんとしつゝありしなり。

家康の敵手

然も當時の英雄は、皆彼の如く、能く屈するを知るものにあらざりき。前田利家は其の封土の大、士馬の銳、人物の信用あるを以て、秀吉の附託を受け、秀頼を奉じて家康と拮抗し、毛利輝元また中國の大を恃みて家康に降らず。浮田秀家もまた秀吉の信任を得たるを恃みて、家康に下らず。然も彼等は、多く武將にして、家康と相下らずと云ふのみ。未だ自ら主動の地に立ち、家康と鹿を中原に爭ふの膽氣、識見を有せるものにあらず。眞に家康と相爭はんとするものは石田三成と、上杉景勝とのみ。

石田三成の人物及び地位

石田三成は近江の人、家貧にして少小觀音寺の僧に寄寓す。秀吉曾て狩獵して觀音寺に至り茶を求む。三成出でゝ之に侍し、初めは冷茶を進め、中ごろ暖茶を進め、終りに熱茶を進む。秀吉其慧敏を愛し、携へて歸り、左右に侍せしむ。時に歳十三。秀吉に從つて丹波を征するを初めとし、數ば征戰に從ひ、遂に近江佐和山の城主となり、十九萬四千石を領す。その人、才思湧くが如く、膽勇武將に越え、無限の執著力を有し、其事を爲さんとするや、經營慘憺、必ず遂げずんば已まざらんとし、秀吉の陰謀秘計多く其手に成る。彼をして初より身を武將の地に置きて天下の形勢にならしめしならば、彼は一大諸侯として重を天下に爲せしならん。不幸にして彼は武將の家に生れず、茶坊主を以て秀吉の幕中に入りしが故に、彼は帷幄の臣となりぬ。然も彼は、一日も其不幸を醫するを忘れず、帷幄の臣たるに滿足せず、必ず一大武力を備へずんば已まざらんとし、財を盡くして勇士を門下に集む。彼初めて近江の二萬石を領するや、一萬五千石を以て島左近を養ふ。左近は才氣勇膽の名あり、自ら負うて諸侯に仕ふるを肯ぜざるものなり。其他大谷吉繼・増田長盛の如き、皆三成の舊友にして、彼の推薦によりて諸侯たりしものなり。三成常に曰く、凡そ人に仕ふるもの其主人より

得る所を殘すべからず、また浪費して得る所より過ぐべからず。殘して畜ふるは盜なり、驕りて債を起すは愚なりと。彼は獨り口に之を云ふのみならず、又之を實行す。故に戰鬪の大功なく、多く文筆を以て進めるに似ず、其士馬精英、部下順服、恰かも譜第の如く、當時の大諸侯中、比類少なき者なりき。彼は固より家康に匹敵すべき偉大を有するものにあらず。然れども其の機才は以て木强無文の徒を糾合するに足るものありき。彼れ固より戰場の雄あらず。然れども其の政治の才は、諸侯宿將をして餘儀なく其下風に立たしむるに足れり。彼は固より正論諤々の士にあらず。然れどもその白刃の上を歩するが如き危險を犯して陰謀を畫するの膽氣は、殆んど鬼膽を破るが如きものありき。彼は敵に對しては極めて慘酷なりき。然れども味方に對しては信義を保つて變ぜず、約束に殉ずるの節操あり。此の如き人物は當時に稀有にして、諸侯中陰謀に於ては細川忠興、才略に於ては黑田如水の外は相類するものなかりき。彼は新進の身にして、多く武將の輕侮する所たるを知り、淺野長政・加藤清正・福島正則等の雄將、多く秀吉の正妻杉原氏に緣固ありて其の信を固むるを見て、其寵姬淺井氏に結託して其信任を固めしかば、益々宿將と相反目するに至り、鋭意宿將の力を殺がんとして、多くの陰謀を施して其敵手を退けぬ。然れども宿將の勢猶ほ盛にして獨力其怒に對する能はざるを以て、宿將の分裂に乘じ、黨與を其中に作り、此の如くして彼は一方には文權を代表して、武將と爭ひ、一方には新進武將を代表して、舊諸侯と相爭ふ。小西行長は武將中の彼の黨與なり。加藤清正と國を鄰り、最も相憎惡し、共に先鋒となりて功を朝鮮に爭ふ。已にして清正蔚山に明兵に圍まるゝや、行長順天より赴きて之を救ひ、行長順天に圍まるゝや、清正、島津義弘と共に之を救ふ。之より兩人の交情稍や熟し行長、清正に向つて互に其の宿怨を忘れんと云ふや、清正曰く、余も亦之を欲す。獨り子が三成と善きを如何せんと、遂に相合せず。已にして諸將、秀吉の喪に遇うて歸るや、三成之を勞して曰く、諸君伏見に至り少君を見て、各々國に就くべし。明年の秋、大に茶の會を催して相會せんと、清正冷然として答へて曰く、諸君內にありて茶事に熟す。余の如きは前後七年、外征に勞れて家貧し、以て諸君に報ずべきなし。諸君茶を與へなば、余は稗の粥もて之に酬いんと。清正は其の出身に於ても秀吉と親しく、其勳功に於ても宿將第一たり。清正已に此の如くして三成と惡し、故に豐臣氏の宿將多く三成を憎みて、陰險姦謀の徒となし、忠姦相排して黨を分つ。今や天下の權、豐臣氏を去つて家康に歸せんとするとき、忠實の名を以て自ら標幟する宿將之を傍觀して熱に就き勢に走る時、姦謀の名ある三成こそ、却つて豐臣氏の爲に家康と戰はんとす。

家康の擅私、三成等家康を責む、細川忠興三成の策を破る

之より先き、秀吉已に死するや、家康世變の決して遠からざるを慮りて、四方の形勢に注目し其の子秀忠をして走つて江戸に歸つて兵備を嚴にせしめ、

當時の江戸は太田道灌の經營せしものにして、城址充實せるもの多く、民戶市中に輻湊し、京阪の大都に比すべき繁榮を見たりき。家康の始めて關東に來れりし頃、人民の數は僅に五郎左衛門の屋敷に過ぎざりしが、後年に至りては、人口百萬に達し、町室の數、實に前代に倍したりと云ふ。今作り物開平の美觀を見ざること久しく、江戸の人士は、之を目して、「田舍者」と稱し、髮を剃り、目引頭巾を着し、巧みに奇異の古物を作り、小田原の漁夫の如き風俗を模倣して、「江戸ぶり」と稱せり。

また島津の一家と懇親を結び、増田長盛を訪ひ、長曾我部元親を訪ひ、新庄直頼を訪ひ、細川幽齋を訪ひ、遂に大膳にも諸侯私婚の禁を犯し、伊達政宗の女を其子忠輝に娶り、姪松平康元の女を子として福島正則の子正之に娶はせ、小笠原秀政の女を養うて子として、蜂須賀至鎮に配せんとす。秀吉の下にあつて、寧靜無爲を裝ひし家康は、今は徨々として、席暖まるに遑なし。何人も皆其異志を疑はざるはなし。此に於てか、三成主として大老奉行を糾合し、相連署して家康の異志を責め、且つ若し分疏明白ならずんば、十人衆の班より除かんと云ふ。家康服せず。異志ありとは何人の證によるか、請ふ先づ證人の名を聞かん、婚姻の如きは適々制禁を忘却したるのみと。兵を集めて自ら守り、其部下榊原康政・本多正信等一萬の兵を率ゐて、勢田・草津を塞ぎて東國より上る者を抑留すること三日、行人止るもの數萬人に及びて之を放つ。民衆京師に入るもの洪水の一時に至るが如く、風説して曰く、江戸の兵數十萬騎至ると。京師・大阪大に驚愕す。秀吉死して墳墓の土未だ乾かずして、家康專横背理の行あり。大老皆之を憤る。三成則ち前田利家を奉じて主となし、秀吉の寵姫淺井氏年猶ほ若きを以て、改めて利家に嫁せしめ、利家をして繼父たるの地位に立ちて、秀頼を助けて家康に當らしめんと欲す。新進の武將、文官多く之に同す。獨り加藤清正・福島正則・池田輝政・藤堂高虎・淺野長政・細川忠興・京極高次・有馬則頼・金森長近・黒田如水・同長政等之に服せず。一は三成に對するの憎惡嫉妬より、一は

大勢已に家康に歸するを觀望するより、家康を助けて利家に敵せんとし、各〻兵を以て家康を伏見の城に守る。此の如くして三成天下兩分の策、漸く成らんとするに方つて、私かに三成の策を破る者出て來りぬ。細川忠興是なり。忠興は幽齋の子にして最も縱横揣摩の才に長じ、木强の武人中最も公卿的陰謀の才あり。其父幽齋が足利義昭より移つて織田信長無二の從臣となりしが如く、忠興は秀吉の部下より轉じて、利家の親友となりしが、今や利家、家康と相鬩がんとするを見て、則ち周旋往來、利家と家康の間を和解せしむ。二人遂に和し、利家次で死し、三成其頼る所を失ふ。清正等の宿將擊つて之を殺さんと欲す。佐竹義宣三成と善し、則ち兵を發して三成を守り、家康に投ぜしむ。家康初め、三成を殺さんと欲す。本多正信之を諫めて曰く、彼をして生存せしめよ。天下の大亂を生ずるものは必らず彼ならん。彼こそ天下を德川に與ふるものなるべしと。家康これを許して其奉行職を奪つて佐和山に退かしむ。之より家康の勢全く成らんとす。慶長四年七月則ち諸侯に告げて曰く、余、秀吉に代つて庶政を裁す。宜しく國に歸り明年の秋冬を以て、また來會すべしと。諸侯皆國に歸り、家康大阪に移り、秀吉の夫人、杉原氏を西城より京師に移して自ら西城に入る。此の如く前田氏をして家康と相抗爭せしむる策は、已に細川忠興の爲に破られたり。秀吉の宿將已に恃むべからず。恃むべきは客將のみ。而して三成は客將中に於て、上杉景勝の最も恃むべきを見たり。

がたや正直捨方便
一卷に説給ふ
何々の此の
るぬしの娘に
子なりしに
本尊物おぞ
ら此じゆたい
代物二ずぞ
どもまけ貫れ
たばれ候ぞと
えたりおそ實
常のかしろに
の人むに絶
も雑談へば
事白の中に
を縄なの
云へ商人
へり誓ば
なり情不
更なり直
殊なるは
云へ猶質
事人朴
も情こと
朝鮮の師
明と和睦
にも、其實
あらず行長
ば成の力
功なし三
蓋成、此行
吉必ずか
せんと憤
なりつて
とこと早
云ふ憂へて

上杉景勝、直江兼續、佐竹義宣、三成に同盟す

三成の景勝を知るや、實に秀吉が越中より輕裝して越後に入りて強ひて會見せる時に初まる。當時、秀吉左右を退けて景勝と密談す。座にあるもの獨り最勝の權臣、直江兼續と石田三成とのみ。秀吉が景勝と談ずる所、外聞得て知らず。思ふに家康の地を賭物として景勝を招けるか。其後景勝、秀吉の爲に會津に移され一百二十萬石を領し、直江兼續、米澤の三十萬石を領し、士馬精強、輝虎以來の家名を落さず。景勝は輝虎の豪膽に加ふるに、更に一層傍若無人なる擅横の氣を以てす。彼は飽まで北人なり。其心性、叛逆的、冒險的にして、然も戰士的節義を重んじ、天下の大諸侯を睥睨す。秀吉は己の勢威を屈して、他の名勢を重んじ、孤劍飄然として來りて調和を求めしが故に、彼は之に屈せぬ。今や家康、天下の要衝に立つの故を以て、天下に號令せんとす。天下最も多く之に反撥するものは景勝なりき。加ふるに景勝を補助する所の直江兼續は、雄才大略、天下其比少なく、當時其材を比ぶべきもの、西南にありては黑田如水あるのみ。秀吉其材を忌みて之を景勝と別たんとして、別に封土を米澤に與ふ。彼は獨り雄才の士のみならず、また當時最も文學ある者にして、其詩文少からず。五臣註解の文選を印刻して暗黑なる文學界に一道の光を與へぬ。今や秀吉死して權力の平均また覆らんとするを見て、其主景勝を慫慂して、世變を窺はしむ。同氣相求め、同習相惹く。三成・兼續は天正十二年初めて相會せるを回顧し、石田・上杉の間に攻擊同盟は結ばれぬ。佐竹義宣また常陸を以て之に加はり、南北相應じて家康を攻めんとす。

三成の反間成らず、景勝兵を擧げ、家康之を攻めんとす

已にして家康其黨與の質を返し、領邑を增加し、益々專横の跡あり。三成等益々憤激す。三成、反間を放つて曰く、前田利長、加賀にありて兵を起さんとし、細川忠興もまた之に黨すと。家康兵を發して之を攻めんとす。忠興・利長質を納れて其他なきを誓ふ。長束正家・增田長盛、諸侯の交質は、法禁なるを云ひ、且つ江戸に送るの理なきを論ず。家康顧みず。已にして江戸の飛脚は、續々上杉景勝の異圖掩ふべからざるものあるを報じ來る。曰く、天下の浮浪を集む。曰く城砦を修む。曰く輝虎の二十三回忌を修するに託して、將士を會津に會して軍議を催すと。家康意を決して景勝を攻めて、力征を以て天下を服するの端を開かんとし、使を發して之を責め、且つ僧承兌をして書を直江兼續に與へて之を責めしむ。景勝服せず、兼續書を作りて承兌に答へ却つて家康を責め、冷語反詰の妙を極め、必ず家康を激怒せしめ、北征の軍を起すに乘じ、三成等をして事を中原に起さしめんと欲す。家康書を得て即日使を北方諸侯に發して、景勝攻擊の準備を整へしめ、慶長五年六月十六日、部署を定め、家康・秀忠白川口に向ひ、客將諸侯をして、皆之に屬せしめ、佐竹義宣をして仙道口より、伊達政宗をして信夫口より、最上義光をして米澤口より、前田利長をして津川口より、米澤に向はしむ。客將之に從ふもの淺野長政・福島正則・黑田長政・細川忠興・池田輝政・

蜂須賀豐雄・生駒一正・加藤嘉明・田中吉政・京極高知・筒井家次・藤堂高虎・九鬼守隆・眞田昌幸・幸村・山内一豐・有馬則頼等八十諸侯、兵數五萬五千八百人、家康の旗下二萬三千五百人。家康二十四日を以て下野の小山に入り、前軍の將秀忠は已に宇都宮に入る。

三成諸侯を糾合して兵を擧ぐ、家康躊躇す

家康の京を出でんとするや、三成に平ならざるもの皆之に從うて出づ。三成私かに賀して曰く、我事成ると。則ち其子を家康に從軍せしめんことを乞うて他なきを示す。家康固より三成が晏然として己に服すべきを信ぜず。然れども其陰謀速に成るべからざるを信じ、他の事變の起らざるに先つて景勝を夷平せんとし、鳥居元忠を止めて伏見を守らしめて曰く、萬一變起らば天主閣中の黄金を鑄て之を用ひよと。家康立つや、三成蹶起して使を四方に發し、徒黨を募る。大谷吉繼、未だ三成の陰謀を知らず、家康に從軍せんと欲して、三成の子重家を誘ふ。三成之に告ぐるに兵を上國に擧げて、景勝に應じ、南北挾擊せんことを以てす。吉繼其決して勝たざるを打算して之を止む。三成聽かずして曰く、此事、一身の爲にあらず。以て豐臣氏に酬いんと欲するのみ。成敗利鈍は顧みる所にあらず。且つ已に上杉と約して兵を擧げしむ。上杉をして獨り家康に當らしむるは忍びざる所なりと。吉繼遂に別を告げて去る。然も之を棄つるに忍びず、則ち復歸つて曰く、我一身を以て汝に與へんと。三成、遂に長束正家・增田長盛及び玄以の名を以て、毛利輝元を誘ふに元帥を以てせしめ、また兵を以て大阪の四面を守り、諸侯の質の國に逃るを防がしめ、三奉行の名を以て家康の十三罪を數へて、檄を諸侯に傳ふ。諸侯應ずるもの三十二人。毛利輝元・吉川廣家・毛利秀元・浮田秀家・島津惟新・小早川秀秋・鍋島勝茂・小西行長・脇坂安治・秋月種長を始めとして、其兵九萬三千七百人に達す。秀家の議により機先を制せんがため、兵を美濃・尾張に出して、家康の擧動を見んとす。輝元秀頼を奉じて大阪にあり、また兵を分つて細川忠興の父幽齋を田邊に攻め、家康の城代、鳥居元忠を伏見に攻む。幽齋は一代の歌人にして、歌學の奥義に達し、和歌を業とする公卿却つて幽齋に學ばんとす。天皇、幽齋が死して歌學も、また共に亡びんことを恐れ、兩軍に諭して交綏せしむ。元忠は固守して降らず、遂に敗れて自殺す。家康の後には此の如き變あり。家康の前には景勝、精兵を備へて俟ち、自ら徴服して白河附近の地を相して、革籠原を以て最後の決戰場と定め、家康の兵を此に誘ひ、家康を破らば其全軍を此に殲さんとし、景勝敗るれば上杉の全軍又此に死せんことを期し、矯矯として家康の來るを俟ち、また使を發して越後の遺族をして亂を起さしむ。佐竹義宣また陽に家康の命を奉じて兵を出し、其鬼怒川を渡るを待つて後より之を擊たんことを計る。家康之を知らず、二十四日下野の小山に入り、秀忠は已に宇都宮に至つて、初めて鳥居元忠が三成等の暴發を報ずるの書に接し、則ち福島正則・黑田長政・細川忠興等の客將を召きて狀を告げ、且つ其志を問ふ。衆皆曰く、

唯だ内府を助けて三成を誅せんのみ。妻子は顧みる所にあらずと、また旗下の將士を集めて事を議す。井伊直政・本多忠勝・酒井家次、極力三成を擊つて、直ちに天下を取らんことを主張す、家康沈吟して決せず。直政疾聲して曰く、公若し此に出でず、徒らに箱根を守つて偸安せんと欲せばまた再び見えざるべしと。袖を拂つて出づ。家康沈思熟考する久しうして、また直政を招きて議を交ふ。已にして秀忠使を發して之を贊す。家康遂に意を決して三成を先にせんと欲し、先づ客將をして上國に向はしむ。福島正則・池田輝政先鋒たり。井伊直政・本多忠勝監軍たり。別に子秀康をして宇都宮に據らしめ、傍近諸侯をして城郭を修繕して景勝の追躡に備へしめ、別に政宗をして兵を案じて動かず、景勝を控制せしめ、秀忠をして中仙道より進ましめ、自ら東海道より進まんとし、形勢を窺ふ。

三成、家康兩軍の形勢

此時に方つて三成の黨與已に進んで美濃に入り、其の南北東西交通の要衝たるを以て、全力を盡くして之を略し、其の二十二城中已に十七城を取り、大垣・岐阜・竹ケ鼻・犬山に據りて尾張に迫る。已にして八月十四日、家康黨の先鋒諸將、悉く尾張の清洲に入り、家康の來るを待つて戰はんとして、空しく對峙す。家康、猶ほ彼等を信ずる能はずして、狐疑躊躇し、萬全の形勢を見ずんば發せざらんとし、使を發して曰く、速に開戰して三成等に黨せざるの實を示せと。諸將乃ち先づ岐阜・竹ケ鼻を攻めて之を取り、犬山を下し敵軍を追うて赤坂に入り、大垣を壓し、家康の本營を岡山に定め、火を放つて垂井・關ケ原を燒く。三成、其必ず佐和山に向はんとするを察し、則ち大谷吉繼・脇坂安治等をして、關ケ原の西南を扼せしむ。毛利秀元・吉川廣家また來つて南宮山に陣して、家康黨の陣營を俯瞰し、秀秋は松尾山に陣す。家康江戸にあり、下野・常陸の黨與に對しては、景勝若し來らば直ちに出でゝ助けんと云ひ、先鋒の客將に對しては速に上國に上るべしと云ひ、兩端を持す。今や岐阜・犬山を取るの報に接し、則ちこれを政宗等に報じ、急に秀忠は中仙道より、自らは東海道より、美濃に進む。九月十四日岡山の本營に入るや、家康黨の軍氣大に揚る。此時家康の全軍七萬人、三成の全軍七萬九千、數に於ては略ぼ匹敵すと雖も、三成の軍は早く已に弱點を示したり。天下の信用家康に歸するは之を云はず。三成の黨與にして最も戰に長じて頼むべきは、浮田秀家と大谷吉繼とのみ。毛利輝元は大阪にありて吉川廣家の爲に沮まれて來らざるなり。毛利秀元は其兵一萬六千人あり。秀家に次ぎて最も大兵を擁するものにして、而して吉川廣家の爲に制せられて戰ふ能はざるなり。小早川秀秋は一萬五千六百人の大兵を有するものなり。而して彼また形勢を觀望して戰志なきのみならず。また後より三成を襲はんことを家康に約し、三成をして秀秋を危みて、其の最も恃む所の驍將大谷吉繼をして家康に備へずして、秀秋に備ふるの已むを得ざるを感ぜしめたり。佐和山に向ふの道を扼したる脇坂安治も、已にまた内應を約したり。故に三成の軍七萬九千と稱するも、戰志あるは四萬六千

人のみ。加ふるに島津惟新の如きは其初め家康に屬せんとして、勢に卷かれて、三成に黨せる者にして、戰志薄く、且つ三成、聲望闊閲あるにあらずして、全軍の牛耳を執るがため、號令は號令にあらずして依頼となり、號令と云ふや、其命を奉ぜざる島津惟新の如きものあり。故に戰はずして勝敗の數已に明かなるものありき。

關が原の戰、三成黨大敗す

家康形勢を案じて曰く、敵軍遂に大垣を出でざるべしと、則ち池田輝政・淺野幸長等をして大垣に備へしめ、大軍佐和山に向うて之を屠り、直ちに大阪に入らんとす。三成之を聞き全軍を關ヶ原に集めて要擊せんと欲して、夜窃かに發し、北國街道の口を扼す。家康之を聞きまた急に其後を追うて進み、家康の先鋒正則の兵と、三成の後陣とは殆んど相接するに至る。家康、桃配山に陣し、福島・加藤・藤堂・田中・黑田等の客將をして、主として敵に當らしめ、家康の麾下遙かに後に陣す。已にして九月十五日の曉、先鋒、福島正則の未だ戰を開かざるに先だち、井伊直政、列を犯して前進し、浮田直家を擊つて戰端を開く。此より福島・井伊の二將は浮田に當り、藤堂・京極の二將は大谷に當り、織田・吉田・佐久間・船越は小西に當り、黑田・加藤・細川・田中・金森・竹中の諸將は石田に當る。三成の諸將皆能く戰ひ、家康の諸將數ば擊退せらる。殊に三成の本隊五千人、最も勇猛、黑田・細川・加藤・田中・戸川・生駒・藤堂・京極の入將、百戰の勇、五倍の兵を以て、これを攻めて勝たず。三成、毛利秀元・小早川秀秋を招かんとして、豫じめ約するところに從つて烽火を擧ぐ。二人遂に來らず。家康、秀元・秀秋の二人が、遂に三成に加はらざるを見るや、則ち本多忠勝をして、兵を放つて前隊を助けしむ。小西・浮田の二隊、これがために敗る。家康、猶ほ危疑して自から戰はず、秀秋が後より三成を襲ふを待つて動かんとし、麾下の士久保島孫兵衞をして試みに銃を發して秀秋の營を擊たしむ。秀秋已むを得ずして動き、横さまに大谷の隊を衝く。脇坂・朽木の諸將、また三成に背きて藤堂高虎に應じ、大谷の前隊を擊つ。吉繼逆擊して秀秋の兵を敗る、然も大勢遂に支へざるを見て自殺す。家康勢に乘じ麾下をして突喊せしむ。全軍之に應じ軍氣爲に十倍し、進んで小西・浮田を走らしめ、悉く石田・島津の二隊を掩擊す。二隊能く戰うて屈せず。已にして三成の部下、力盡きて走る。島津惟新則ち將士に命じて曰く、四方皆敵にして走路なし。家康の陣を斬つて死せんと。衆皆諫止す。則ち走路を前方に開かんと欲し、記章馬標を去り、全軍を一團とすれば一千六百の衆半ば已に盡く、則ち東南の敵を衝く。福島・小早川・本多・井伊の諸隊合擊して已まず、豐久以下、亂軍中に死し、惟新が圍を脱し得たる時は僅かに八十人を存するのみ。則ち牧田川を渡り、多良より近江に出で、國に歸る。長曾我部・安國寺・長束・毛利秀元等、これを聞きて皆走る。こゝに於てか、家康急に冑を着く。衆之を怪む。曰く、諺に勝つて冑の緒を締めよと云ふは、殆んど今日の謂なりと、衆凱歌を唱へんことを乞ふ。

秀秋、秀秋の命なり。今日三成に背くは、豐公に報ずる所以にあらずとして傍觀して戰はず。

佐和山は正三成の父正継、兄正澄の重家なり。澄は三成の子なり。諸將の能く守るべしと。秋の戰なり。諸將の力破れ、或は盡き、或は自殺し、或は戰死し、其將は清幽す。曾て家津田に屬せず、者也。奮闘屈せず、誘降に拒絶す。安治陽に及び、城主なり。脇坂安治は士なり。其人共に賞し、慨なりとして士賞なり。其人共に薫し、悠々として行く。家康敵に降す、中を以て招きて行く。之の降す、三成の深かるべし。士心なり。

家康曰く今や大敵已に走ると雖も、諸君の質、猶ほ大阪にあり、大阪を占有して而して後凱歌を唱ふべしと。則ち小早川秀秋・脇坂安治をして、内應の期に後るゝの罪を償はしめんがため、井伊直政の監軍の下に佐和山城を攻めて之を取らしめ、且つ書を發して輝元に告げ、家康、輝元に介然たる所なしと云ふ。秀元、南宮山より走つて大阪に入り、輝元を勸め秀頼を擁して戰はしめんとす。輝元聽かず、吉川廣家の策を聽き、家康を避けて木津の邸に入る。後陽成天皇、家康の勝利を聞き、勅使を近江の草津に發して之を迎へ、其京師に入るや、公卿爭つて其門に集まる。之より家康大阪に入り、大に功を論じ、賞を行ひ、行長・惠瓊・三成を執へて之を斬る。

景勝以下、家康に服屬す、

之より先き景勝の衆、家康の上國に上るを聞き、兵を發して之を追擊せんと欲す。景勝、政宗の其虚を衝かんことを恐れて聽かず。已にして秀康宇都宮より戰書を發して之を挑むや、景勝之を却けて曰く、子、年少くして兵少なし我敵にあらず。子、糧を缺かば我能く之を分たんと。また最上義光に黄金二萬兩を送りて之を誘ふ。義光、家康に心服して聽かざるや、景勝則ち先づ之を夷げんと欲し、四萬の兵を擧げて之を攻む。義光二十五塞を作りて伊達政宗と相應援す、兼續力戰其二十一塞を取り、將に上の山・長谷の兩城を取らんとするとき、關ヶ原の敗報を聞き、兵を收めて歸る。此他越後にありて、宇佐美勝行・蜷崎景則等の土豪兵を起して四方に轉戰するあり。越前・加賀にありては丹羽長重は三成に黨し、前田利長は家康に黨して、小松・大聖寺に戰ひ、伊達政宗は白石城を取り信州にありては眞田昌幸其子幸村、上田を守りて秀忠の軍を遮つて、十日の間、之を逗遲せしめ、秀忠爲に關ヶ原に會戰する能はず。豐後にありては、黒田如水、兵を募つて五隣を攻伐し、大友義統は三成に屬して四方を攻めて如水と爭ひ、肥後にありては加藤清正、小西の虚を擣きて其地を併せ、筑後にありては鍋島直茂、立花宗茂を攻む。已にして關ヶ原の報に接するや、景勝和を乞ひ、眞田幸村・島津も亦降り、天下初めて平なり。

家康、府を江戸に開く、征夷大將軍の任官

此に於てか、家康新に幕府を起さんとして地を相す。關ヶ原の勝利は客將の力なりしと雖も、家康は關ヶ原以北の勢力を疑ふ能はざりき。地を以てせば京畿・大阪は守るの地にあらず。兵を以てせば中國・四國の兵は不破の關以北の兵に如かず。況んや家康、江戸に移りて以來、所謂八州の形勢、守るに天嶮あり、居るに天富あり、士心悍強にして贅實、名節を砥礪し、義理を重んずるの風あり。頼朝以來覇者の此に居りしもの偶然ならざるを見たり。是れ秀吉が京攝中國を來往して功を爲し、其の天下の要樞たるを知覺したると、各〻著眼の點を異にするが故なり。此に於てか遂に幕府を江戸に定め、また其親族を要地に封じて、天下の勢を制せんとし、秀康を越前に封じて北道を鎮せしめ、忠吉を尾張に封じて海道を固めしめ、爾來事に觸れ、機に投じて客將を僻地に

驅り、譜第を以て要地を占めしめ、秀吉の廟に萬石を寄附し、三千四百石を延暦寺に、二萬石を高野山に、三千石を圓成寺に寄附し、皇室・公卿の領田を增加して、以て禍亂の源を塞がんとす。彼未だ征夷大將軍たらずと雖も、事實に於て已に大將軍なり。缺く所は名義のみ。併も彼は、秀頼の存するを以て、禍亂關ヶ原に止ると爲す能はず。關ヶ原の客將、多く三成を憎みしを以て己に黨するも、一旦秀頼の天下を奪はんとせば、多少の騷亂を免れざるを知りて、暫らく虛名を避く。故に慶長七年正月諸侯江戸に會同して、明白に家康が天下の主たるを認證せんと欲するも家康辭して受けず。前田利長最も慧敏にして家康謙退の情僞を察し、則ち强ひて江戸に入るや、諸侯相繼いで江戸に會同す。此に於てか翌年二月家康遂に征夷大將軍となり、右大臣を以て淳和奬學兩院別當、源氏の長者たり。家康深く古今の國主、多く己の身に及んで繼嗣を立てず、身死するや其子をして孤立せしめたるを見て、則ち早く繼嗣を立て、威力を附し、之を仰ぐこと己と同じからしめ、身死するも天下を動搖せざらしめんと欲し、慶長十年、征夷大將軍を其子秀忠に讓り、駿府（駿河國靜岡）に城きて此に居り、猶ほ大事は自ら督す、此に於てか徳川氏の覇業全く成る。

第二十五章　徳川氏の盛世（神武紀元二千二百六十六年より二千三百七十六年に至る）

封建成つて平人安康を得、產業進む

關ヶ原大戰の前後に方つて武士浮浪の時代已に去つて、封建撫御の勢益々固く、諸侯多く競うて人民を招撫せしがため、平人漸やく其士に安じて產物益々增加し、加ふるに、葡萄牙・西班牙・和蘭の貿易船の來るもの益々多く、支那沿岸の貿易もまた發達し、且つ東西南北の大征戰は道路を作り、交通を便にし、秀吉の好大政策は內國の航路を開き、政權の强固なるにより て海賊を平げて、退劍を減ぜしかば、產業勃々として起りぬ。且つ國內銀を產するの地は、石見と佐渡にして、鐵は中國の山より出づるものを頼みしも、其產額多からざりしに、家康に至り、毛利・上杉の手より此二鑛を取り、大久保長安をして採金せしむるに及び、產額大に增加し、獨り銀のみならず、黃金をも出すに至り、是より金銀山を探檢する者に命じて地方を開發せしかば、其產出の額驚くべきものありき。また民間の賣買は足利氏以來、明の永樂錢を用ひ、後鐵を以て錢を鑄り、鐚錢と名けて永樂錢と交用し、其四個を以て永樂錢の一に更へしが、慶長十一年永樂錢を禁じて鐚錢を專用せしむるに至り、民間猶ほ永樂錢を愛するや、則ち銅・銀二種の慶長通寶を鑄造して、永樂錢を驅逐せしめたり。

*佐渡は初め大久保長安に銀を出さず、石見に至りて銀を出し、毛利の時金を出さず、佐渡に至りて金を出す。長安は慶長六年前後、毎年七百九十萬貫の金を出す。石見枚の銀を出すは四千貫の金を出す。

また秀吉多く金・銀を蓄へて軍國の變に備へんとし、金を鑄て千枚分銅なるものを作り、一個凡そ鈑金一千枚に當りしが、秀頼之を鑄て通貨を作りしかば、此等の貨幣は或は城池の築造費*として、或は諸侯宴遊の費として、或は寺院修繕の費として民間に流布せぬ。此の如く社會の富榮便宜の增加するに從つて、和平の氣、融々として四方より湧き來り、加ふるに木綿の產出益〻盛んにして、寒冷なる麻衣に代りしかば、生活の快樂も加はりぬ。已にして猪熊侍從以下朝廷の公卿、後陽成の寵姬長橋局以下の徒と姦するあり、朝廷の中、黨を分つて相爭はんとせしに、家康宮中の腐敗由る所ありとなし、強ひて之を窮めず、以て公卿の間を和睦せしめ、慶長十六年後陽成の太子を立てゝ後水尾天皇とせしかば公卿家康の寛大を悅び、萬民皆思へらく北條氏以來の治平得て求むべしと。早くも鼓腹の樂を期したる者ありき。然れども天下之を喜ばざるものあり。則ち秀頼・淀君を中心とする大阪の一黨なり。

淀君の人物、家康之を激發す、大阪兵を擧ぐ

淀君巧慧多才にして美貌あり。秀吉の寵愛を一身に集む。秀吉の死するや年僅かに二十二。才色双絶の女にして、豐臣氏の權勢を一身に集め、子は少にして夫なく、媚附佞巧の徒に圍繞せらる、過なきを得べからず。況んや淀君、貞節自ら保つの家妻にあらず。其辯才は以て武人を役すべく、其誇榮心は以て冒險者を嘉ばすべく、其智見は以て老雄家康の秘密を摘發するに足るべく、殆んど佛王の寵姬ポムパドール|に比すべき政治的婦人なるをや。彼女を役するに沈

*家康慶長十一年正月を以て、大江戸城を營み、役を諸侯に課す。

*江戸城の建築に用ひし石、銀二十枚ひ、ごろた石一箱に對して金一箱を拂へり。

重・嚴肅の士を以てすれば、その辯才・名譽心・智見は、以て內を助くべく、以て外を飾るべく、殺伐野鄙なる武人社會に、一個の高尙溫雅なる感情を與ふべかりしなり。然れども不幸にして彼女は徒大自ら樂しみ、放縱制縛なき秀吉の妾たりしがために、其才をして邪佞に走らしめ、秀吉の死するや、また詔諛、巧佞の徒に圍繞せられて、遂に傲慢放恣自ら制する能はざる驕婦となり、大野治長に私す。治長輕躁、淀君の愛を負ふを誇り、威權を專らにし、豐臣氏の再興を以て自任す。淀君また嫉妬の念に富み、諸將にして婦人を愛するものあるや、自家の夫嬶が他の婦人を愛するが如くに、妬悍し、往往諸將、部屬の內事に干涉す。今や此の妬悍、輕躁の男女は、家康の威權漸く豐臣氏を壓するを見て之に平かならず、家康と相抗爭するの機會を窺ふ。況んや三成・行長・長盛等、關ヶ原の役を企てしもの、皆淀君の黨にして、一敗地に塗るゝや、其敵手加藤清正・淺野幸長等の權漸く大に、之と共に此兩將が、其親近する所の夫人杉原氏の聲望漸く高く、家康も、また杉原氏平靜の性情以て和平を爲すべきを知りて之と親近す。故に關ヶ原以來、淀君益〻志を得ず。已にして慶長十一年、杉原氏一寺を東山に建てゝ、秀吉の冥福を祈る。福島正則・加藤清正之を助けて工を竣へ、高臺寺と稱す。之より杉原氏を高臺夫人と云ふ。淀君之と競うて、方廣寺を建てんとす。西南諸侯また之を助く。乃ち使を發して家康に其工を助けんことを乞ふ。家康退けて曰く、東大寺は聖武帝の勅願寺なり、僧重源の之を修め

慶長十年、此頃南島より輸入し來る、煙草は內九州に植ゑ、大後に盛に作り、後令なし、下して之を賣るもの、百姓は三十人、町人は五十日、自分兵糧にて其日、牢舍たるべく、同鄉の者百姓一人に過料として百疋代官に出さしむ。然れども五貫目は遂に止むる能はず。

京都の商人、角倉了以、父子、技工に長じ多く畿内の水運を計る。慶長十二年四月、越前の國守、德川秀康の死す。近臣、永見右兵衛長之、土屋左馬助殉死す。家康之を聞き、殿命じて殉死を禁ずるも、若し犯すものあらば其家門を亡ぼすべし、と言ふ。是より殉死の風衰ふ。十四年二月、藤堂高虎、秀忠に勤めて諸侯の重臣に質として江戸に收めしむ。之を人質と云ふ。高虎の首として其質を納る。二月、島津家久、德川氏に請うて、琉球を擊つ之を取り其主を擄へて江戸に上る。十四年七月、公卿、宮女を姦する者あり。天皇、德川氏に命じて其罪を治めしむ。之より公卿を黜陟するの權德川氏に移る。

んとするや、鎌倉覇府之を助けず。況んや方廣寺は一豐臣氏の家事のみ。天下の主たる者に於て何かあらんと。大阪の諸黨益々家康に平ならず、私かに諸道亡命の士を養うて世變を待つ。家康が京都に置く所の所司代板倉勝重、人をして浪士と稱して大阪に入らしめ、其情僞を探りて之を家康に報ず。家康之を夷滅せずんば長く禍根たらんとするを思ひ、遂に意を決して之を激發せしめんとす。十九年七月方廣寺成る。秀頼自ら之を落せんとし、儀衞供張皆整ひ、諸侯朝官、皆之に會せんとして、道路に充つ。僧侶、家康に佞して鐘銘に家康を呪詛するの文字ありとなす。家康、羅織附會し、怒を粧うて曰く、是れ家康を呪うて命を縮めんとするものなりと、急に命じて其慶會を止む。大阪片桐且元をして百方哀訴せしめ、其他意なきを辯ずるも聽かず。淀君また二尼を使として其意志なきを辯ず。家康二尼を待つこと極めて厚く、且元を責むること愈々急なり。遂に之に言つて曰く、鐘銘の事は之を容さん。但だ浪士を招き、兵備を整ふるの一事は決して容すべからず。知らず汝何を以て秀頼の異志なきを明さんとするかと。且元家康の欲する所を問ふ。家康答へずして曰く、是れ大阪自ら計るべき所なりと。且元恐懼して歸り、道に二尼に會うて曰く、大阪の情僞惡く現はる。鐘銘の如きは口實のみ。今に及んで斷ずる所なくんば、故太閤の業遂に保つべからざらん。第一策は秀頼公をして江戸に移らしむるなり。第二策は暫らく江戸に遊びて、其戒心を減ずるなり。第三策は大阪城を避けて他に移るなりと。

之より先き且元、大阪と江戸との間を圓滑ならしめんとして婚を本多正信に結びしかば、大阪の諸黨久しく其異志を疑ひしに、今や兩尼家康の己に對するや、歎然として他語なきに獨り且元の倉皇するを見て、益々且元、江戸と相通ずるを疑ひて之を淀君に告ぐ。淀君大に怒り且元を族滅せんとし之を治長に計る。時に秀頼の領する所六十五萬七千四百石にして百萬石と云ふ。治長天下の形勢を速斷して曰く、今や家康頻りに土木を起して諸侯を苦しめ、福島正則の如き、其築城の負擔に苦しみて、暫く肩を息はせんと言ふや、家康盛怒して、負擔を厭はゞ國に歸り兵備を嚴にして、以て征伐を待てと言ふに至り、萬民皆之に苦しむ。宜しく此機に乘じて、大事を擧ぐべきなり。大阪の領する所百萬石、金城湯池の固、以て天下に當るに足る。況んや故太閤殿下の遺恩、猶ほ天下に遍し。一たび檄を傳ふれば、天下皆動かんと、淀君遂に意を決して、織田長益・渡邊糺・木村重成・薄田兼相以下の將校を會して、日夜攻守を議し、先づ且元を殺さんとす。且元、之を聞きて走る。則ち諸侯に檄し、且つ兵を發して堺市を攻めて、其財貨・彈藥・銃器・刀劍・米穀を奪はしむ。四方の亡命の壯士、冒險變を待つの徒、皆先を爭うて大阪に集る。長曾我部盛親・眞田幸村・毛利勝永・大谷吉胤・福島正守・正鎮・明石守重・仙石宗也・塙直之・後藤氏房等其中にあり。日ならずして城中の壯丁、六萬人あるに至る。然れども伊達政宗は其使を縛し、島津家久は使を卻け、幷に之を德川氏に告げ、前田・加藤・黑田の徒皆應ぜず。唯だ

十五年本多正純書を黐建の總合印を求へて、勘合貿易に許す。また應天府の印を求む。商人周性如に朱印を與へ日本國中の何れの地にありとも、貿易するを許す。

慶長十五年京師の商人朱屋王咸ノビスパンに渡りて貿易し、猥々緋を携へて歸る。十六年田中勝助なる者また渡航して羅紗、葡萄酒を携へて歸る。ノビスパンは北米新イスパニヤ也。

十七年京師の大佛成る、費所、四萬二千三百四十枚、銀二萬三千十金七板倉勝重、將軍の命を奉じ、京師の耶蘇教會本を破却す。また旅人十人を一組として耶蘇教徒を擒にして嚴禁を加へ、原榊原兵衛小笠原壱岐守等をして耶蘇教徒を追放せしむ。原之信ばるを以て蘇教を信ずず。

十八年八月、明人秦羅を獻ず。

福島正則五萬石の米を貸したるのみ。大封を有するの諸侯一人之に應ずる者なし。故に全軍を率ゐるの號令なく、策略は策略に消され、建議は建議に消され、首領なく、統一なく、早く已に敗兆を示す。然れども城中の壯士、皆關ヶ原敗軍の汚名を洗がんとするの雄心勃々として已まず、大阪城の東南今宮・天王寺に至るまで、三里の空濠を穿ち、其岸に一大石壁を作り、東は大和・木津の兩川を導きて、志貴野・今福・鷺島に及ぶまで、水を田に湛へて沼を作り、砦を船場・天滿・阿波座・中島・野田に作りて互に應援せしめ、淀君また娘子軍を作り、躬ら甲を環し、馬に跨り、諸軍を巡撿す。

大阪敗北して和す

之より先き、家康已に大阪の變を聞きて、令を諸侯に下して兵備を整へしめ、東海道の諸侯は勢多に集り、北陸道の諸侯は大津に集り、四國の諸侯は和泉に集り、中國の兵は池田に集り、以て家康の命を俟たしむ。已にして家康は奈良より住吉に出で、進んで天王寺に陣し、秀忠は伏見より平野に出づ、東西南北の兵集るもの五萬人、四面圍を重ね、土を以て山を築き、樓臺を起して城中を瞰下して銃擊せしむ。家康兵を用ひずして秀頼を降さんと欲し、數ば使を發して和を促がす、秀頼依違して決せず。已にして諸砦多く敗れて、城中漸く恐る。家康則ち擄ふる所の侍女阿茶局をして城中に入り淀君に會して和を說かしめ、また人を更へて入つて和を說かしむ。城中已に諸侯の外援なきに絶望せし時なりしかば、乃ち和して以て家康の死を待たんとして遂に外濠を塡し、外壁を毀ち、籠城の將士の罪を問ふなきを約して和を乞ふ。時に慶長十九年十二月二十三日なり。徳川氏則ち急に壁を毀ち濠を埋め、遂に約に背きて二の丸の隍を埋む。淀君憤恨、之を責むれども及ばず。

大阪の再興、秀頼淀君自殺す

然れども大阪は長く平靜なる能はざりき。關ヶ原敗北者の子弟遺臣は、必ず家康を覆して甘心せんと欲して已まず。天下縱横の心ある浮浪、耶蘇教を信ずるの士は、悉く徳川氏の鎭壓令の爲に一身天下に容るゝの地なく、爭亂を起して新運命を作るの外、活路あるなく大阪城の外、其目的を遂ぐるの地なきを見て、交も相煽揚して事を起さんとす。此に於てか前役を去る未だ三月に充たざるに、大阪また私かに兵備を修めて浪士を募り、十五萬人を得。則ち前年徳川氏の作りし陣營を破却し、前年の空濠、石壁を復興せんとすれども、事倉卒にして及ばず。則ち舊濠を穿つ二尺餘にして、これに副ふるに柵を以てす。淀君、前敗に懲りて戰意なし。獨り秀頼、憤慨、熱中必ず死生を賭して戰はんとし、幸村・氏房等に言つて曰く、余武事に習はず、死期に至るも恐らくは知らざらん。公等余をして死期を過たしむる勿れと。兵を出して天王寺を守らしめ、必ず此處に死せんと甘心せんとし、暫く天下の物議を省みて、之を放ちしのみ。再擧は意外の變にあらず。令を諸侯に下して徐かに兵を集む。會するもの十五萬人。行く〳〵大阪黨の兵を破り四方より迫る。家康先づ天王

英人に貿易を許し、何れの港灣にても入るを許し、江戸に家を立て、住居するを許る。英人の犯罪は其官吏に一任す。

十八年十二月、之より先き政大久保忠隣、本多正信と鄰あり、人あり、これを讒して、大久保長安の徒にして、耶蘇教を以て、徳川氏を傾けんとするを云ふ。即ち忠隣なして耶蘇教徒を擒殺せしめて、之を試み、遂に忠隣を退く、之より正信の機愈よ大也。

元和二年八月安南の商船來る朱印を與ふ。

寺を取らんとし、藤堂高虎・井伊直孝をして先鋒たらしむ。元和元年五月七日、戰を開く。幸村・勝永・氏房・重成等の城將、殊死して戰ひ、數ば家康の軍を破り、本多忠朝・小笠原秀政を殺し、猛烈無敵の名ある直孝も、また之を破る能はず。城兵進んで中軍に迫り、秀忠の麾下を斬るに至る。已にして城中流言す。叛者あり、内より火を放たんとすと。城兵大に驚きて退走し、狼藉の間死者一萬五千人に至る。家康の軍之に乘じ四方齊しく進み、城を攻む。城兵猶能く戰つて數ば之を擊退す。然れども大勢遂に支へず、逃亡相續く。衆或は和せんと欲し、淀君また秀頼の妻、秀忠の女たるを幸として之を質として和せんと欲し、其袂を執へて須臾も放たず。已にして左右家康の爲に買はるゝ者事に託し之を擁して去る。八日淀君則ち和を請うて使者往復周旋する間に、井伊直孝銃を城中に放つて和志を絶たしむ。此に於てか秀頼等、和議の望なきを見て遂に自殺す。時に秀頼二十三歳、淀君三十九歳、男女殉するもの三十二人。之と共に火起りて城亡ぶ。德川氏其遺類を求めて、悉く之を殺す。之より先き加藤清正、節義ありと稱し、江戸に往來するごとに、必ず秀頼を省す。人之を止むるや、則ち言ふ、是れ舊恩に報ずる所以なりと。而して變起るや、此節義漢も遂に恃むべからずして、德川氏の統治の下に太平を樂しみぬ。

元和二年八月令を出し、關東の渡船場を定め、渡船する負人、禁の外じ、婦人を止めて、江戸に注進せしめば、江戸に向ふもの檢査せざらしむ、或は云ふ秀頼、私に舟によりて逃れ薩摩に走ると。

藤原の惺窩、林羅山、文敎の興隆、宋學武士の學となる

之より先き關ヶ原の一戰に天下の向背を定め、和平の氣、進歩の象、融々として起るや、家康、文敎を起して兵革の氣を銷さんとして所在書を求め、學者を延く。當時應仁以後の大亂を承くと雖も、進歩の氣は已に潛み、毛利氏の末、明と交通を開きしより、文學漸やく其芽を萌しつゝありしが、明人多く科擧の制より朱子說を奉ずるが爲、僧侶商賈が明人と接して得る所の儒書は多く四書の新註なりき。時に冷泉爲純の子、藤原の肅、少にして僧として播磨の龍野に居り、後、京都に出でゝ相國寺に入り、廣く典籍を見て、遂に佛敎の正道にあらざるを悟りて儒に歸し惺窩と號し、明に入つて道を問はんとし、風濤に遇うて果さず。其後、儒名益〻高く一代の士人仰ぎて先生と爲す。豐臣秀次、五山の詩僧を會するや、肅を招きしに辭して至らず。曰く物は類を以て集まる、儒は佛に交らずと。德川家康、曾て一たび之を招きて大學を講ぜしむるや、肅座に上りて沈默する良々久し。左右之を促がすや、則ち曰く、大學は治國修身の大道なり。大道を開かんと欲して、公の衣冠正しからざるは何ぞやと。家康起つて衣服を整ふ。肅は獨り朱註を信ずるのみならず。其狷狹、偏介、自ら高しとするの風を示すに於て、また宋儒の風を傳へたり。然も此の偏介自尊の風は、武力の外、何ものを知らず、茶の湯の外、何の禮法をも知らず。袒赤、大食、以て自ら得たりとする武士を馴致するに、最も適當なるものなりき。故に家康已に大將軍となるや、則ちまた肅を招きて學を講ぜしむ。肅の弟子林信勝*また出藍の才あり、博聞宏識、能く其學ぶ所を以て、家康

元和五年六月、福島正則の領邑安藝・備後を奪つて、其子に津・人・輕・の四萬五千石に・幕府・興・の許可・修・郭・に・久・もの・忘・せ・よ・く・豐・臣・氏・に・ど・の・時・大・阪・陣・に・助・く・る。

元和二年二月、姫路城主池田輝政曾て秀頼の女を娶し、大多忠利の子忠政を改めて濃守忠政に嫁せしめ、利政の化粧料として十萬石を與ふ。石見・津和野・萬石・坂崎・出羽・守・親・孝・奪・奥・幕・府・之・を・諭・せ・ど・も・聽・か・ず・則・ち・孝・之・を・殺・す・。其家臣聽せず、自殺せしむ。孝親の家臣殺せしむ。孝親の家臣殺せず、また殺聽せず。

二年十二月、談伴衆なる者を設け、將軍の故老を集めて談列せしむ。侍

*信勝羅山と號す。

を助く。家康令を下して天下の遺書を求む。之より諸侯靡然として競うて學に嚮ひ、兵革の氣日に消ゆ。是れ兵器を集めて鎔解し、以て兵革の氣を銷さんとせる秀吉の未だ曾つて知らざる所なり。而して藤原肅・林信勝等、皆宋儒性理の說を奉ぜしかば、鎌倉以來、武士の學たりし禪學、遂に廢つて、宋學之に代つて武士の學となる。

家康の法令、銷武の手段

文敎已に漸く起らんとするや、家康また高野山に遯れたる細川幽齋を招きて法令を質す。幽齋は足利義昭に從つて流離せる藤孝なり。和漢の文學に通じ、古典に明かに、武士の心に通じ、親しく足利氏の末路を見て、信長・秀吉の制度を實見せり。故に家康は彼によりて、王朝・鎌倉・信長・秀吉の法令制度を折衷參酌して、以て時務に應ずるを得たり。而して僧南光坊天海あり。傑猾の才を以てまた家康を助け、能く公卿・朝廷を制するの術を敎ふ。故に家康は此二人に於て、叔孫通と大江廣元を得たりき。斯くて家康が出したる法令の第一は、諸國の武家たる者は、賴朝以來代々公方の法式を守るべく、江戸より發する條目は、益々堅く守るべく、法度に背き上意に背く者は、諸侯之を掩蔽せず。諸侯の養ふ所の侍以下、若し弑逆殺害の罪ある時は、諸侯互にこれを容るゝを得ずと云ふにありき。彼自ら源家の正統と稱し、右大將以來の法令を守るべしと言ふ。彼が源家の正統たりや否や、知るべからず。然れども彼は精神に於ては、確かに賴朝の後胤たるものあり。彼は北人を以て天下を取り、北方によりて天下を制せんとし、平氏・藤氏の如く近く天皇に迫らずして、遠く天皇を控御せんとし、民政に注目して民心の上に其政府を立てんとし、士氣を勵まし、名節を磨かしめ、質素と、積威と、武斷の力によりて天下を經營せんとす。其手段の周密にして强硬、沈著にして厲刻なるは、鎌倉以來唯だ一人あるのみ。彼は更に南方諸侯が武備を以て相競ひ、城郭を修め大艦を造るを以て、統一に害ありとして之を禁じ、大艦巨舶を沒收せぬ（慶長十四年九月）。寺院の新建は天下の財を盡くして、禍亂を招くの恐あるを以て、之を禁ぜぬ。之より武家の法度を定め、文武弓馬の道を勵まし、群飲迭遊を禁じ、他國の侍を藏するを禁じ、新たに城隍を起すを禁じ、其修補も必らず認許を得べしとなし、新制を希うて徒黨するを禁じ、諸侯の私婚を禁じ、大名の江戸に勤仕するや、百萬石以下二十萬石以上は二十騎以上を引率すべからずとなし、幕府の特許を得ざるものゝ著くべからざる衣服を定め、勤儉を勸め、さらに禁中方御條目十七箇條を作りて、天皇と將軍の關係、公卿・寺院の守るべき法規を立て、また公武法制十八條を定めて、幕府・諸侯・朝廷の際を規定す。是れ日本ありて以來、最も明確にして體裁ある憲法にして、成文憲法は此に初まると云ふべきなり。固より此より以前に於て、聖德太子の憲法十七條なきにあらずと雖も、是れ政治上の金言と官吏服務紀律のみ。眞に憲法と云ふべきものは實に此に初まる。

慶長十六年四月十二日の諸侯の誓詞